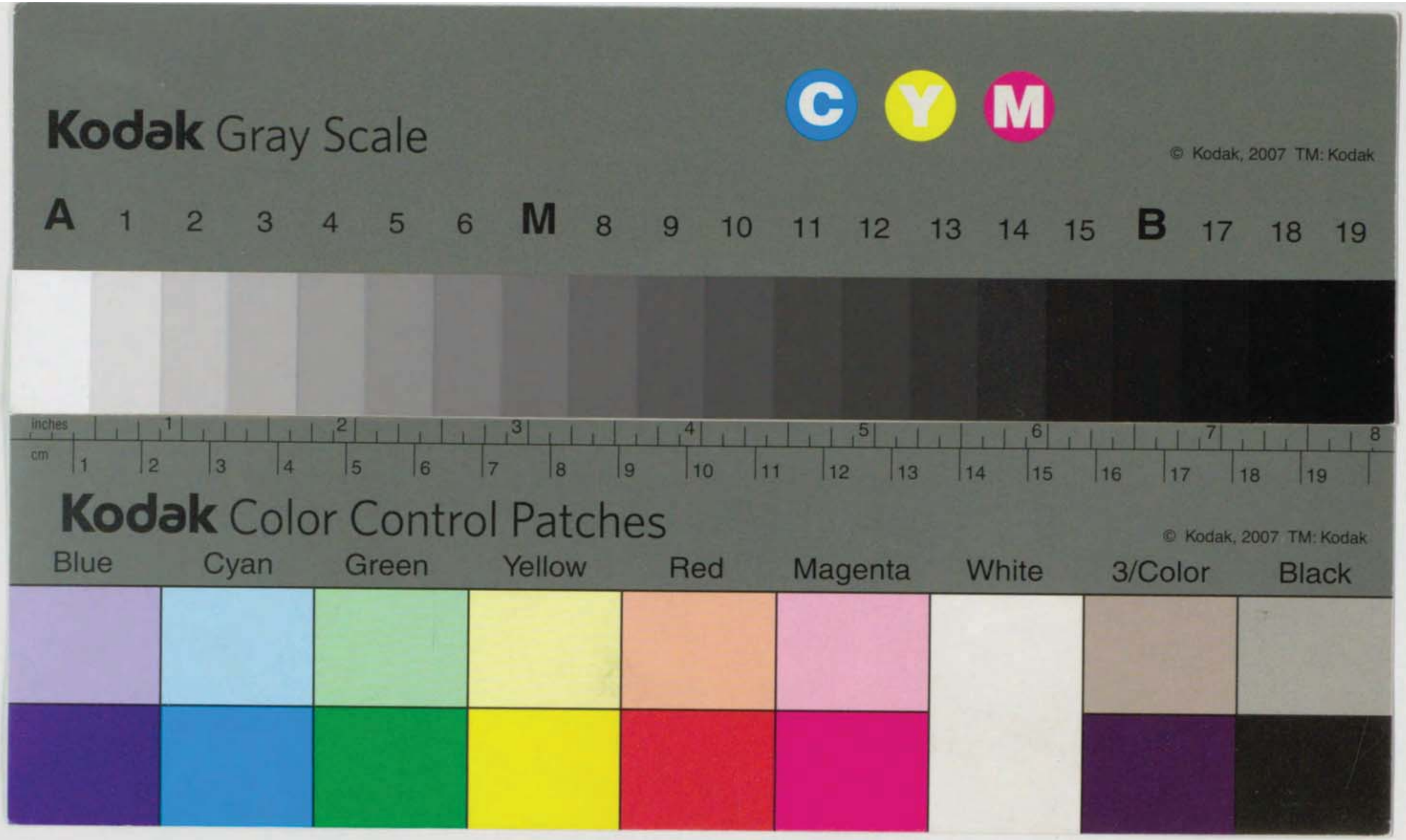

Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

國譯大藏經

四十八

國譯大藏經

第四十八册
（第十二帙之四）

法句經 (Dhammapada) 解題

長老偈 (Theragāthā) 解題

長老尼偈 (Therigāthā) 解題

譯者 立花俊道

巴利語の聖典は經律論の三藏より成り、經藏は長・中・雜・增一・小の五尼柯耶に分たる。小尼柯耶と稱するは屈陀迦波吒以下の十五經を含み、此に譯出したる法句經以下の五經は共に此の小尼柯耶に屬す。此等五經の中、法句經の一は我が國語にて世に紹介せられしこと、一再に止まらざれど、他の四經は本譯を以て國譯の嚆矢となすが如し。

諸經要集中の十七經の一部に散文を見るの外、五經總て韻文より成る。之を散文の國語に譯出したるために原文の重味を減殺したること幾何なるかを知らず。古人の例に倣ひて之を韻文に轉じ、簡朴にして莊重なる原文の意義を十分に寫したきは余が飽くまで希望する所なりしも、之は非凡の文才ありて始めて企て得べき事にて、余等の如き文藻の才乏しき輩の敢てし得べき所にあらず。よりて余は初めより之を企つる

ことを止め、全部譯するに散文を以てしたり。

一國語の書を他の國語に譯するの容易ならざるは、此が經驗を有する人の等しく悉知する所なるべし。忠實に原文の意を寫さんとすれば直譯に過ぎ、譯文を流暢にして了解し易からしめんと努むれば意譯に過ぎざるを得ず。原文に忠實にして而も了解し易き譯文を作らんとは實に至難の業たり。本譯の如く古代の文を現代の文に譯するに於ては此の難を感ずると特に切なるを覺えずんばあらず。本譯文恐くは不可讀の誹あらん、之れ一半は譯者の不文に出で、一半は此の飜譯難に出づ、讀者諸君幸に諒とせられよ。

【法句經】　本經は二十六品四百二十三偈より成れる、全部偈頌の小經文にして、古來言ひ傳ふる所によれば、此經は釋尊の在世中、縁に隨ひ機に應じて出家在家の弟子等のために說かせ給ひしを、第一結集の際、摩訶迦葉を初め五百の諸大長老の會誦したるものにて、爾來師より資に口づから傳授せしを、西紀前第一世紀中、錫蘭のヴッタガーミニー王の時、始めて筆錄せしものなりと云ふ。長老偈以下の諸經も亦同じく第一結集の際に結集せられ、ヴッタガーミニー王在位の時、始めて筆錄せられたるものなること、法句經と異ならずと言ひ傳ふ。

法句經は南方佛敎聖典中、最も通俗的なるものにて、本文及び佛音長老の之に附したる因緣譚、及び註釋は巴利文學を研究する上に於ても、佛敎的道念を涵養する上に於ても、古來初學者に取りて、最も必須の書として珍重せられしものなり。此の中或は深遠なる哲理を尋ぬべからずとするも、簡潔平易なる實際道

德訓としては、全經の偈偈皆然らざるはなきなり。之を稱して佛門の論語と云ふも決して過言にあらざるべきを信ず。

【長老偈・長老尼偈】 此等兩書は佛在世時代に於ける長老及び長老尼の作に係る偈頌を集めたるものにて、前者は一千二百七十九偈より成り、後者は五百二十二偈より成る、而して共に小尼柯耶に屬すること、此に譯出せる他の諸經と異ることなし。長老及び長老尼の中、或ものは一偈を遺し、或ものは二偈を遺し、或ものは三偈・四偈乃至七十餘偈を遺せり。之を其の遺したる偈の數によりて分類し、一頌品・二頌品・三頌品乃至大集品等と名く。斯の如く之を分類するに、作者たる長老、又は長老尼の年齢や、法臘の順次によらずして、其の誦出せる偈頌の數によれるは、一種の興味あるを失はず。偈頌の數の多き場合に於ける諸偈は、一時に誦出せられしものにあらずして、種種の異れる場合に誦したるを集めたるものの如し。例へば、四十頌品の摩訶迦葉の作とせらるる四十偈中、初の三偈は比丘等の羣集に混在し、在家に往來するを誡めて誦したるもの、次の四偈は比丘の四要具に就て、次の四は自己の日日の登山に就て、次は比丘等を誡めて、或は舍利弗の德を推稱して誦出し、或は自己に關して誦出したる等あり。或は又他の場合にありては、某長老又は長老尼の事を他人の誦せしを一緒に出せるも之あり。斯く復雜なる種類の偈の、某某長老、又は長老尼の作として、世に傳へられしを、後人の集めたるものにて、悉く佛の親口より出たりとせらるる聖典中、斯の如き偈集あるは、また一異彩たらずんばあらず。

此等兩偈の英譯はリス・デビツ夫人の手によりて完成せられ、『原始佛教家の讃歌』として世に流布せらる。但し此の飜譯は意譯に過ぎたる傾ありて、此の國譯には大なる助を與へざりしを遺憾とす。護法の長老尼偈の古註『最上義燈』は譯者の最も多く參考としたる所なり。

國譯法句經

彼の祥者、尊貴者、正遍覺者に歸命す

雙雙品第一

諸法は心に導かれ、心に統べられ、心に作らる、〔人〕若し汚れたる心を以て、言ひ且つ行はば、其よりして、苦の彼に隨ふこと、車輪の、之を挽けるものの跡に〔隨ふ〕が如し。（一）

諸法は心に導かれ、心に統べられ、心に作らる、〔人〕若し淨き心を以て、言ひ且つ行はば、其よりして、樂の彼に隨ふこと、猶影の〔形を〕離れざるが如し。（二）

「〔彼〕我を罵れり、打てり、敗れり、笑へり」と、斯る思を抱けるものは、其の怨解くることなし。（三）

「〔彼〕我を罵れり、打てり、敗れり、笑へり」と、斯る思を抱かざるものは其の怨解く。（四）

此の世に於て怨は怨を以てしては終に解くべからず愛を以てぞ解くべき、これ㈠永劫不易の法なり。（五）

「我等は此處に㈡滅ぶるものなり」と、㈢愚者は之を覺らず、人若し之を覺れば、其よりして爭息む。（六）

㈣淸淨觀を抱きて住し、㈤諸根を攝することなく、飲食に於て量を辨せず、怠惰にして、精勤足らざる者、魔王の斯る人を動かすこと、猶ほ風の弱き樹を〔動かす〕が如し。（七）

不淨觀を抱きて住し、諸根を攝し、飲食に於て量を辨

じ、信心あり、精勤なるもの、魔王の斯る人を動すとなき、猶は風の石山に於けるが如し。（八）

人にして煩惱なきものこそ、黄色の衣服を著くべけれ、調御なく、實語なきもの、彼に黄衣は相應しからず。（九）

既に諸の(六)漏を棄て、善く戒に安住し、調御あり實語あるもの、彼にこそ黄衣は相應しけれ。（一〇）

(七)非精に於いて(七)精の思をなし、精の上に非精を見るもの、此等(八)邪思境の人は、［遂に］精を得ることあらじ。（一一）

精を精として知り、非精を非精として知る、此等(八)正思境の人こそ、精に達するを得べきなれ。（一二）

惡く葺きたる屋舍は、雨の之を侵すが如く、修練せざる心は愛欲之を侵す。（一三）

善く葺きたる屋舍は、雨の之を侵すことなきが如く、修練したる心は愛欲の之を侵すことなし。（一四）

此處に憂ひ、來る世に憂ひ、惡を作すものは兩處に憂ふ、彼は憂ひ彼は悲む、己の汚れたる業を見て。（一五）

此處に喜び、來る世に喜び、福を作せるものは兩處に喜ぶ、彼は喜び彼は悦ぶ、己の淨き業を見て。（一六）

此處に苦み、來る世に苦み、惡を作すものは兩處に苦む、「われ惡業を犯せり」とて苦み、惡趣に陷りて益益苦む。（一七）

此處に歡び、來る世に歡び、福を作せるものは兩處に歡ぶ、「我福業を作せり」とて歡び、善趣に生れて益益歡ぶ。（一八）

(九)佛語を讀誦すること多しと雖も、放逸にして之を行ふことなくば、牧者の他人の牛を算ふるが如く、(一〇)沙門道に於て得る所なし。（一九）

佛語を讀誦すること少しと雖も、正法の隨法行者たり、

貪と瞋と又癡とを棄て、正智あり、心よく解脱せるものは、此の世彼の世に著なくして、(一一)沙門道に達すべし。 (二〇)

【一】原語には「古」の意もあり、法句經註解書には「古の法、總ゆる佛、辟支佛、漏盡の聲聞の踏みたる道」と釋せり。【二】Yamāmase 閻魔王の爲に服せらる、死に近く、死に行く、消え果つ等の意もあり、【三】原典にては「他」の字を用ひ、「智者を除きて他のもの」と釋す。【四】見聞し知覺する物體に對して壯美なり清淨なり愛すべきものなり等の觀念を抱くを云ふ。【五】眼耳鼻舌身意の六根を制せず、此等諸根の門戶を護らざるを言ふ。【六】漏とは煩惱の謂なり。【七】「精」とは「精髓、中樞、要部」等の義なり、「非精」とは之に反して、緊要ならざる部分なり。【八】「邪思惟」又は「正思惟」を其の分別の「境界」、範圍とするの意なり。【九】原語には、有義、有利等の義あり、佛の說かれたる敎を言ふ。【一〇】「沙門道の分得者にあらず、」【一一】涅槃に達するを言ふ。

精勤品第二

精勤は不死の道にして、放逸は死の道なり、精勤の人は死することなく、放逸の人は猶ほ死せるが如し。賢者は精勤に於て能く此〔の理〕を覺り、聖者の道を樂み精勤を悅ぶ。 (二一)

禪思あり、忍耐あり、常に勇健なる賢者は無上の安隱・涅槃を獲取す。 (二二)

向上あり、憶念あり、業淨く、〔事を〕なすに心を用ひ、自ら制し、道によりて生き、精勤するもの、〔斯の如き人の〕譽は增長す。 (二三)

向上と精勤と自制と調伏とを以て、智者は(一)暴流の侵すことなき洲を作らんことを。 (二四)

愚にして智なき輩は放逸に耽り、智ある人は精勤を護ること、最上の珍寶の如くす。 (二五)

放逸に耽ることなかれ、欲樂の愛著に〔耽ること〕なかれ、これ精勤にして禪思あるものは大安樂を得べければなり。 (二六)

智者の精勤を以て放逸を拂ふ時、彼は心に憂なく、智慧の樓閣に上りて、憂ある衆生界を「見ること」、猶ほ山頂に立てる賢者の、地上の愚者を觀るが如し。（二八）

放逸の徒の中にありて精勤し、眠れる人の中にありて能く醒めたる、斯の如き智者は快馬の駑馬を遣つるが如くにして進む。（二九）

精勤によりて帝釋は諸天の主となれり、精勤は人に稱へられ、放逸は常に賤めらる。（三〇）

精勤を樂み、放逸の怖るべきを覺れる比丘は、燃ゆる火の如くに、大小の（二）纏結を「盡し」去る。（三一）

精勤を樂み、怠惰の怖るべきを覺れる比丘は、退墮すること能はずして、涅槃に近づく。（三二）

【一】涅槃の境をいふ。【二】煩惱を云ふ、是れ煩惱は衆生の心を纏ひ結びて生死海に流轉せしむるが故なり。

心品第三

躁ぎ、動き、護り難く、制へ難き心、智者は之を矯むること、箭匠の箭を「矯むるが」如くす。（三三）

陸に棄てられ、水中の家を離れたる魚の如く、此の心は躁ぐ、（一）魔王の領土を逃れ出んが爲に。（三四）

抑ふること難く、輕躁にして、隨處に欲を遂げんとする「斯の如き」心を御するは可なり、御したる心は樂を齎す。（三五）

見ること難く、微妙にして、隨處に欲を遂げんとする智者よ、「斯の如きの」心を護れ、護ある心は樂を齎す。（三六）

遠く行き、獨り動き、形なくして、胸に潛める、「斯る」心を制するものは魔の縛より脱れん。（三七）

心堅固ならず、妙法を了解せず、信念定まらざる人の智慧は成滿することなし。（三八）

心に貪染なく、心に迷惑なく、善惡「の思」を棄て、覺

りたる人には怖畏あることなし。(三九)

此の身は水瓶に似たりと知り、此の心を(二)都城の如くにし、智慧の武器を以て魔と戰ひ、勝ち獲たるものは之を護り、住止することなかれ。(四〇)

げに此の身は久しからずして地に委せん、棄てられ、意識を喪ひ、無用の木の端の如くなりて。(四一)

賊は賊に對し、敵は敵に對して、此をなし、彼をなす、邪路に陷れる心は、更に大いなる惡を此の人になす。(四二)

母も父も將た他の近親も之をなさず、正路に立てる心は更に大なる善を此の人になす。(四三)

【一】生死海を云ふ。【二】堅く護るを云ふ。

華品第四

此の大地と、閻魔界と、此の人天界とに勝つものは誰ぞ、誰か善く説かれたる法句を「集むること」、巧者の華を集むるが如くなる。(四四)

(一)有學の人は大地と、閻魔界と、此人天界とに勝つ、有學者は善く説かれたる法句を「集むること」、巧者の華を集むるが如くす。(四五)

此の身は水泡に譬ふべきを知り、陽炎の質なりと悟りて、天魔の華箭を壞り、(二)死王不覩「の地」に往かんことを。(四六)

華を摘みて、心愛著せる人をば、死王の捉へて去ること、眠れる村里を、暴流の漂はし去るが如し。(四七)

華を摘みて、心愛著し、諸欲に飽くなき人は、死王之を服す。(四八)

猶は蜂の、花と、色香とを害ふことなく、味を捉へて去るが如く、同じく智者は村里を遊行せよ。(四九)

他人の邪曲を「見ず」、他人の作不作を「思はず」、唯己

の作と不作とを觀よかし。（五〇）

愛しく、色好き華の、香なきが如く、善く說かれたる語も、之を行はざるものには效なし。（五一）

愛しく、色好き華の、加之、香あるが如く、善く說かれたる語は、之を行ふものには效あり。（五二）

華堆よりして、種種の華鬘を作るが如く、生れ出たる衆生には、爲すべき善業多し。（五三）

華香は風に逆うて行かず、栴檀香・多伽羅香・摩利迦香も〔亦然り〕、善人の香は風に逆ひて行き、良士は諸方に風を送る。（五四）

栴檀香と、多伽羅香と、鬱波羅香と、將た婆師吉香と、此等諸香の中にて、戒香こそは最上なれ。（五五）

多伽羅香・栴檀香の如きは、其の香、量少し、戒德者の香は諸天の中にて香ふこと第一なり。（五六）

此等の戒德あり、精勤にして住し、善く證りて、解脫せるものの道は、魔王之を窺ひ知らず。（五七）

大道に棄てられたる塵堆の中、其處に淨香ある、快よき白蓮生せん、斯の如く、塵埃のうち、盲目なる凡夫のうちに、正徧覺者の弟子は、智慧を以て光り勝る。（五八、五九）

【一】四向四果の中、最後の一果阿羅漢果を除き、前の四向三果の人を有學の人と云ふ、やがて阿羅漢となる人なり。【二】阿羅漢果を云ふ、是れ阿羅漢果を得れば、死王卽ち魔王を見ることなきが故なり。

闇愚品第五

目醒めたるものには、夜は長く、疲れたるものには㈠由旬は遠く、正法を知らざる、愚者の輪廻は久し。（六〇）

旅者若し己に勝り、〔己と〕等しき〔伴〕を得ずんば、必ず單行せよ、愚者に伴たるものはあらず。（六一）

「我に兒あり、我に財あり」とて、愚者は苦む、己、己のものに非ず、況や兒をや、況や財をや。（六二）

愚者の〔自ら〕愚なりと思へる、彼これによりて賢者たり、愚者の賢者の思せる、彼こそは愚者と云はるれ。（六三）

愚者は生を終ふるまで、賢者に奉事すとも、法を知らざること、猶ほ食匙の羹味を〔辨ぜざる〕が如し。（六四）

智者は、假令瞬時も、賢者に奉事せば、疾く法を知ること、猶ほ舌の羹味を〔辨ずる〕が如し。（六五）

無智なる愚者は己、己の敵なるが如く振舞ふ、苦果を〔生ずべき〕罪業を身に行うて。（六六）

行うて後悔ひ、涙顔啼哭して、其の果報を受くべき業は、善く爲されたるにあらず。（六七）

行うて後悔なく、歡喜悦豫して、其の果報を受くべき業は、善く爲されたるなり。（六八）

罪業の未だ熟せざる間は、愚者之を蜜の如しと思ひ、罪業の熟するや、愚者は其の時苦惱を受く。（六九）

(三)愚〔なる行〕者は、月に月に、茅の端にて食を取るとも、斯る人は善法行者の十六分の一にも値せず。（七〇）

犯したる罪業は、固結せざること新しき乳の如く、〔而も〕灰に覆はれたる火の如く、燻りつつ、愚者に追隨す。（七一）

愚者の智慧の起ること、其の不利の爲なる間は、これ此の愚者の好運を損し、其の頭を碎く。（七二）

〔愚者は〕僞の名聞を願ひ、諸比丘の中にて上位に居らんと〔望み〕、家にありては主となり、他族の間には供養を〔得んと望む〕。（七三）

「在家出家共に、我之を爲せりと思へかし、總て爲すべき事、爲すべからざる事に於いて、皆我が命を受けよかし」、これ愚者の心にして欲と慢とは〔ために〕增

長す。（七四）

一は利養に導くものにして、一は涅槃に引き行くものなり、佛弟子たる比丘は、此の意を證りて恭敬を喜ばず、遠離のために修習せよ。（七五）

〔一〕由旬とは里程の名、四哩より十八哩に至り、諸說一定せず。
〔二〕一箇月毎に、茅草の端にかゝるほど少量の食を取るとも、其の功德は善く法を行ふ人の功德の十六分の一にも當らず。

賢哲品第六

〔身の〕過を指し、失を責むる智者、斯る賢者を見ば、〔寶の〕在所を告ぐる人の如くに事へよ、斯る人に事ふるものには是ありて、非あることなし。（七六）

誡めよ、敎へよ、不相應の事より遠ざからしめよ、彼善人には愛せられ、惡人には憎まれん。（七七）

惡友と交るなかれ、卑劣の輩と交るなかれ、善友と交り、尊貴の士と交れ。（七八）

法を喜ぶものは澄みたる心を以て快く臥す、賢者は常に聖者の說ける法を樂む。（七九）

渠工は水を導き、箭匠は箭を矯む、木工は材を曲げ、賢者は己を調ふ。（八〇）

一塊の磐石の、風に動かされざるが如く、賢者は毀譽と稱譽とに動かさるることなし。（八一）

底深き池水の、澄みて、濁なきが如く、賢者は法を聞きて心を澄ましむ。（八二）

善人は一切處に〔欲を〕棄て、良士は〔一〕欲を求むるが爲に語らず、樂に觸れ、將又苦に〔觸れても〕、賢者は〔二〕變れる相を現すことなし。（八三）

自の爲にも他の爲にも〔惡を行はず〕、兒をも財をも國をも、之を求むることなく、非道によりて、己の利達を求むることなし、これぞ德者・智者・義者なる。（八四）

人間の中にて、〔三〕彼岸に到るものは少く、其の他の

ものは岸邊にありて奔馳す。（八五）

善く説かれたる法に隨順する輩は、越え難き魔の領土を〔越えて〕彼の岸に到らん。（八六）

賢者は黒法を棄てて、白〔法〕を修すべし、家より〔離れて〕、家なき身となり、樂を得難き遠離の所に於て、此處に賢者は諸欲を棄てて、我有なき身なり、妙樂を求め、諸の心穢より、己を淨くすべし。（八七、八八）

（四）正覺分に於て、善く心を修習し、執することなくして、著を棄つるを樂む、此の光輝ある（五）漏盡者は、世に靜穩を得たるなり。（八九）

【一】諸欲を求め、諸欲の爲に閑語を交ふることなし。【二】浮みたる顔、沈みたる顔をなすことなし。【三】彼岸とは涅槃を云ひ、此岸とは生死を云ふ、次偈の彼岸の意も同じ。【四】所謂七菩提分法なり。【五】漏盡者とは煩惱を盡したる人の意にて阿羅漢を云ふ

阿羅漢品第七

道を踏み終へ、一切處に離憂・得脱せるもの、總ゆる纏結を斷じたるものには熱惱あることなし。（九〇）

〔正〕念ある人は精勤し、彼等は王家を食樂することなし、〔鵞王〕の池沼を棄つるが如く、彼等亦各各其の家を棄つ。（九一）

〔財物を〕蓄積することなく、知覺して食を受け、其の行處は空にして、相なく、而して解脱あり、空行く鳥の〔道の〕如く、斯る人の道を測ることは難し。（九二）

其の煩惱や悉く盡き、食に於て著あるなし、其の行處は空にして、相なく、而して解脱あり、空行く鳥の〔跡の〕如く、斯る人の跡を測ることは難し。（九三）

諸根の寂靜に歸せること、御士に善く馴らされたる馬の如く、慢を棄て、煩惱を盡したる、斯る人は諸天も羨む所なり。（九四）

怒らざること大地に等しく、よく禁戒を守りて門閾に

譬ふべく、泥土なき池の水の如し、斯る人には輪廻あるなし。（九五）

其の意は寂靜なり、其の語其の業、亦寂靜なり、善く證りて解脫を得、安息を得たる此の人の。（九六）

妄信なく、無爲「の法」を覺り、且つ縛を破れる人、業緣を絕ち、欲を棄てたる、これぞ誠に上上の人なる。（九七）

聚落にても、森林にても、海にても、陸にても、聖者の止まる處、其處ぞ樂しき「處なる」。（九八）

森居は樂むべし、之は衆人の樂まざる處、離貪の人は之を樂む、彼等は諸欲を求めざるなり。（九九）

千千品第八

意義なき文句の語は、「其の數」一千なりとも、人の聞いて寂を得べき有義の一語は之より勝る。（一〇〇）

意義なき文句の偈は、「其の數」一千なりとも、人の聞いて寂を得べき一偈句は之より勝る。（一〇一）

意義なき文句の偈一百「章」を誦せんよりは、人の聞いて寂を得べき一法句「を誦する」ぞ勝れる。（一〇二）

戰場に於て千千の敵に克つものよりは、獨り己に克つもの、彼こそ最上の戰勝者なれ。（一〇三）

己に克てるは、總て他の人人に克てるに勝る、天も乾闥婆も、魔王も、並に梵天も、此の常に己を御し自ら制する人の勝利を轉じて、敗亡となすこと能はす。（一〇四、一〇五）

人若し月に月に、千金を「棄てて」、犧を供すること百年、而して又一人の己を修めたるものを供養すること頃刻ならば、此の供養こそ、彼の百年の焚祀に勝りたれ。（一〇六）

人若し林間にありて、火神に奉事すること百年、而して

一人の身を修めたるものを供養すること頃刻ならば、此の供養こそ、彼の百年の焚祀に勝りたれ。（一〇七）

供犧や、焚祀や、此の世に福報を望めるもの、終歳之を行ふとも、總て其の「功德」直行の人を敬禮するの四分の一にだも當らず。（一〇八）

敬禮を以て習となし、常に上位を尊重せる人には、四種の法增長す壽と色と樂と力と。（一〇九）

人若し生くること百年ならんとも、汙戒にして定なくんば、戒を具し、禪思あるものの、一日生くるに如かず。（一一〇）

人若し生くること百年ならんとも、劣慧にして定なくんば、慧を具し、禪思あるものの、一日生くるに如かず。（一一一）

人若し生くること百年ならんとも、怠惰にして精勤足らずんば、堅き精勤あるものの、一日生くるに如かず。（一一二）

人若し生くること百年ならんとも、（一）起滅を見ずんば起滅を見る人の一日生くるに如かず。（一一三）

人若し生くること百年ならんとも、不滅の道を見ずんば、不滅の道を見る人の一日生くるに如かず。（一一四）

人若し生くること百年ならんとも、無上の法を見ずんば、無上の法を見る人の一日生くるに如かず。（一一五）

【一】事物の生起滅盡、卽ち生滅を云ふ。

惡業品第九

善業には急ぎて赴き、惡業よりは心を防げ、福業をなすに懶きものは、其の心惡業に樂む。（一一六）

人假令惡業を爲すとも、再再之を爲すなかれ、作惡の欲は起さざれ、惡を積むは苦なり。（一一七）

人若し善業を爲さは、再再之を爲せ、作善の欲を起

せ、善を積むは樂なり。（一一八）

惡人も、其の惡の未だ熟せざる間は、福を見る、惡の熟するに至るや、惡人は禍を見る。（一一九）

善人も、其の善の未だ熟せざる間は、禍を見る、善の熟するに至るや、善人は福を見る。（一二〇）

「惡は我に近づくこと無かるべし」とて、之を輕視することなかれ、滴滴水の落ちて、水瓶に滿つるが如く、愚者は少少づつ惡を積みて、惡に滿つるに至る。（一二一）

「善は我に近づくこと無かるべし」とて、之を輕視することなかれ、滴滴水の落ちて、水瓶の滿つるが如く、賢者は少少づつ善を積みて、善に滿つるに至る。（一二二）

貨財多く、從伴少き商估の危き路を「避け」、壽を望むものの、毒物を「避くる」が如く、惡を避けよ。（一二三）

手に瘡傷なくば、手を以て毒をも取ることを得、毒は瘡傷なきものには伴はず。爲さざるものには惡なし。（一二四）

人若し害心なき人、清淨にして執著なき人に忤はば、禍の此の愚者に還り來ること、逆風に投じたる細塵の如し。（一二五）

或は人胎に宿るあり、罪あるものは地獄に墮つ、善行の人は天に生れ、煩惱なき人は涅槃に至る。（一二六）

空にありても、海の中にありても、將た山間の窟に入りても、世に罪業より脫るべき、方所とてはあるなし。（一二七）

空にありても、海の中にありても、將た山間の窟に入りても、世に死の勝たざる方所とてはあるなし。（一二八）

刀杖品第十

總て「有情」は刀杖を怖れ、總て死を懼る、己を喩とし

て、〔他を〕毆つことなかれ、害ふことなかれ。（一二九）
總て〔有情〕は刀杖を怖れ、生は總てのものの愛する所、己を喩として〔他を〕毆つことなかれ、害ふことなかれ。（一三〇）

樂を求むる有情を、刀杖を以て害ふものは、己の樂を求めても、後世に之を得ることなけん。（一三一）

樂を求むる有情を、刀杖を以て害はざるものは、己の樂を求めて、後世に之を得ん。（一三二）

何人にも麤語を用ふることなかれ、受けては〔彼〕亦汝に返さん、憤怒の語は苦なり、返杖は汝〔の身〕に觸れん。（一三三）

汝若し默して語らざること、破れたる鐘の如くならば、これ涅槃に達せるなり、汝に憤怒あるなし。（一三四）

牧牛士の杖を以て〔制し〕、牛を牧場に驅るが如く、等しく老と死とは有情の壽命を驅る。（一三五）

愚者は罪業を犯して覺らず、無智の輩は己の業に惱まさるること、猶ほ火に燒かるるが如し。（一三六）

暴意なく害心なきものの中にありて、暴を加ふるものは、疾く十處中の一に陷る。（一三七）

酷痛、損失、形體毀傷、重症に逢ひ、又た心散亂に至る。（一三八）

王禍に逢ひ、嚴しき誣告を蒙り、親族滅び、家財喪亡す。（一三九）

或は又火の彼の家を燒くことあり、形體壞れて後無智なる彼は(一)泥犂に陷る。（一四〇）

裸行も、結髮も、泥も、斷食も、又た露地臥も塵垢を身に塗ることも、不動坐も、未離惑の有情を淸うすることなし。（一四一）

身を嚴飾せりとも、平等に行ひ、寂靜、調順、自制あり、梵行を行ひ、一切生類に對して(二)害意を抱かずば

彼は婆羅門、彼は沙門、彼は比丘なり。（一四二）

慚恥によりて制せられて、［他の］批難を意とせざると、良馬の鞭を［意とせざる］が如くなるもの、［斯の如きもの］誰か此の世にありや。（一四三）

鞭にて打たれたる良馬の如く、汝等も亦專心・鋭意なれ、信心・持戒・精勤・禪定・正決斷によりて、汝等は明と行とを具し、正念を有し、此の大いなる苦惱に勝たん。（一四四）

〔三〕渠工は水を導き、箭匠は箭を矯む、木工は材を曲げ、賢者は己を調ふ。（一四五）

【一】地獄を云ふ。【二】原意は刀杖を措く。【三】第八〇偈に同じ。

老衰品第十一

［世は］常に［慾火に］燒かるるに、何の笑ぞ、何の歡喜ぞ、［汝等は］黑闇に覆はるるに、何故に［智］火を求めざる。（一四六）

飾れる［此の］形體を見よ、合會して成れる腐壞物の塊、衆病を擁し、種種に測量し、堅實なく、安住なきなり。（一四七）

此の形色や老朽し、衆病の棲所たり、壞るべきものなり、臭穢の身は損すべく、命は死に終る。（一四八）

秋の日に棄てられたる葫蘆の如き、此等灰白の骨行を見て、何の喜樂ぞ。（一四九）

骨行の都市を建て、肉と血とに塗れり、此處に老と、死と、慢と、覆とを藏す。（一五〇）

能く飾りたる王車も古び、身體も亦た老に至る、賢人の法は老ゆることなし、賢人は、賢人に法を傳ふるなり。（一五一）

此の寡聞の人は犢牛の如く老ゆ、彼の肉身は增せども、彼の智慧は加はることなし。（一五二）

(一)屋舍の工人を求めて、之を看出さず、多生輪廻界を奔馳して、轉た苦の生死を經たり。
屋工、汝今看出さる、再び家を構ふることあらじ、汝の桷材は總て破られ、棟梁は毀たる、滅に至れる心は諸愛の滅盡に達せり。 （一五三、一五四）

壯時、梵行を修せず、財寶を得ずして、魚の棲まざる池の中なる老鴻の如くに亡ぶ。 （一五五）

壯時、梵行を修せず、財寶を得ずして、朽ちたる弓の如く、過去を託ちて臥せり。 （一五六）

【(一)渴愛を指す、是れ渴愛は生死輪廻の因なるが故なり、此の一五三、一五四の兩偈は佛大覺の後、初めて唱へられしものなりと傳ふ。】

自己品第十二

己を愛すべしと知らば、善く之を保護せよ、「人生」三期の一に於て、賢者は宜しく醒悟すべきなり。 （一五七）

己を先づ正しき位に立て、而して他を敎へなば、賢者は勞する所あらじ。 （一五八）

己を處すること、他を敎ふるが如くならば、能く己を制して、他を制するを得ん、そは己は制し難きが故なり。 （一五九）

己こそ己の依所なれ、他何物か依所たるあらん、能く己を制する時は、得難き依所を得べし。 （一六〇）

自ら作りたる罪業は、己に生じ、己に出たるもの、其が愚人を損ふこと、金剛石の摩尼を「鑽る」が如し。 （一六一）

汚戒甚しき人は其の身を處して、敵者の望むが如くすること、蔓草の其の覆へる樹に於けるが如し、 （一六二）

不善にして、己に不利なる事は爲し易く、事の利ありて善なる、之は極めて爲し難し。 （一六三）

應供者・聖者・道によりて活くる人の敎を、邪惡の見

に據りて謗る人は、(二)葦草の果の、己を滅すために實るが如し。（一六四）

自ら惡を作せば自ら穢れ、自ら惡を作さざれば自ら淸し、淨と不淨と共に己にあり、自ら他を淸くすること能はず。（一六五）

他人の務は大なりとも、爲に己の務を忘るることなかれ、己の務を辨して後、己の務に專心なるべし。（一六六）

【二】蘆は花を著け實を結べば自ら死するなり。

世間品第十三

卑き法を奉せざれ、放逸の徒と共に棲まざれ、邪見に隨はざれ、世事を增長せしめざれ。（一六七）

起て、放逸なるなかれ、善行の法を修せよ、隨法行の人は樂く臥す、今世にも來世にも。（一六八）

善行の法を修して、惡行「の法」を修せざれ、隨法行の人は樂く臥す、今世にも來世にも。（一六九）

泡沫の如くに見よ、陽炎の如くに見よ、斯の如く世界を觀るものは、死王之を見ること能はず。（一七〇）

飾ありて、王車に似たる此の世界を來り見よ、愚者は之に迷へども、智者は之に著することなし。（一七一）

先に怠りて、後に怠らざるもの、彼此の世界を照すこと、雲を離れたる月の如し。（一七二）

人の作したる惡業、後、善の爲めに覆はるれば、此の人、世を照すこと、雲を離れたる月の如し。（一七三）

此の世界は、暗黑にして、觀察「の力」あるものは、少し、網を離れたる鳥の如くに、天に昇るものは少し。（一七四）

鴻雁は日の道を行き、神力あるものは空を行く、賢者は、魔王と其の眷屬とを併せ破りて、世を離脫するなり。（一七五）

唯一の法を超え、妄語を吐く人、來世を等閑に思へるものは、罪として犯さざるなし。（一七六）

慈念なき輩は天界に入らず、愚人は施與を稱揚することなし、賢者は施與を隨喜し、之によりて彼は來世に於て安樂なり。（一七七）

世界を一王の國土となし、或は天界に赴き、有ゆる世界に主となる、預流果は此の何れにも勝る。（一七八）

佛陀品第十四

勝ちたるものは再び之を勝つこと能はず、其の勝利には此の世の何人も之に入ること能はず、(一)斯く行履限りなく、跡なき佛を如何なる道によりてか導かんとする。（一七九）

其の網、其の欲、其の愛、何處にも之を尋ぬべきなし、斯く行履限りなく、跡なき佛を、如何なる道によりてか導かんとする。（一八〇）

勇者の禪思に專にして、出離・寂靜を喜ぶ、斯の如き正覺・「正」念の人は諸天も羨む所なり。（一八一）

人身を得るは難く、有情の生存は難し、妙法を聞くは難く、諸佛の出世は難し。（一八二）

(二)一切の惡事を作さず、善事に近づき、己の意を清淨にする、是れ諸佛の敎なり。（一八三）

忍辱・堪忍は最上の修行、涅槃は最勝なりと、諸佛は宣ふ、是れ人を害ふものは出家にあらず、他を惱すものは沙門にあらざるが故なり。（一八四）

罵らず、害はず、(三)婆羅提木叉に於て防護し、食に於て量を知り、閑處に坐臥し、增上心に住する、是れ諸佛の敎なり。（一八五）

金貨を雨すとも、諸欲に飽くこと能はず、諸欲は少味にして苦なりと、之を知るは賢者なり。（一八六）

天の諸欲に對しても、尙ほ欲念を起さず、覺王の弟子は諸愛を盡すを樂む。（一八七）

人人恐怖の念に迫られて、山林園樹制多に歸依するもの多し。（一八八）

されど之は安隱の依所にあらず、無上の依所にあらず、此の依所に歸依して、一切の苦より脫るることなし。（一八九）

佛と、法と、僧とに歸依するもの、彼は勝智を以て、四種の聖諦を見る。（一九〇）

〔四〕苦と、苦の起因と、苦の度脫と、苦の滅盡に達する賢聖八種道と、（一九一）

是れ安隱の依所、是れ無上の依所なり、此の依所に歸依して、一切苦より脫るべし。（一九二）

尊貴の人は得難し、彼は各處に生ぜず、此の勇者の生ずる處、慶福其の族に至る。（一九三）

諸佛の出世は樂しく、妙法を說くは樂し、僧衆の和合は樂しく、和合するものの修行は樂し。（一九四）

あらゆる迷妄に勝ち、憂と苦とを超えて、應供の德ある佛又は「佛」弟子を供養するもの、斯の如き得寂・離怖の人を供養するものの功德は、何人も之を算ふべからず。（一九五、一九六）

【一】知覺の對境限りなきの意にて無限の境界を知覺し得るの意。
【二】七佛通誡の偈として知らるる有名なる偈なり。【三】比丘比丘尼の大戒を指す。【四】苦集滅道の四諦なり。

安樂品第十五

安樂に住せん、怨念ある人人のうちにありて、怨念なく、怨念ある輩の中に、怨念なくして、安樂に住せん。（一九七）

安樂に住せん、煩惱ある人人の中にありて、煩惱なく、煩惱ある輩のうちに、煩惱なくして安樂に住せ

ん。（一九八）

安樂に住せん、欲念ある人人の中にて欲念なく、欲念ある輩の中に、欲念なくして安樂に住せん。（一九九）

安樂に住せん、此の我等には我有あることなし、光音天人の如く、喜悅を食とせん。（二〇〇）

勝ちては怨を得、負けては起居苦なり。心靜なるものは勝負共に擲ちて、起居安樂なり。（二〇一）

貪の如き火あるなく、瞋の如き罪あるなし、(一)蘊集の如き苦あるなく、寂滅に勝れる樂あるなし。（二〇二）

飢餓は最大の病、諸蘊は最極の苦なり、之を實の如くに知れば、最勝の安樂・涅槃「を得」。（二〇三）

無病は最上の利、知足は最上の財なり、信賴は最上の親族にして、涅槃は最勝の安樂なり。（二〇四）

獨處の妙味と寂靜の妙味とを味ひ、法悅の妙味を吸うて怖畏もなく、又惡もなし。（二〇五）

聖者を見るは好く、同じく棲むは常に樂なり、愚者を見ざれば常に快からん。（二〇六）

愚人と共に道行くものには長き憂あり、愚者と共に住するの苦なるは、敵と「同じく住するの」常に「苦なる」が如し、賢者は同住して樂しきものにして、猶ほ親緣と合會するの樂しきが如し。（二〇七）

されば賢者と、智者と、多聞の士と、重擔を負ひ、禁戒ある聖者、斯の如きの善士、上智の人に「よること」、月の星道によるが如くせよ。（二〇八）

【一】五蘊の合會して成れる此の身體を云ふ、次偈に諸蘊と云へるも同じ。

愛樂品第十六

非處に就きて是處に就かず、利を棄てて、愛樂を取るものは、是處に就きたる人を羨むに至る。（二〇九）

愛せるものと會ふと勿れ、惡めるものと「會ふと」勿れ、愛せるものを見ざるは苦、惡めるものを見るも亦「苦なり」。（二一〇）

されば何物をも好愛する勿れ、愛者と別るるは禍なり、人に愛憎なければ纏結あることなし。（二一一）

愛好より憂悲生じ、愛好より怖畏生ず、愛好より脱れたるものには、憂悲なし、焉んぞ怖畏あらん。（二一二）

親愛より憂悲生じ、親愛より怖畏生ず、親愛より脱れたるものには、憂悲なし、焉んぞ怖畏あらん。（二一三）

喜樂より憂悲生じ、喜樂より怖畏生ず、喜樂より脱れたるものには、憂悲なし、焉んぞ怖畏あらん。（二一四）

貪欲より憂悲生じ、貪欲より怖畏生ず、貪欲より脱れたるものには、憂悲なし、焉んぞ怖畏あらん。（二一五）

渇愛より憂悲生じ、渇愛より怖畏生ず、渇愛より脱れたるものには、憂悲なし、焉んぞ怖畏あらん。（二一六）

浄戒と正見とを具し、法に依立し、正理を知り、自ら己の業を作すもの、世は斯の如き人を愛す。（二一七）

(一)不言説の法に於て念を起し、其の心に滿足し、諸欲に於て著心なきは上流の人と稱せらる。（二一八）

久しく異境にあり、遠くより健に歸れるを、親知朋友愛人は彼の來るを迎ふ。（二一九）

同じく、善業を作して此の世より彼の世に赴けるを、福果は之を迎ふ、愛するものの來るを親知の迎ふるが如くに。（二二〇）

【一】不言説の法とは言詮不及の法の意にて、涅槃を指す。

忿怒品第十七

忿を棄て、慢を離れ、諸の纏結を超えよ、斯く名色に執せず、我有なき人には苦來ることなし。（二二一）

發れる忿怒を制すること、轉る車を制するが如くする

もの、此の人をぞ我は調御者と云ふ、他は唯手綱を執るものなり。　(二二二)

怒は愛を以て克ち、不善は善を以て克つべし、吝嗇の徒には仁惠を以て、虚言の人には、實語を以て克つべし。　(二二三)

實を語れ、怒る勿れ、些にても求められなば與へよ、此の三事によりて諸天の所に到れ。　(二二四)

害意なき牟尼は常に身を攝して、(一)不死の所に到る彼處に到りては憂ふることなし。　(二二五)

常に覺寤し、晝夜に勤學し、涅槃を得んと努むるものの煩惱は滅びん。　(二二六)

(二)阿偷羅、之は古くして、今出來れるものに等しからず、曰く「人は默して坐せるものを誹り、多く語るものを誹り、少く言ふものをも亦誹る、世に誹を受けざるものなし。　(二二七)

常に唯誹られ、常に唯讚めらるるもの、過去にあらざりき、未來になけん、而して今もあらず。　(二二八)

多智の人若し、行失なく、賢にして、智德〔具はり〕、定意あるものを、日日絕えず稱揚することあらば、閻浮提金の貨幣の如く、誰か此の人を誹り得んや、諸天も之を讚め、梵天も之を讚めん。」　(二二九、二三〇)

身惡業を防護し、身を能く制せよ、身非業を棄てて、身に善業を修せよ。　(二三一)

口惡業を防護し、口を能く制せよ、口非業を棄てて、口に善業を修せよ。　(二三二)

意惡業を防護し、意を能く制せよ、意非業を棄てて、意に善業を修せよ。　(二三三)

賢者の身を能く攝し、更に口を愼み、意を制せる賢者は、これ能く防護せる人なり。　(二三四)

【一】涅槃の意。　【二】優婆塞の名なり、以下四偈は佛の此の優婆

塞を致へ給ひし時の偈なり。

垢穢品第十八

汝、今、黃める木の葉の如く、閻魔の使者亦汝の傍に立つ、門出の門に立ち、路貲汝の身にあるなし、（二三五）

此の汝、己の燈となり、疾く精勤して智者となれ、「さらば」垢穢を拂ひ、愛著を離れて、天上の聖地に到らん。（二三六）

汝、今、年老い、閻魔の傍に來れり、汝に途上休息の所なく、路貲亦あるなし。（二三七）

此の汝、己の燈となり、疾く精勤して智者となれ、「さらば」垢穢を拂ひ、愛著を離れて、再び老死に入る「こと」あらじ。（二三八）

智者は「銀」工の銀「垢を去る」が如く、次を逐ひ、刹那刹那に、些づつ、己の垢穢を去れ。（二三九）

鐵より生じたる垢の、鐵より出でて鐵を食むが如く、分外の受用を望むものは、其の業のために惡趣に導かる。（二四〇）

咒神の垢穢は讀誦せざるなり、家屋の垢穢は修理を怠るなり、色の垢穢は怠慢にして、防護の垢穢は放逸なり。（二四一）

婦女の垢は非行にして、施者の垢は慳貪なり、(一)垢は邪惡の法なり、此の世にも彼の世にも。（二四二）

之よりも更に穢多き垢あり、無明は最大の垢なり、此の垢を棄てて、諸比丘、無垢の人となれ。（二四三）

慚恥の念なく、烏の如くに勇に、傲慢に、無禮に、自負心強く、汚れたるものには生は易し。（二四四）

慚恥の念あり、常に清白を求め、著なく、自負心なく、清淨の生を營むものには「生は」難し。（二四五）

生きたるを害ひ、妄語を語り、此の世に於て人の與へ

ざるを取り、他人の婦と交り、加之、飲酒に耽る人、彼は此の世に於て己の脚下を掘る。（二四六、二四七）

汝、斯の如くして節制なきことは、邪法なることを知れ、貪望と非法と、長く汝を苦に陷るなからんことを。（二四八）

人は其の信仰に隨ひ、其の好む所に施をなす、人若し他の與ふる飲食に對して不滿を抱くとあらば、彼は晝夜に定を得ることなし。（二四九）

斯る思を斷ち、根絶やし、盡せるもの、彼こそは晝夜に定を得べけれ。（二五〇）

火は貪の如きはなく、執著は瞋の如きはなし、網は癡の如きはなく、流は愛の如きはなし。（二五一）

他人の過は見易く、己の過は見難し、他人の過は「之を簸く(と)」糠を簸くが如くし、而も己の「過を」覆ふとは、詐ある賭者の骰子を隱すが如くす。（二五二）

他の過を索め、常に憤恚の心を抱くものは、其の(二)漏益益增し、(三)漏盡には遠くして遠し。（二五三）

空中には路なく、沙門は「佛法の」他には之あらず、羣生は虛榮を樂み、如來には虛榮なし。（二五四）

空中には路なく、沙門は「佛法の」他には之あらず、諸行は常住なるなく、諸佛には動著あるなし。（二五五）

【一】或は邪惡の法は垢なり。【二】九偈の註を見よ。【三】漏盡とは煩惱を盡すことにて、阿羅漢果に達するを云ふ、斯の如き人は煩惱を盡して阿羅漢果を得ること能はず。

法住品第十九

人の暴を以て事を決する、彼之によりて法住の人たるにあらず、正も邪も共に能く決するものは賢者なり。（二五六）

暴ならず、法により、平等に他を導き、法に護らるる智者、「彼ぞ」法住の人と稱へらる。（二五七）

〔人の〕多くを語る、〔彼〕之によりて賢者たるにあらず、堪忍あり、怨なく、恐なき〔もの、彼ぞ〕賢者と稱へらる。（二五八）

〔人の〕多くを語るも未だ持法者たるにあらず、法を聞くと尠しと雖も、身にて之を(一)見、法を等閑にするとなくば、彼こそ法の護持者なれ。（二五九）

〔人の〕頭の白き、〔彼は〕之によりて長老たるにあらず、斯の如きは、壽熟して、空しく老いたる人と稱へらる。（二六〇）

人に諦と・法と・愛と・自約と、自調とあり、此の垢穢を除きたる此の賢者こそは長老と稱へらるれ。（二六一）

唯言語ありとも、又美しき形色ありとも、嫉、慳、誑心あらば、人は善貌のものにあらず。（二六二）

此の惡を斷ち、根絕し盡して、此の瞋恚を除きたる智者こそは善貌の人と稱へらるれ。（二六三）

自制なくして、妄語を語らば、髮を剃るとも沙門にあらず。〔人若し〕欲貪あらば、奈何でか沙門たり得べき。（二六四）

人若し總て大小の惡を制せば、〔彼は〕諸惡を制せるによりて、沙門と名けらる。（二六五）

(二)他に〔食を〕乞ふが故に比丘たるにあらず、一切の法を學ぶも尙ほ未だ比丘にあらず。（二六六）

罪業福業共に捨てて、清淨行の人たり、智慧を以て世界を渡るもの、彼ぞ比丘と稱せらる。（二六七）

寂默なりとも、愚にして智なくば牟尼にあらず、(三)權衡を取るが如く、(四)勝法を取り、邪業を捨つる牟尼は、彼之によりて牟尼なり、人若し世の(五)兩事共に知らば、彼之によりて牟尼と稱へらる。（二六八、二六九）

生命を害ふが故に(六)聖なるにあらず、一切生類を害はざるが故に聖者と名けらる。（二七〇）

(七)戒禁によりても、又(八)多聞によりても、又は得定、獨臥によりても、聖者の享くべき出離の樂に觸るることなし、比丘、漏盡に達するなくして自恃すること勿れ。(二七一、二七二)

【一】僅にても聞きては、法に隨ひ、義に隨ひ、大法小法の依行者となり、身に苦等を知りて、四聖諦を見ると解せり。【二】比丘には種々の義あれど、中に乞人、乞士等と譯し、他に食を乞ふものゝ義ありとなす。【三】權ははかり、衡はおもりなり、權衡を取りて物を量らんとするものは、多きに過ぐれば取去り、少ければ更に加ふ、惡を棄てて善を取るも亦斯の如し。【四】勝法とは戒定慧解脱解脱智見を云ふ、此の蘊等の世界に於て、衡を擧げて度るが如く、此等は内蘊なり、此等は外蘊なり等、斯の如きの法により、兩義共に量るを云ふ。【五】内外上下等の別を知るの意。【六】聖者の原語、Ariya の aria には「敵」の意あり、故に生命を害ふ云云と云ふ。【七】四作淨戒又は十三頭陀行を行ふを云ふ。【八】三藏學を習するを云ふ。

道品第二十

(一)八道は道の最妙、(二)四句は諦理の最上、離欲は法の最勝にして、(三)具眼者は兩足中の最尊なり。(二七三)

知見を淨くするの道は此〔の道に〕外ならず、汝等此の道を踏め、是れ魔を困惑するものなり。(二七四)

汝等此の道を往けば、苦盡に達す、我は(四)除箭の〔法〕を知りて、汝等のために道を說きたり。(二七五)

汝等のなすべきは努力なり、如來は說者なり、禪思の人にして〔此の道を〕往くものは魔の縛を脫る。(二七六)

「一切行は無常なり」と、智を以て斯の如く知る時、苦界嫌厭の情起る、是れ(五)淨に入るの道なり。(二七七)

「一切行は苦なり」と、智を以て斯の如く知る時、苦界嫌厭の情起る、是れ淨に入るの道なり。(二七八)

「一切法は無我なり」と、智を以て斯の如く知る時、苦界嫌厭の情起る、是れ淨に入るの道なり。(二七九)

起つべき時に起たず、若く、强くして、怠惰に陷り、意志思想弱くして事に懶きもの、斯る逸者は智の道を

得ず。 (二八〇)
語を愼しみ、意を能く制し、身に不善を作さず、此等
の三を業道より淨除せば、諸大仙の說き給へる道を
得ん。 (二八一)
應念より智慧生じ、不應念なれば智慧滅ぶ、此の有と
非有と、二種の道を知りて、智慧の增すが如く、然く
己を處せよ。 (二八二)
(六)「煩惱の」林を伐れ、單り樹を「伐る」勿れ、林よりは
危難來る、林と下生とを伐らば、比丘等、煩惱の林な
き人とならん。 (二八三)
男子の女子に對する煩惱、些にても斷たれざる所あ
らば、彼の心は尙ほ囚はる、乳を貪る犢の母牛に於け
るが如くに。 (二八四)
自己の愛念を斷つこと、牛を以て秋時の蓮を「折る」が
如くし、善逝の說き給ひし (七)寂靜の道、涅槃を增長
せよ。 (二八五)
「此處に雨時を過さん、寒暑の間、此處に「住せん」」
と、愚人は斯く思惟して死の近くことを覺らず。 (二八六)
兒や畜の愛に溺れ、樂に耽るものを、死王の拉し去る
こと、眠れる村里を大水の漂はし去るが如し。 (二八七)
兒も、父も、親族も恃怙にあらず、死王に囚へられた
るものには親族も恃怙たらず。 (二八八)
戒により自ら制せる賢者は、此の意を知りて、涅槃
に赴く道を疾く疾く淸くせよ。 (二八九)

【一】八正道を云ふ。　【二】四聖諦の謂なり。　【三】佛を云ふ。
【四】欲等の箭を除くの法。　【五】淨とは涅槃の謂なり、以下三偈皆同一の意に見よ。　【六】天然の林間に猛獸毒蛇等の危險あるが如く、貪瞋癡煩惱の林にも種種の危難あり、由りて煩惱を林に譬へたるなり、或は Vana (林) Vanatha (下生)には共に又煩惱、欲等の意あり、三四四偈參照。　【七】或は、寂靜の道を增長せよ、涅槃は善逝の說き給ひし所なり。

廣衍品第二十一

小樂を棄てて、大樂を見るべくば、賢者は大樂を觀て小樂を捨つべし。（二九〇）

他に苦を與へて、己の樂を望むものは、怨憎の繫縛に絆されて、怨憎より脱るゝことなし。（二九一）

爲すべきことを爲さず、爲すべからざることを爲し、虛誇にして［而も］怠惰なるもの、斯る人の諸漏は增長す。（二九二）

人常に精進して、身觀念を修し、非事に遠かりて、常に是事を行ひ、而して念と覺とあり、斯る人の諸漏は滅盡に至る。（二九三）

(一)母と父とを殺し、兩刹利王を殺し、國土も、其の依屬も併せ滅して、婆羅門は苦患なきに至る。（二九四）

母と父とを殺し、(二)兩婆羅門を殺し、第五に虎類を滅して婆羅門は苦なきに至る。（二九五）

(三)瞿曇の弟子は常に覺醒せり、彼等の晝夜常に念ずる所は佛にあり。（二九六）

瞿曇の弟子は常に覺醒せり、彼等の晝夜常に念ずる所は法にあり。（二九七）

瞿曇の弟子は常に覺醒せり、彼等の晝夜常に念ずる所は僧にあり。（二九八）

瞿曇の弟子は常に覺醒せり、其の心晝夜常に身念に住して。（二九九）

瞿曇の弟子は常に覺醒せり、其の心晝夜常に不害を樂みて。（三〇〇）

瞿曇の弟子は常に覺醒せり、其の心晝夜常に修習を樂みて。（三〇一）

出家は難く、［世を］樂むは難く、庵［住］は難、在家［住］は難く、同輩と棲むは難く、旅人は難に陷る、されば旅人たるなく、難に陷る勿れ。（三〇二）

信ありて戒德を具有し、名と富とを有てるものは、其

の選ぶ所に隨ひ、隨所に恭敬せらる。（三〇三）
善人は遠く現はるゝこと、雪山の如く、不善者は世に顯はるゝことなき、猶ほ夜陰に投ぜる箭の如し。（三〇四）
獨坐・獨臥・獨經行して倦むことなく、獨り己を制して林邊に樂しむものたれ。（三〇五）

【一】「愛は人を生む」と云ふ句よりして愛を母と云ひ、「我は某なる王の子、又は某なる大臣の子なり」と云ひ、父によりて我慢の心起る、よりて我慢を父と云ふ、兩刹利王とは斷見常見の二、國土とは十二處、而して依屬とは十二處附隨の諸煩惱を云ふ。【二】兩婆羅門王とは斷常の二見、虎類とは此處にては疑蓋を指すと註解書に釋せり。【三】瞿曇又は喬答摩は釋迦族の姓なるが故に、釋尊を時には瞿曇佛と呼びたり。

泥犂品第二十二

（一）非事を語るものは泥犂に入る、爲して爲さずと云ふものも亦、此等兩者の死後は同じ、劣業の人、來世に［ありては同じ］」。（三〇六）

邪業にして、自制心なく、首に黃衣を纏へる衆多の人此等邪業の人は邪業の爲に泥犂に墮つ。（三〇七）
戒を破り、自制心なくして（二）信施を受くるよりは、熱して火焰に似たる鐵丸を嚥むぞ勝れる。（三〇八）
人の怠惰にして、他の婦を娛むるものには、四事來る、不善業を得て、安臥を得ず、第三に毀訾、第四に泥犂。（三〇九）
不善業を得、其の趣く所は惡趣、恐れ恐れたるものの樂は尠く、王は之に重罰を加ふ、されば人、他の婦を娛まざれ。（三一〇）
（三）功祚草の葉は、之を攫むこと惡しければ、手を切る、沙門の道も、之を行うて宜しからざれば、泥犂に導く。（三一一）
放逸なる行爲、汚れたる禁戒、猶豫して梵行を行ふ、之は共に大果を齎すものにあらず。（三一二）

若し事を爲すべくば之を爲し、斷斷乎として奮迅せよ、そは放逸なる沙門道は塵垢を散ずること多ければなり。（三一三）

惡業は作さざるぞ好き、惡業は後に至りて、苦を招く、作して苦を招くことなき善業は、これを作すぞ好き。（三一四）

邊地の都府を內外共に護るが如く、然く己を護りて瞬時も逸すること勿れ、瞬時を忽にするものは地獄に墮ちて憂ひ悲む。（三一五）

恥づべからざるに恥ぢ、恥づべきに恥ぢず、邪見に著せる衆生は惡趣に趣く。（三一六）

恐なき所に恐を見、恐るべき所に恐を見ず、邪見に著せる衆生は惡趣に入る。（三一七）

過なきに過の念を爲し、過あるに過を見ず、邪見に著せる衆生は惡趣に到る。（三一八）

過を過と見、過なきを過なしと見、正見を抱ける衆生は善趣に生る。（三一九）

【一】諸經要集六六三偈。【二】國民の信仰によりて施す供養物。
【三】茅に似たる草の一種。

象品第二十三

われは戰場に赴ける象の、弓を離れたる箭を〔忍ぶ〕が如く、罵詈を忍ぶ、是れ羣生は、破戒の徒なればなり。（三二〇）

〔人は〕調けたるを戰場に引き行き、王は馴れたるに騎る、人の中にて、自制心あり、罵詈を忍ぶは最第一なり。（三二一）

騾の馴れたるは善く、氣高き(一)辛頭馬は善し、大龍象王は善く、己を制せるものは更に善し、（三二二）

此等の乘物に〔騎り〕ては、〔人は〕(二)不至の地に到る

ことなし、己を制せるものは、自制によりて、〔其の處に〕達すること、猶は馴れたるに〔騎りて行くが如し〕。（三二三）

護穀と名くる象の、烈しく狂ひて、禁制し難きも、縛せられては食を食ふことなし、象は象〔の棲む〕林を愛慕す。（三二四）

懶惰にして飽食長眠、轉輾して臥する愚者は、供食を以て飼はるる大豕の如く、數數胞胎に入る。（三二五）

〔三〕此の心曾て、望により、欲に隨ひ、樂に任せて流轉したり、我今日能く之を制すること、象師の猛象を〔制する〕が如くせん。（三二六）

精勤を樂とせよ、己の心を防護せよ、難處より身を拔くこと、泥中に陷れる象の如くせよ。（三二七）

若し思慮ある、善行の賢者を、同行の友に得ば、一切の危難に克ち、歡喜思惟して、彼と共に行へ。（三二八）

若し思慮ある、善行の賢者を、同行の友に得ずば、王の克ち取りたる國を棄つるが如く、摩登伽林中の象の如く、唯獨り行へ。（三二九）

獨り棲むこそ好けれ、愚者と伴たるはなし、獨り行うて惡事を作す勿れ、寡欲なること摩登伽林中の象の如くなれ。（三三〇）

事起れば友樂を得、滿足は何處より來るも樂し、命終にも善行は樂しく、一切の苦を棄つるは樂し。（三三一）

世に母たるは樂しく、世に父たるは樂し、世に沙門たるは樂しく、世に婆羅門たるは樂し。（三三二）

老後に至るまで、戒を持つは樂、正信を樹つるは樂、智慧を得るは樂しく、惡を作さざるは樂し。（三三三）

〔一〕辛頭・信度・仙陀婆・印度河の流域地方にして名馬を產す。
〔二〕不至の地とは涅槃の境を云ふ。　〔三〕長老偈七七、一一三〇。

愛欲品第二十四

放逸行の人には、愛欲の増長すること、蔓草の如し、彼生生に轉輾すること、林中に果實を索むる猿の如し。（三三四）

賤しくして、(一)毒ある此の愛欲、若し人に勝たば、彼の憂苦増長すること、(二)繁ふる毘羅那草の如し。（三三五）

人若し、賤しくして、制し難き此の愛欲に勝たば、憂苦の彼を去ること、蓮葉より落つる水滴の如し。（三三六）

されば吾汝等に告げん「汝等此に集れるものに幸あれ、愛欲の根を掘ること、優尸羅を求むるものの、毘羅那を〔掘る〕が如くし、汝等葦草の水流に折らるるが如く、數數魔に破らるる勿れ。」（三三七）

譬へば樹の根の、災なくして、強ければ、伐るとも再び生ずるが如く、愛執は之を斷つことなくば、此の苦再再起る。（三三八）

三十六流、愛樂の流大なる時は、欲に沒在せる意志の水流は、〔此の〕邪見〔の人〕を運び去る。（三三九）

〔欲〕流は一切處に流れ、葛藤は崩芽して存す、此の葛藤の生ずるを見ば、智慧を以て其の根を斷て。（三四〇）

衆生の愛せるもの、喜べるものは、過ぎ行くこと疾し、此の欲に湎れ、樂を求むるもの、彼等は老死に至る。（三四一）

欲に纏はれたる衆生は、罠に囚はれたる兎の如く奔馳す、結使の爲めに縛せられ、再再苦に逢ふこと久し。（三四二）

欲に纏はれたる衆生は、罠に囚はれたる兎の如く奔馳す、されば離塵を望める比丘は、己の愛欲を斷つべし。（三四三）

人の(三)矮林〔=欲〕を去りて、(四)叢林〔=欲〕に入り、一林〔=欲〕を脱れて一林〔=欲〕に入るもの、此の人を見よ、〔縛を〕脱して而も縛に赴くなり。（三四四）

鐵や、木や、又は草にて作れるものは、賢者は之を牢き縛と稱せず、珠環と、妻子との欲は貪著する所强し。　(三四五)

賢者は、之をぞ强くして「人を惡趣に」墮し、牢くして解き難き縛と云ふ、人は之を破りて、無欲「の身となり」、愛樂を棄てて出家す。　(三四六)

欲を樂しむものは「欲の」流に隨つて下ると、蜘蛛の自ら造りたる網を「下る」が如し、賢者は之を破りて、欲なく、所有ゆる苦惱を棄てて去る。　(三四七)

先なる「=過去」を棄て、後なる「=未來」を棄て、中なる「=現在」を棄てよ、「斯くするものは」生有の彼岸に到れるなり、一切處に著心なければ、更に生老に絆さるることあらじ。　(三四八)

疑念のために心惱み、欲熾にして、不淨を淨と見る人は、其の愛念益益增長す、斯る人は「其の」縛を堅くするなり。　(三四九)

疑念の滅を喜び、常に念覺ありて、不淨觀を修す、彼は「其の」愛念を滅さん、彼は魔の縛を斷たん。　(三五〇)

(五)圓成の域に達し、怖畏なく、愛を離れ、著なく、生有の棘を斷てり、是れ其の最後身なり。　(三五一)

愛を離れ、著を去り、(六)詞句に巧に、(七)綴りたる文字と、其の前後とを解す。彼は(八)最後身にして、大智者大丈夫と稱せらる。　(三五二)

(九)「我」所有ゆるものに克ち、所有ゆるものを知り、所有ゆる法に於て汙さるる所なし、所有ゆるものを棄て、(一〇)愛盡の上に於て解脫を得たり。自ら證り知りて、又誰をか「師と」仰がんや。　(三五三)

法施は、所有ゆる施に勝ち、法味は、所有ゆる味に勝ち、法樂は、所有ゆる樂に勝ち、愛盡は、所有ゆる苦に勝つ。　(三五四)

財は劣智の人を害へども〔一一〕度脱を求むる人を「害ふ」ことなし、財欲のために無智者は其の身を害ふこと、「猶ほ」他を「害ふ」が如し。（三五五）

田は惡草のために損はれ、此の羣生は貪欲のために損はる、されば離欲の人に施せる「物」には、大果報あり。（三五六）

田は惡草のために損はれ、此の羣生は瞋恚のために損はる、されば離瞋の人に施せる「物」には、大果報あり。（三五七）

田は惡草のために損はれ、此の羣生は愚癡のために損はる、されば離癡の人に施せる「物」には、大果報あり。（三五八）

田は惡草のために損はれ、此の羣生は意欲のために損はる、されば離慾の人に施せる「物」には、大果報あり。（三五九）

【一】Visattikā を『長老偈』三九九偈の英譯にてリスデビッ夫人は The poisoner of all mankind とす、あらゆる人類を毒するものの意、欲、欲望の意もあり。【二】學名を Andropogon murica tum と云ふ、一種の香草なり、其の效を優尸羅と云ふ、三三七偈を見よ。【三】Vanatha には矮樹林、下生、園欲等の意あり。【四】Vana にも森林、叢林、園欲等の意あり。【五】阿羅漢果を指すと譯せり。【六】言語と文句。【七】文字を集めたるもの、卽ち文章と、文章中文字の前後。【八】阿羅漢や獨覺や佛は一旦無餘涅槃に入れば、再び世に出ることなし、故に此等を指して最後身の人と云ふ。【九】諸經要集二一一偈、イチウッタカ一一二偈、マハーヴッガ（大品）一の六參照。【一〇】愛欲 愛會を盡すことにて阿羅漢果をいふ。【一一】彼岸に達せんと願へる人。

沙門品第二十五

眼を以て「自ら」攝するは善く、耳を以て「自ら」攝するは善し、鼻によりて攝するは善く、舌の上に「自ら」攝するは善し。（三六〇）

身に於て攝するは善く、語に於て攝するは善し、意を以て攝するは善く、一切處に攝するは善し、一切處に

攝する所ある比丘は諸の苦痛より脱る。（三六一）

手を防護し、足を防護し、語を防護するは防護するの上なり、内に樂あり、定あり、獨居して、足ることを知るもの、彼を〔人は〕比丘と呼ぶ。（三六二）

比丘の、口を防護し、適度に語りて、(一)調戲ならざる彼れ、〔若し〕法と義とを明さば、其の說く所は、甘味なり。（三六三）

法を樂園とし、法を樂み、法を思惟し、法を憶念する比丘は、正法より退墮することなし。（三六四）

己の得る所は之を輕んせざれ、他の〔得る所は之を〕羨まざれ。他の〔得る所を〕羨む比丘は安定を得ることなし。（三六五）

得る所少しと雖も、比丘若し之を輕んせざれば、諸天は、此の(二)淨活命、不屈撓〔の人〕を讚歎す。（三六六）

名色の上に於て、總て我有の念なく、又(三)其の消滅をも憂とせざれば、人は彼を比丘と呼ぶ。（三六七）

比丘の慈悲に住し、佛の敎を悅べるものは、靜穩の處、諸行の息止、安樂を得ん。（三六八）

比丘、此の(四)船を戽め、戽まば汝の〔船〕は疾く走らん、貪欲と瞋恚とを棄てて、其より汝は、涅槃に達せん。（三六九）

(五)五を斷ち、(六)五を棄て、更に(七)五を修せよ、(八)五著を越えたる比丘は、暴流を渡りたる〔人〕と稱せらる。（三七〇）

比丘、禪思せよ、怠惰なる勿れ、心を諸欲に迷はしむる勿れ、怠惰にして〔地獄に墮ち熱〕鐵丸を嚥む勿れ、〔獄火に〕燒かれて「苦し」と叫ぶこと勿れ。（三七一）

智なきものに禪なく、禪なきものには智なし、若し人に禪と智とあらば、彼は涅槃に近づけるなり。（三七二）

空屋に入りて、心を寂靜にしたる比丘、正しく法を觀

察せば、其の樂人界の上に出づ。（三七三）

〔人若し〕種種の方によりて、諸蘊の起滅を思念すれば、〔法〕喜、〔法〕悅を得、是れ智者の、甘露味とする所なり。（三七四）

此處に之は此の敎に於て、智ある比丘の先づ爲すべきとなり、諸根を防護し、足ることを知り、戒を以て〔自ら〕攝す、善良なる友の、清淨に生活し、精勤なるものと交れ、慈悲を行ひ、義務を全うせよ。其より歡喜多くして苦惱を盡すに至らん。（三七五、三七六）

凋みたる（九）拔師迦草の華を棄つるが如く、然く貪欲と瞋恚とを棄てよ、諸比丘。（三七七）

身を靜かにし、語を靜かにし、寂靜安定にして世樂を棄てたる比丘、之を安息〔の人〕と云ふ。（三七八）

己れ己を誡め、己れ己を檢めよ、比丘よ、斯く〔せば汝は〕自ら防護し、正念ありて、安隱に住せん。（三七九）

げに己は己の主、げに己は己の依所なり、されば、己を調御すること、商估の良馬を〔調御する〕が如くせよ。（三八〇）

歡喜多く、佛の敎に悅べる比丘は、靜隱の地、諸行の息止・安樂を得ん。（三八一）

比丘、年少なりとも、佛の敎に精勤せば、彼此の世間を照すこと、雲間を出でたる月輪の如くならん。（三八二）

【一】調戲又は掉擧とも云ふ、心の浮きて落著かざる狀態を指して云ふ。【二】清淨なる生活を營む人を云ふ。【三】名色を指して云ふ。【四】此の身より邪思惟の水を除くを云ふ。【五】五下分結、欲界に屬する五種の煩惱、欲界貪・瞋・身見・戒禁取見・疑。【六】五上分結、色無色の上二界に屬する五種の煩惱、色界貪・無色界貪・慢・掉擧・無明。【七】五根、信・進・念・定・慧。【八】五種の著、貪・瞋・癡・慢・見。【九】Vassikā.

婆羅門品第二十六

努力して流を截ち諸欲を去れ、（一）婆羅門、諸行の滅

を證れば、婆羅門、汝は(三)無爲〔の法〕を知らん　(三八三)
婆羅門、若し〔止觀の〕二法に於て、彼岸に達する時は、此の智者の愛結は總て盡くるに至る。　(三八四)
人に(三)彼岸なく此岸なく、彼此兩岸共になし、怖畏を離れ、愛結を除きたる、斯の如きを我は婆羅門と呼ぶ。　(三八五)
禪思ありて、離垢を求め、所作已に辨じて、漏あるなく、(四)最上利に達せるもの、我はこれを婆羅門と呼ぶ。　(三八六)
日は晝照り、月は夜輝く、武服せる刹利種は光り、禪思ある婆羅門は光る、されど佛は其の威光を以て總て晝夜に光る。　(三八七)
惡業を除けるは婆羅門、行を寂にせるは沙門と稱せらる、己の(五)垢穢を棄てたるによりて、彼は出家者と稱せらる。　(三八八)

婆羅門を毆つ勿れ、婆羅門は〔毆たるるとも〕怒を發つ勿れ、禍あれ、婆羅門を毆つものに。更に禍あれ、〔毆たれて〕怒るものに。　(三八九)
婆羅門若し心を其の愛好〔する所〕より遠ざくれば、之彼に小ならざる利益あり、〔他を〕害する意の消ゆる毎に苦惱亦隨つて滅す。　(三九〇)
人の身にも、語にも、意にも、惡作なく、三處に攝する所ある、我は之を婆羅門と呼ぶ。　(三九一)
〔人若し師〕より〔聞きて〕佛の說き給ひし法を曉らば此〔の師〕を敬ふこと、婆羅門の火祠を〔敬ふ〕が如くせよ。　(三九二)
婆羅門は結髮と姓と生とに依るにあらず、人に諦理と法とあらば彼は淸白なり、又婆羅門なり。　(三九三)
愚者よ、結髮は、汝に何〔の用〕かある、皮衣は汝に何〔の用〕かある、汝は内に愛著を〔抱きて〕、唯外を淨

うす。（三九四）

弊衣を著たる人の痩せて、脈管露はるるに至り、獨り林間に〔入りて〕禪思せるもの、之を我は婆羅門と呼ぶ。（三九五）

(六)我は(七)〔婆羅門女の〕胎より出で、〔婆羅門の〕母より生れたるの故を以て婆羅門と呼ぶとなし、彼若し我有あらば、彼は〔我を〕(八)爾と呼ぶの徒なり、我有なく取著なきもの、之を我は婆羅門と呼ぶ。（三九六）

所有ゆる愛結を斷ち、怖るる所なく、著を超え、繫を離れたるもの、此の人を我は婆羅門と呼ぶ。（三九七）

(九)紐と絡と索とを、之に屬するものと共に、併せ斷ち、梁木を摧きたる智者、われは此の人を婆羅門と呼ふ。（三九八）

惡罵も、打擲も、監禁も怒ることなくして默受し、堪忍力ありて、心猛き人、われは斯の如き人を婆羅門と呼ぶ。（三九九）

忿怒なく、行あり、戒あり、欲を離れ、自調して、最後身に達せるもの、我は之を婆羅門と呼ぶ。（四〇〇）

荷葉の上なる水の如く、錐の頭なる罌粟の如く、諸欲に染せざるもの、我は之を婆羅門と名く。（四〇一）

己の苦惱の此處に滅ぶるを知り、重擔を卸し、繫縛を離れたるもの、我は之を婆羅門と稱す。（四〇二）

深智あり、賢才ありて、道非道を辨へ、最上利に到達せるもの、我は之を婆羅門と呼ぶ。（四〇三）

在家人にも、出家人にも、其の間に混らず、家なくして遊行し、欲寡きもの、われは此の人を婆羅門と云ふ。（四〇四）

弱きも强きも、有情に對して刀杖を加へず、之を害ふことなく、將た殺さしむることなき、此の人を我は婆羅門と呼ぶ。（四〇五）

敵意ある人の間にありて敵意なく、暴者の中にありて心温かに、取著ある人の中にありて取著なき、之を我は婆羅門と名く。（四〇六）

人の貪と、瞋と、慢と、覆と共に落つると、錐頭の罌粟の如くなる、我は之を婆羅門と名く。（四〇七）

麤ならず、意義を含みて、眞なる語を吐き、之によりて他を怒らしむることなき、われは之を婆羅門と稱す。（四〇八）

此の世にありて、長きも短きも、小なるも大なるも、善きも惡きも、與へられざるを取ることなき、我は之を婆羅門と名く。（四〇九）

此の世にも彼の世にも、欲望あるなく、意樂なく、繋縛を離れたる、我は之を婆羅門と云ふ。（四一〇）

人に依處なく、智慧ありて、疑惑なく、不死の極處に到れる、此の人を我は婆羅門と呼ぶ。（四一一）

此處に福業も、罪業も共に「脫れて」、著を伏し、憂なく、染なく、清淨なるもの、此の人を我は婆羅門と呼ぶ。（四一二）

曇りなき月の如く「心」清く、澄み、濁りなく、歡樂の心盡きたる人、我は之を婆羅門と稱す。（四一三）

此の泥途・難路・輪廻・愚癡を超え、渡りて彼岸に到り禪思ありて、欲なく、疑なく、執なくして靜穩に歸せる、我は此「の人」を呼んで婆羅門と云ふ。（四一四）

此處に諸欲を棄て、家を離れて遊行し、欲有を滅したる人、之を我は婆羅門と呼ぶ。（四一五）

此處に愛著を棄て、家を離れて遊行し、愛有を滅したる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。（四一六）

人界の縛を棄て、天界の縛を超えたり、所有ゆる繋縛を離れたる人、我は之を婆羅門と云ふ。（四一七）

樂と非樂とを棄て、清涼に歸して、有質なく、所有ゆ

る世間に打ち勝ちたる勇士、我は此の人を婆羅門と云ふ。 (四一八)

總て有情の死と生とを知り、執著の念なき善趣の智者、我は之を婆羅門と呼ぶ。 (四一九)

諸天も、乾闥婆も、人間も、其の行く道を窺ひ知るなし、此の漏盡の阿羅漢、我は之を婆羅門と呼ぶ。(四二〇)

彼の過去にも、未來にも、將た中間にも、己の有とすべきものなし、我有なく取著なき、我は之を婆羅門と呼ぶ。 (四二一)

最雄、最勝の人、勇士、大仙、勝者、無欲にして學を訖りたる智者、我は之を婆羅門と呼ぶ。 (四二二)

宿世を知り天界と惡趣とを見、更に生の滿盡に到り、智の極に達したる牟尼にして、總て果すべきを果したる人、我は之を婆羅門と呼ぶ。 (四二三)

國譯法句經 終

婆羅門品第二十六

【一】此の偈以下、偈毎に「婆羅門」の語を用ふ、是れ印度四姓中の婆羅門を指すにあらずして、煩惱を滅し惡業を除きたる人の義に用ひたるなり。 【二】涅槃の謂なり。 【三】法句經註解書には、彼岸此岸、彼此岸を、内の六入、外の六入、内外の六入なりと解し、アンデルセンは、來生、此生、及び全一生なりと註し、而も疑を存せり。 【四】阿羅漢果を云ふ。 【五】愛欲等の諸煩惱。 【六】以下四二三偈まで諸經要集六二〇―六四七偈參照。 【七】生のために、母のために婆羅門と呼ぶことなし。 【八】所謂四姓中の婆羅門族に生れたるものは世尊を呼ぶに bho（ボー）（爾又は友）の語を以てせり、故に彼を稱して bhovādi（ボーヴーヂ）（佛を呼ぶに爾の語を以てするもの）と名けたり。 【九】紐は慾に譬へ、緒は愛に、索は六十二見に、梁木は之を無明に譬ふ、而して智者とは四諦の理を知りたる人の謂なり。

國譯長老偈

彼の祥者、尊貴者、正遍覺者に歸命す。

〔一〕序偈

山間の窟中に吼ゆる牙ある獅子の如き、心を修練したる〔人人〕一人一人の偈を聞け。〔一〕

其の名に應じ、其の姓に應じ、意嚮に順ひ、法に順ひて住する智者は懈倦なくして住しぬ。〔二〕

終局の成就を思察する〔人人〕は處處を觀、不滅の道に達して、此の義を宣べたり。〔三〕

【一】原典には此の題目なし。【二】直譯、成就したる終局の意、涅槃をいふ。

一頌品第一

第一章

我が屋舍は葺かれ、風を防ぎて樂しく、天、思のままに雨を降せ、我が心は善定に住し、離脱したり、我は專心にして住す、〔されば〕天、雨を降せ。〔一〕

斯く具壽須菩提長老は偈を唱へたりとぞ。

寂靜に達し、止息に歸し、〔一〕咒神を誦し、輕躁ならず邪惡の法を拂ふこと風の樹葉を〔拂ふ〕が如くす。〔二〕

斯く具壽摩訶拘絺羅長老は偈を唱へたりとぞ。

如來の此の智慧を見よ、中夜に點されたる火の如し、來るもの疑を除く。〔如來は〕光を與へ、眼を與ふる

ものなり。

斯く具壽(三)疑惑離曰長老は偈を述べたりとぞ。

(三)
善人、識者、(三)利を見る人とのみ交を結べ、廣大、深遠にして見難く、微妙微細なる利は、精勤にして明眼なる智者、之に逮達す。

斯く具壽富樓那慈滿子長老は偈を唱へたりとぞ。

(四)
御し難く、調御によりて御せられたる陀驃はよく滿足し、疑惑を超えたり、是れ勝利者にして怖畏を除きたる陀驃は寂滅を得、心安立せるが故なり。

斯く具壽陀驃長老は偈を唱へたりとぞ。

(五)
比丘の、(四)寒林に赴き、獨り、滿足し、心定に住するものは勝利者なり、(五)悚懼を除き、身念を護れる堅固人なり。

斯く具壽(六)シータヴニヤ長老は偈を唱へたりとぞ。

(六)
死王の軍を退くること、大水の弱き蘆の堤を〔退くる〕が如くするものは、勝利者にして怖畏を除けるものなり、是れ彼は調御あり、寂滅を得、心安立せるが故なり。

斯く具壽バッリヤ長老は偈を唱へたりとぞ。

(七)
御し難く、調御によりて御せられたる勇士はよく滿足し、疑惑を超えたり、勝利者にして怖畏を除ける彼毘羅は、寂滅を得、心安立せり。

右(七)毘羅長老

(八)
分別せる諸法の中に於て最勝なるものに我は達しぬ、これ我善く到れるなり惡く到れるにあらず、我が之を度量するや邪ならず。

右畢蘭陀筏蹉長老

(九)
(八)吠陀に通じ、寂靜に達し、自ら制して、此の世にも彼の世にも、欲望を捨てたるものは、あらゆる法

のために、染せらるゝことなくして、世の起滅を知らん。　(10)

右ブンナマーサ長老

【一】Mantabhani マントラ卽ち神咒、明咒、咒文を誦するに堪ふるものの意にて此の人もと婆羅門なりしなり。【二】Kaṅkharevata.【三】Attho 意、義、利、事などの舊き譯あり、リスデビヅ夫人は good と譯す、善利と復譯すべきか、atthadassi を those who see the good とせるがファウスベルは諸經要集三八五偈にて (one) who looks for what is salutary となす、註書には hitanupassi と註するが故に利を見るものと譯し置きたり。【四】Sītavanaṁ 摩揭陀國の首都なる王舍城に近き處にある墓地なり。【五】Lomahaṁsa 身毛卓竪。【六】Sītavaniya 寒林に屬する、寒林に住めるなどの意あり、彼の本名はサンブータ(Sambhūta)なりしなり。【七】Vīro 勇士の意あり。【八】Vedagu リスデビヅ夫人は one who hathe beta'en himself to truth 眞理に身を委ねたるものと譯し、長老尼偈二九〇偈には won the true Veda-lore と譯せり。ファウスベル氏は諸經要集中諸所に one who is accomplished とせり、此の句を如何に和譯すべきかは困難なる問題なるが、多分成熟したる人、完成熟練の人の意かと思はる、余は總ての場合、此處に同樣の譯を與へ置きたり。【九】以下各品の終に Uddānaṁ (目次、摘要)を擧ぐ、皆偈頌體にして、上一品中に出たる人名又は偈を示せり、本譯にては悉く之を省きたり。

第二章

佛の說示し給ひし法を喜ぶこと多きものは(一)道、寂靜、諸行の寂滅、安樂を得ん。　(一一)

右チューラ・ガヴッチャ長老

智慧の力あり、戒行を有し、定に住し、禪思を樂とし、正念あるものは適量の食を食ひ、此〔の教〕にありて、貪欲を離れ、時〔の至る〕を待て。　(一二)

右マハー・ガヴッチャ長老

碧雲の色ありて美しく、(二)冷にして、淸き水を湛へ、(三)インダゴーパカ蟲に掩はれたる此等の岩山は我を樂ましむ。　(一三)

右ヴナヴッチャ長老

〔我が〕師は我に語げて云へり「シーヴカ、我、此處より去らん、我が身は村里に住し、我が心は森林に去れり、我疲倦せりと雖も去らん、識者には愛著あることなし」と。（一四）

右ヴナヴノチャ長老の〔弟子なる〕沙彌

【四】五〔下分結〕を斷ち、五〔上分結〕を捨て、更に五〔根〕を修練せよ、五〔著〕を超えたる比丘は暴流を渡りたる〔人〕と稱せらる。（一五）

右クンダダーナ長老

猶ほ犂挽ける牛の優れて生善きは、行くに勞苦少きが如く、等しく安樂を得、貪欲を去りたる我は日夜を過して勞苦少し。（一六）

右ベーラッタシーサ長老

懶惰にして飽食安眠、轉輾して臥する癡者は、供食を以て飼はるゝ大豕の如く再再母胞に入る。（一七）

右ダーサカ長老

ベーサカラー林中にありて比丘は佛の嗣續者となりき、唯骨想觀によりて此の大地に觸れたり、我が貪欲と思ひしもの、其は疾くにぞ捨てられたる。（一八）

右シンガーラピター長老

渠工は水を導き、箭匠は箭を矯む、木工は材を曲げ、德行の人は自ら調ふ。（一九）

右クラ長老

我に死の怖畏なく、生の欲望なし、知覺あり、正念ありて、我は積集〔の身〕を棄てん。（二〇）

右阿逸多長老

【一】四語皆涅槃の異名。　【二】冷なる水あり、淸きを湛ふる〔池　あるの意。　【三】Indagopaka 因陀羅卽ち帝釋天(の牛群)を保護するものの意、蟲類の一種にして　赤色又は白色なりと云ふ。　【四】法句經三七〇偈註參照。

第三章

我は畏しきを怖れず、我等の師は不滅の道を熟知したまふ。怖畏の住まることなき道、諸比丘は之によりて行く。（二一）

右尼拘律陀長老

色碧にして、美しき頸あり、冠ある孔雀は、カーラヷ林中にありて叫ぶ、冷風の音聲ある彼等〔孔雀〕は〔我が〕眠れる〔又は〕定に入れるを覺さしむ。（二二）

右チッタカ長老

我（一）竹叢の中にありて甘き乳糜を喫し、好く諸蘊の起滅を思念し、心を遠離に專にして、（三）山巓を占得せん。（二三）

右ゴーサーラ長老

我出家してより未だ一年に滿たず、法の善き性を見よ、我〔既に〕三明に達し、佛の教を成ぜり。（二四）

右スガンダ長老

彼の心は常に光輝より生じ、（三）〔極〕果に向ふ、（四）黑〔魔〕よ、斯の如き比丘を害せば、汝は苦惱に會ふべし。（二五）

右ナンヂヤ長老

日の親なる佛の善く說きたまひたる言敎を聞きて、我は（五）微妙〔の法〕を證すること、猶ほ箭を以て毫端に〔中つる〕が如くなりき。（二六）

右無畏長老

（六）突婆草、（七）功祚草、（八）ボータリカ草、（九）憂尸羅根、（一〇）文邪草、（一一）婆羅婆草〔等〕、我は心を遠離に專にして、〔我が〕胸より〔此等の草を〕遠けん。（二七）

右ローマサカンギヤ長老

汝物〔欲を求むるに〕專心なることなきや、裝飾を樂

むことなきや、(三)戒徳の香は汝の送る所にして、他
の人の〔送る所〕にあらざるや。 (二八)

右(三)チャンブガーミカプッタ長老

己を矯むること、箭工の箭を〔矯むる〕が如くし、心
を直くして、無明を斷ぜよ、汝ハーリタ。 (二九)

右ハーリタ長老

我が病起るや、我に正念起りぬ、「〔今〕我が病起れり、
之我が放逸なるべき時にあらず」と。 (三〇)

右ウッチャ長老

【一】Velugumba 固有名詞なるが如し。【二】Sanu には絶頂、臺地、森林などの意あり、此處は、山頂に登り其處にて入定するの意、或は最上果に達するの意なり。【三】阿羅漢果を指す。【四】Kanha 黒の意あり、魔王を指す。【五】Nipuna 微妙。【六】Dabba 功幹草と同じ。【七】姑尸、吉祥と譯す、神草にして供犧の式に用ひらる、佛傳中に出づ。【八】Potalika又potagalaとも云ふ、草の一種。【九】Usira は b imna と名くる香草の根なり、此の譬喩は法句經三三七偈に出づ、就て見るべし。【一〇】Munja之も神聖なる草の一種なり、戰場に出るもの生きて還らざるの印として己の頭、旗又は武具に文邪草を著けたりと云ふ。【一一】Babbaja 粗き草の一種。【一二】戒より成れる香、戒之香、戒香なり。【一三】閻浮村の人の見の意。

第四章

深林、大林の中に於て虻〔又は〕蚊に螫され、〔而も〕
戰場に〔臨める〕象の如く、正念を失はずして其の處
に任せん。 (三一)

右ガフヴラチーリヤ比丘

老ゆるものを以て(一)老いざるものに〔換へ〕、熱苦あ
るものを以て(一)平安、(一)最上の寂靜、(一)無上の安隱
に換へん。 (三二)

右スッピヤ長老

〔母の〕愛しき一人兒に、慈悲を垂るゝが如く、等し
く總ゆる處に於て、總ゆる有情に對して、慈悲を垂

れよ。（三三）

右ソーバーカ長老

智識ある人に取りては、此等の近きに在らざるものこそ常に尊きなれ、我村里より森林に來り、其より〔我が〕家に入りぬ、其より起ちて〔我〕ポーシャは告ぐることなくして去りぬ。（三四）

右ポーシャ長老

安樂を希ふものは之を行うて安樂を得ん、不死〔の境〕に達せんがために尊き、直き路なる、八種道を修習するものは、名を揚げ、譽を得ん。（三五）

右サーマンニャカーニ長老

〔我等〕の聞く所は善く、行ふ所は善く、常に住するに家なきは善し、義利を問ひ、右繞〔の禮を〕行ふ、之無一物者の沙門道なり。（三六）

右（二）クマー兒長老

自制心なきもの巡行して、諸の國に至り、定も亦之を喪ふ、巡國して何をか爲さんや、されば諍論を制して、（三）單り禪慮を凝せ。（三七）

右クマー兒長老の友〔なる某〕長老

神通を以て（四）舍勞浮河を設けたる彼の依賴心なく慾心なき牛主、此のあらゆる著を超え、生有の彼岸に到りたる大仙を、諸天は禮拜す。（三八）

右牛司長老

槍を以て刺さるゝが如く、頭を燒かるゝが如し、正念の比丘は貪欲を捨てんがために出遊せよ。（三九）

右帝須長老

槍を以て刺さるゝが如く、頭を燒かるゝが如し、正念の比丘は生有の欲を捨てんがために出遊せよ。（四〇）

右ワッダマーナ長老

【一】共に涅槃の異名なり。　【二】Kumā と呼ぶ母の兒。　【三】A＋

punakkhata。【四】Sarabhū 恒河の支流にして、古昔沙計多(Sāketa)城の中を流れたり。長老此の河の溢ろゝを防ぎ止めしことあり、故にいふ。

第五章

右シリワッダ長老

電は(一)毘婆羅山と、(二)槃荼婆山の岩窟に墜つ、斯の比倫なき〔佛〕の兒は山窟に入りて禪思す。（四一）

右カヂラヷニヤ長老

(三)チャーラ、ウパチャーラ、シースーパチャーラ、意を用ひて住せよ、汝等の處に來れるは髮を裂くが如き人なり。（四二）

右(四)スマンガラ長老

善く脱れ、善く脱れたり、我が三の曲れるものより善く脱れたるや善し、鎌と、犂と、小なる鋤となり、假令〔此等〕此處にあり、此處にあらんとも要なし、要なし、スマンガラ、禪慮を凝せ、スマンガラ、禪處を凝せ、スマンガラ、精勤にして住せよ。（四三）

右サーヌ長老

母よ、〔人は〕、生きて〔而も〕見えざるもの、或は既に死したるものを嘆く、母よ、汝は我が生くるを見ながら、母よ、何故に汝は我を哭く。（四四）

右ラマニーヤ弉ハーリ長老

恰も優れて生善き〔獸〕の倒れて、再び起つが如く、等しく〔正〕見を具ふる者、正遍覺者の弟子、生善き我を、佛の眞子なりと見よ。（四五）

右サミッヂ長老

信心によりて我は在家を出で出家の身となり、我が正念と智慧とは增し、我が心は善定に住せり、〔魔王〕汝の好む所に隨つて〔變化〕相を作せ、〔之〕我を病しむることなけん。（四六）

覺雄、〔我〕汝に歸命し奉る、汝は一切處に於て離脱し給へり、汝の教に住する我は無漏にして住す。（四七）

右ウッチャヤ長老

我在家より出でて出家の身となりし以來、卑く〔且つ〕過ある思惟〔の我に起りしこと〕を知らず。（四八）

右サンヂャヤ長老

〔魔王、汝〕聲を揚げ、響を發すとも、我が此の心はために躁ぐことなし、是我〔心〕一境を樂とすればなり。（四九）

右ラーマネーヤカ長老

大地は雨に注がれ、風吹き、電は空に走る、〔我が〕疑惑は止息し、我が心は善く定に住せり。（五〇）

右ヸマラ長老

【一】Vebhāra と Paṇḍava は王舍城に近く聳ゆる五峯中の二峯なり。

【二】此等三人は長老の三姉妹の兒の出家せしものなり、一日長老病み、舍利弗來りて病を問ふ、長老遙に之を望み、偈を以て三人を誡めしなり。

【三】此の長老の前身は農夫なりしことを思ふべし。

第六章

雨降りて、〔其の音〕恰も律に調へり、我が屋舍は葺かれ、風を防ぎて樂しし、我が心亦定に住す、されば天若し雨を〔降さんと〕欲せば〔之を〕降せ。（五一）

右ゴーヂカ長老

雨降りて、〔其の音〕恰も律に調へり、我が屋舍は葺かれ、風を防ぎて樂しし、心は亦身に於て善定に住せり、されば天若し雨を〔降さんと〕欲せば〔之を〕降せ。（五二）

右スバーフ長老

雨降りて、〔其の音〕恰も律に調へり、我が屋舍は葺かれ、風を防ぎて樂しし、此處に我精勤にして住す、されば天若し雨を〔降さん〕と欲せば、〔之を〕降せ。（五三）

右ヷッリヤ長老
雨降りて、「其の音」恰も律に調へり、我が屋舍は葺かれ、風を防ぎて樂しし、我此處に第二人者なくして住す、されば天若し雨を「降さんと」欲せば「之を」降せ。（五四）

右ウッチャ長老
アンヂャナ林中に入り、座牀を屋舍となし、三明に達し、佛の敎を成ぜり。（五五）

右アンヂャナーヴニャ長老
誰人か(一)草舍中にある、草舍中なる比丘は貪欲を離れ、心を善定に住せり、汝斯の如く「之を」知れ、「さらば」、汝の草舍を構へし功は空しからざるなり。（五六）

右草舍住長老
汝は此の草舍を古しと云ひ、他に新なる草舍を「得んと」願へりや、草舍の欲を去れ、比丘よ、新しき草舍は更に苦ならん。（五七）

右草舍住長老
信心によりて與へられたる我が草舍は樂むべく、愛すべし、我に幼女の要あるなし、汝婦女子等、汝等を要する人の處に去れ。（五八）

右(二)ラマニーヤクチカ長老
我信心によりて出家し、森林中に我が草舍を構へぬ、「我は」精勤、熱烈にして、知覺あり、正念を失ふことなし。（五九）

右拘薩羅住長老
我所要ありて草舍に入りしが、我が此等の思惟は成じぬ、我憍慢と惰眠とを捨てて、明と解脫とを索めん。（六〇）

【一】此の長老或日外に出でて雨に會ひ、草舍の中に之を避け、其の處にありて羅漢果を得たり、草舍の主來りて誰何せし時、長老は此の偈を以て答へたり。　【二】可樂の草舍に屬する・住するの意。

第七章

〔自ら〕見るものは〔他の〕見る人を見、見ざる人をも亦見る、〔されど自ら〕見ざるものは〔他の〕見ざるものも、見るものも亦見ることなし。（六一）

右婆師波長老

林中に棄てられたる木屑の如く、我等は個個〔處を異にして〕森林中に住む、多のものは我が斯の如くなるを羨むこと、恰も墮惡趣のものの生天のものを〔羨む〕が如くなり。（六二）

右伐地子長老

(一)死したるは墮ち、墮ちて欲心あるは又再び來る、〔我は〕作すべきことを作し、樂むべきことを樂めり、安樂は安樂に隨ひ來る。（六三）

右バッカ長老

我は(二)樹の名を得たるものより生れ、(三)白旗を〔標とせるものを父として〕生ひ出でぬ、(四)旗を棄てたるにより、(五)旗によりて、我は(六)大旗を滅しぬ。（六四）

右離垢憍陳如長老

ウッケーバカタヴッチャの多年の間に蘊蓄したる所、そを〔彼は〕(七)安坐し大喜悦にして在家人のために說示す。（六五）

右ウッケーバカタヴッチャ長老

あらゆる法門に熟通せる大雄氏は〔我がために〕敎を垂れたまひ、我は其の法を聞き、樂みて〔其の〕側に住しぬ、三明に達し佛の敎を成じ覺れり。（六六）

右メーギヤ長老

我諸の煩惱を燒盡し、あらゆる生有を斷除し、生〔死〕輪廻を斷盡し〔たれば〕、今や〔我に〕再生あるなし。（六七）

右エーカダムマサヴニーヤ長老

増上心ありて放逸ならず、寂默の道に學修する智者、斯の寂靜にして常に正念あるものには悲憂あることなし。（六八）

右エークッダーニヤ長老

我(八)勝一切智者の說きたまひし大味ある大〔人〕の法門を聞き、不滅に到らんがために道を行ひぬ、彼は安隱の道に熟達せし人なりき。（六九）

右チャンナ長老

此の處にありては戒こそは最第一なれ、而して智者は最上なり、人間界にも天上界にも戒智ある人に勝利あり。（七〇）

右プンナ長老

【一】一日乞食の後樹下に坐して食を取らんとせり、時に多くの鳶來りて長老の食を奪ひ去り、互に相爭ひしが、長老は之を見て開悟せり。【二】長老の母はAmbapālī(菴婆波利)と呼ぶ遊女なりき、菴婆はマンゴー果樹なれば樹の名を得たるものと云ふ。【三】頻毘沙羅王を指す、白旗は此の王家の旗章たりしなり。【四】此の旗は欲を意味す。【五】此の旗は智慧の意。【六】大旗とは魔王波旬を指す。【七】Sunisinna善く坐したるの意、英譯にはseated in honourとす。【八佛】の別號。

第八章

極細微妙なる義を見、巧慧にして、行卑遜に、善く佛に事ふるを習とせるもの、斯る人には涅槃は得難からず。（七一）

右ヴッチャパーラ長老

(一)猶ほ幼き樹の頂繁茂し、枝條生じたるは除き去ること難きが如し、我が妻を娶ることや之に等しし、我を許せ、今や我出家せり。（七二）

右アーッマ長老

〔他人の〕年老い、惱み、病み、死せるを見、又壽盡

に達せるを見、其より我は諸の樂しき欲を棄てて、出家して得度しき。（七三）

右マーナヷ長老

貪欲と瞋恚、昏沈と懶惰、調戲と疑惑と總て比丘には之あることなし。（七四）

右スャーマナ長老

修養宜しき人を見るは善く、疑は壞られ、智は增す、〔彼等は〕愚者をも識者となす、されば善人の合會するは善し。（七五）

右スサーラーダ長老

起れるものの閒にありて倒れ、倒れたるものの閒にありて起れよ、住せざるものの中にありて住し、樂むものの中にありて樂まざれ。（七六）

右ピヤンヂャハ長老

昔此の心は、望に任せ、欲に隨ひ、樂とする所に任せて流離せしが、我今日之を善く制御すること、鉤を取れるものの枉象を〔制御するが〕如くせん。（七七）

右ハッターローハ、ブッタ長老

我〔便宜を〕得ずして、多生輪廻界を奔馳したり、〔今や〕此の苦より生ぜし我が苦蘊は抑止せられぬ。（七八）

右メンダシラ長老

我が貪は總て捨てられ、瞋は總て除かれ、我が癡は總て去れり、我淸涼にして寂滅を得たり。（七九）

右ラッキタ長老

我が造りたる業は小なるも大なるも、總て斷じ盡され、今や我に再生あるなし。（八〇）

右ウッカ長老

〔一〕彼に妻を娶らせんとせし時、之を拒みて家を出て、得度したるなり。

第九章

昔他の生に於て我が犯したる惡業は此處に之を感ずべきなり、[されど]他に(一)素因あるなし。(八一)

右サミチグッタ長老

(二)兒よ、乞食に容易く、安全にして、怖畏なき處に往け、悲憂のために惱まさるること莫れ。(八二)

右迦葉長老

(三)獅子よ、精勤に、晝夜に懈倦なくして住し、善法を修習し、疾く積集[の身を]棄てよ。(八三)

右獅子長老

(四)終夜安眠し、晝間は會話を樂む、愚人は何時か苦惱を盡さんとする。(八四)

右ニータ長老

心像に巧に、遠離の妙味を識り、禪思あり、智慧あり、知覺あるものは非世俗の樂を獲ん。(八五)

右スナーガ長老

此の[敎の]外なる他の多くの說者の道は此[の敎]の如く涅槃に導くものにあらずと、斯く世尊師は衆を誡めたまふこと己の掌に示すが如くしたまふ。(八六)

右ナーギタ長老

諸蘊を如實に見、あらゆる生有を壞り、生[死]輪廻を斷盡し[たれば]、今や[我に]再生あるなし。(八七)

右パギッタ長老

我我が身を水より陸に揚ぐるを得ず、大水に漂されつつ諦理を覺りき。(八八)

右アッヂュナ長老

泥濘を超え、魔界を遠かり、[我は]暴流と結縛とを脫れ、あらゆる憍慢を盡せり。(八九)

右デーヴサバ長老

五種の蘊は知り悉され、根本を斷たれて存す、生[死]輪廻は斷盡せられ[たれば]、今や[我に]再生あるな

し。 （九〇）

右右サーミダッタ長老

【一】今後生を受くべき業因。 【二】此の偈は迦葉長老の母、長老の遊行を送りたるなり。 【三】之は世尊の獅子長老を誡めたまひし偈なり。 【四】之は世尊のニータ長老を誡めたまひし偈なり。

第十章

我が今日享けたる〔食の〕如き、斯る百味の甘露食は
未だ想望せざりし所なり、知見無量なる瞿曇佛は法
を説き給へり。 （九一）

右バリブンナカ長老

其の漏や斷じ盡され、食に依著することなく、其の
行處は空、無相、解脫なり、空を〔行く〕鳥の如く、
其の跡を測ること難し。 （九二）

右弗ヂャヤ長老

エーラカ、諸欲は苦なり、エーラカ、諸欲は樂にあ
らず、エーラカ、諸欲を求むるもの、彼は苦を求む
るなり、エーラカ、諸欲を求めざるもの、彼は苦を
求むるにあらず。 （九三）

右エーラカ長老

世尊、釋子、吉祥者に歸命し奉る、此の最第一の法
は此の最第一の達者によりて說き示されたり。（九四）

右メッタヂャ長老

我は眼を害ひたる盲者にして、長き難路を旅す、假
令〔路邊に〕臥すとも罪を犯せる伴とは行かじ。（九五）

右チャックバーラ長老

一本の花を〔喜〕捨して八億年の間、諸天の中に往來
し、餘福によりて寂滅に歸したり。 （九六）

右カンダスマナ長老

(一)價貴く、黃金と蟲脂とを以て造れる鉢を棄て、

土製の鉢を取れり、是我が第二の灌頂なり。（九七）

右チッサ長老

愛想を思惟するものは、色を見て正念を忘失す、染著の心あるものは之を感受し、且つ愛執す、生有の根本を將來すべき彼が諸漏は增長す。（九八）

右アバヤ長老

愛想を思惟するものは、聲を聞いて正念を忘失す、染著の心あるものは之を感受し、且つ愛執す、輪廻を將來すべき彼が諸漏は增長す。（九九）

右ウッヂヤ長老

正勤を具有し、念住を行處とし、解脫の華に覆はる無漏〔の人〕は寂滅涅槃に歸せん。（一〇〇）

右テーヷサヷ長老

【一】彼王族より出でゝ出家したり。

第十一章

在家の生活を捨つとも、己〔の務〕を終へず、口を犂とし、腹を大事として懶惰なるものは供食を以て飼はるる大豕の如く、數數胞胎に入る。（一〇一）

右ベーラッタカーニ長老

憍慢のために欺かれ、心は諸行の中に汚さる、利得と不利得とによりて、〔心〕動著するものは、三昧に至ることなし。（一〇二）

右セーリッチャ長老

是は我が所要にあらず、我は安樂にして法味に飽けり、我は最上の第一味を喫して、毒と親交をなすことなし。（一〇三）

右バンヅラ長老

我が體は輕浮にして、大なる喜樂に觸る、我が體は

風に吹かる丶棉花の如くに浮ぶ。（一〇四）

右キタカ長老

厭うては住することなく、樂むとも去れ、明眼にして住するものは、斯く不利を以ては住せざれ。（一〇五）

右マリタヴンバ長老

百の標あり、百の相を有する意義の、一の標を見るものは、愚者にして、百［の標］を見るものは、識者なり。（一〇六）

右スヘーマンタ長老

我比量して在家を出でて、出家の身となれり、三明に達し、佛の敎を成じ竟んぬ。（一〇七）

右ダママサヴ長老

［我］齡百二十歲にして出家し、三明に通じ、佛の敎を成就せり。（一〇八）

右ダムマサヴピツ長老

此の獨居の人は、（一）第一利濟慈愍者の敎を復誦せず、彼は新に生れたる林間の鹿の如く、然く諸根を縱にして住す。（二）（一〇九）

右サンガラッキタ長老

樹は新に喜雨を濺がれて山巓に繁茂す、遠離を欲し、念を森林に掛くるウサバには益々善事來る。（一一〇）

右ウサバ長老

【一】佛世尊を云ふ。　【二】彼此の偈を作りて、其の同行の懈怠者を誡めたり。

第十二章

出家は遂げ難く、在家は住み難く、法は深遠に、富は得難し、生活は艱難にして此とし彼とすべからず、常に無常を思念するぞ適はしき。（一一一）

右チェンタ長老

我は三明を有し、心の安息に巧なる大禪定家なり、

我〔既に〕己利に達し、佛の教を成ぜり。（一二二）

右ヴッチャゴッタ長老

清みたる水あり、大なる磐石あり、黒面猿と鹿と羣り、水〔草〕セーヷーラに覆はる、此等の岩山は我をして樂ましむ。（一二三）

右ヷナヷッチャ長老

〔在家の〕生活を捨つるとも、身の長大を重しとし、肉身の安樂を貪るものに、如何で沙門の好事あるべき。（一二四）

右アヂムッタ長老

(一)數多の(二)クタヂャ樹と(三)サルラキー樹とある山、名高く聞え、〔綠林〕に覆はるゝ獼夫山のために、彼は〔極果に〕送られたり。（一二五）

右摩訶那摩長老

六の觸處を捨て、〔六根〕門を護り、よく自ら制し、邪惡の根本を斷ちて、我は漏盡に達せり。（一二六）

右パーラーパリヤ長老

能く塗粧し、能く服裝し、あらゆる嚴身の具を著け飾れる〔在家の身にして〕、我は三明を獲、佛の教を成就せり。（一二七）

右耶舍長老

齡の頽るゝことは恰も敎令に出るが如く、彼の女の形色は他〔の形色〕の如くなり、家を離れて住せしことなき此の正念の人、己を追憶すること、他を〔追憶するが〕如し。（一二八）

右金毘羅長老

樹蔭を占得せよ、涅槃を胸臆に沈めよ、瞿曇、禪思せよ、放逸なることなかれ、汝空噪して何をかなさん。（一二九）

右伐地子長老

五蘊は了知せられ、[其の]根本は斷じ盡されたり、苦惱の滅盡に達し、我は諸漏の斷滅に到れり。(一二〇)

右イシダッタ長老

[一]彼出家を厭ひて山を攀ぢ崖より身を投ぜんとせし刹那、此の偈を誦し頓て極果に逹しき。[二]Kutaja瓶生と直譯すべし、Girimallika山鬘と云ふ樹の名なり。[三]Sallaki樹名、象は好みて食すと云ふ、Indasala因陀羅沙羅とも云ふ。

二頌品第二

第一章

有に常住なるものなく、又行に常恒なるものなし、此等諸蘊は生起し、順次に壞滅す。(一二一)

此の患難を知りて、我は生有を求めず、あらゆる欲より離れて、我は漏盡に逹せり。(一二二)

具壽鬱多羅長老は斯の如く偈を唱へたりとぞ。

此[の生活]は制度なき生活にあらず、食は[我が]胸に近づく[る所]にあらず、[されど]身は食によりて住立することを辨へて、[我]乞食に赴く。(一二三)

是れ[賢者]は、在家の禮拜供養は之を淤泥なりと知りたればなり、細き箭は之を拔くこと難く、惡人の恭敬は之を捨つること難し。(一二四)

具壽なる賓頭羅跋羅墮闍長老は斯の如く偈を唱へたりとぞ。

(一)猿あり五の戸ある家に入りて、ムフンムフンと叫びつゝ、戸戸を廻り歩く。(一二五)

猿よ、立て、走ることなかれ、是れ汝[今は]曩にありけるが如くあらざるべきが故なり、汝智慧により て制せらる、之よりして、汝は遠きに到ることなけん。(一二六)

右ヴルリヤ長老

恒伽河の岸邊に於いて、我三多羅葉の茅舍を構へたり、我が鉢は屍に〔乳を〕灑ぐの器、又た衣服は襤褸なり。（一二七）

兩雨安居の間、我は唯一語を發せしのみ、第三雨安居の間に〔我〕闇蘊を破れり。（一二八）

右恒河岸住比丘

假令人三明あり、死を捨て、漏を盡せりとも、愚者無智者は之を少智者なりと〔云ひて〕輕視す。（一二九）

人の此の世に於て飮食を得るものは、彼假令邪法の徒なりとも、此等のために恭敬せらる。（一三〇）

右アヂナ長老

我師の〔法を〕說き給ふを聞きし時、一切智を具し、〔他に〕敗らるゝことなき人に對して、疑惑を懷かざりき。（一三一）

隊商を導く人、大雄氏、御者中の最勝なる人、道、行路〔等〕の上に於て我疑惑する所なし。（一三二）

右メーラヂナ長老

惡く葺きたる屋舍は雨の之を浸すが如く、修練せざる心は、貪欲之を侵す。（一三三）

善く葺きたる屋舍は雨の之を侵すことなきが如く、修練したる心は貪欲之を侵すことなし。（一三四）

右ラーダ長老

我が生は盡され、勝者の敎は成ぜられ、羅網と稱せらるゝものは壞られ、生有を引くものは、除かれたり。（一三五）

我、彼の利益のために、在家を出でて出家得度せしが、今此の利益、〔卽ち〕あらゆる纏結の滅盡に逹したり。（一三六）

右スラーダ長老

婦女に囚はるゝことなき牟尼は睡ること安樂なり、

常に、防護の要ある輩の間には、正理を得ること難し。(一三七)

欲、我等汝を戕賊せん、今や汝に負ふ所なし、今我等は行きて悔ゆることなき涅槃の地に行かん。(一三八)

右瞿曇長老

彼〔媒鳥〕先には己を害ひ、後には他を害ふ、鳥は媒鳥のために己を害ふこと甚し。(一三九)

婆羅門は外に色あるにあらず、婆羅門は内に色あり、(二)善生の主よ、罪惡業のあるもの、彼は實に愚者なり。(一四〇)

右ヴサバ長老

【一】猿を心又は意識に譬へたるなり。【二】善生Sujā は帝釋天の配なり、よりて帝釋天を善生の主と云ふ。

第二章

聞欲は聞を増長し、聞は智によりて増加す、智慧によりて義を知り、義を知れば安樂を齎す。(一四一)

邊土の坐臥を樂み、纏縛の離脱を行へ、若し此の處に歡樂を得ずんば、己を防護せる正念の人〔として〕、僧伽の中に住せよ。(一四二)

右マハーチュンダ長老

麤暴を行ふ輩は種々の暴力によりて人を惱まし、彼等亦同じく〔他に〕惱まさる、是れ業は滅ぶることなければなり。(一四三)

善にても惡にても、人若し業をなさば、彼は一々なしたる業の相續者となる。(一四四)

右ヂョーチダーサ長老

晝夜は過ぎ行き、生命は喪はる、生者の命の滅ぶることは恰も小河の水の如し。(一四五)

然るに罪惡業を造りて愚者は覺らず、後に至りて彼に辛苦あり、是れ其の果は惡なるが故なり。(一四六)

右ヘーランニャカーニ長老

大海の上に於て、少量の木材に乘りては沈むが如く、同じく懈怠〔の人〕に依る時は、〔己〕假令善生活の身なりとも沈む、されば彼の懈怠にして精進乏しきものを避けよ。 （一四七）

〔世間を〕遠かれる聖者、專心なる禪思者、常に精進發憤せる識者と共に住せよ。 （一四八）

右ソーマミッタ長老

人は人に縛せられ、人は人に依る、人は人に害はれ、人は人を害ふ。 （一四九）

人彼に取りて何の要かある、或は〔假令〕生み出せる人たりとも、多の人を害ひ行く人を擲けよ。 （一五〇）

右サッバミッタ長老

大にして烏の〔如き〕色せる(一)カーリー婦は股骨を折りて、又股骨を〔折り〕、腕骨を折りて、又腕骨を〔折り〕、髑髏を切りて酪器の如くし、〔己〕篤信にして坐す。 （一五一）

無智にして(二)有質を作るもの、〔此の〕愚者は再再苦に逢ふ、されば有情の有質を作ることなかれ、我は再び頭〔骨〕を切られて臥することなけん。 （一五二）

右マハーカーラ長老

髮を剃り僧伽梨衣を纏ひ、飲食、衣服、臥具を得るものは數多の敵を獲。 （一五三）

恭敬に此の患難あり、大怖畏あることを知りて、比丘は得ること少く、欲なく、正念にして遊行せよ。 （一五四）

右チッサ長老

(三)東竹林にある友なる諸釋子等は莫大なる富を捨て遺穗を鉢に受くるを樂とす。 （一五五）

精進を發し、專心にして常に堅固に勇猛なるものは世俗の樂を捨てて、法樂を樂む。 （一五六）

右金毘羅長老

我正しく思惟せざりしよりして、莊飾を事としき、輕浮にして動き易く、貪欲のために惱まされき。（一五七）

善巧方便の日の親、覺者に憑りて、正しく行修し、我心を生有より拔き去りき。（一五八）

右難陀長老

己定に住せざるに、他人は之を讃歎せば、他人の讃歎するは當らず、是れ〔彼〕自ら定に住せざるが故なり。（一五九）

己善定に住せるに他人は之を誹謗せば、他人の誹謗するは當らず、是れ〔彼〕自ら善定に住すればなり。（一六〇）

右シリマー長老

【一】カーリーは墓場に火葬の事を司れる婦人なり、彼女マハーカーラに兩腿兩腕及び髑髏を與へ、己も其の側に來りて坐したるなり。
【二】Upadhi, a substratum of being, cause for life, germs of renewed life 等の英譯を與ふ、漢譯にては現相、有餘、受身などの文字を宛てたるを見る、生有の義の意にて未來の生有を作るべき煩惱を指す。【三】Pācinavaṃsadāya。

第三章

我諸の蘊を識知し、我渴愛を根絶し、我覺分を修習し、我諸漏の滅盡に達せり。（一六一）

我諸の蘊を識り、欲を拔き、覺分を修習し、無漏にして涅槃に入らん。（一六二）

右鬱多羅長老

〔一〕彼王名をパナーダと呼び、其の宮殿は黃金を以て造り、橫に十六〔室〕の區劃あり、高は之に千倍なりといへり。（一六三）

千の階段あり、百の門戶あり、玻璃製の戶牖あり、此處に六千を七倍せる數の乾闥婆は舞ひき。（一六四）

右バッダヂ長老

正念あり智慧あり、力ある精進を發したる比丘、〔卽ち〕我は五百劫時を一夜の間に追憶しき。（一六五）

四念住、七〔覺分〕と、八〔支聖道〕とを修習しつつ、我は五百劫時を一夜の間に追憶しき。（一六六）

右ソービタ長老

堅き精進によりてなすべきこと、覺らんとする欲によりてなすべきこと、我は〔之を〕なして誤ることなけん、〔我が〕精進勇猛を見よ。（一六七）

汝又我に道、無滅〔涅槃〕に屬する道を語げよ、我（三）智によりて〔涅槃を〕知ること、恒伽河の大海に〔歸するが〕如くせん。（一六八）

右ヷッリャ長老

我が髮を理めんとて髮師は我が處に來り、其より我鏡を取りて身體を觀察しき。（一六九）

身は空虛なりと見え、暗黑界の闇は去れり、あらゆる被服は破られて、今や〔我に〕再生あらず。（一七〇）

右ヸータソーカ長老

安穩〔の地〕に達せんがために五の障蓋を捨て、己の知見たる法の鏡を取りて、此の身の內外、總て觀察しき、內にも外にも身は空虛なりと見えにき。（一七一、一七二）

右プンナマーサ長老

猶ほ生善く、優れたる馬の、倒れて起き、驚動する所多くして、〔而も〕元氣を喪はず、重荷を運ぶが如し。（一七三）

同じく見識を具へ、正徧覺者の弟子となれる我を生善き佛の自子なりと見よ。（一七四）

右難陀迦長老

來れ、難陀迦、師の側に赴かん、最勝佛の面前に於て獅子吼をなさん。（一七五）

牟尼は我等の慈愍の故に、我等を出家せしめたまひき、我等は此の利益に達し、あらゆる結縛を滅盡にせり。(一七六)

右バラタ長老

戰に勝てる智ある勇者は、魔王と其眷屬とに併せ克ちて、獅子吼すると、山窟中の獅子の如し。(一七七)

我師に奉事し、法と僧とを恭敬しぬ、我(三)又兒の煩惱を除けるを見て歡喜と滿足とを得たり。(一七八)

右婆羅墮闍長老

善良の士に事へ、常に法を聽けり、聞きて不滅の道を踏み行かん。(一七九)

正念にして生欲を捨てたる我には生欲は再びあらじ〔先に〕我に生欲あらざりき、〔未來にも〕なけん、今も我に之あらず。(一八〇)

右カンハヂンナ長老

【一】此の兩偈は此の王在俗時代のことを述べたるなり。【二】或は默によりて默に歸すること。【三】彼の兒カンハヂンナ Kanha-dinnaは彼に先きて出家し既に羅漢果に達し居たり。

第四章

我正偏覺者の敎に於て出家して以來、解脫を得て向上し、欲界を超越したり。(一八一)

〔佛〕淨梵士は〔我〕を監視したまひ、其より我が心は離脫しぬ、あらゆる結縛を斷じ盡せしが故に我が解脫は確實なり。(一八二)

右ミガ ラ長老

(一)無常なる小屋、處處に、造營せらるること再再なり、(二)屋舍の工人を求めて、我、轉た苦の生〔を經たり〕。(一八三)

(一)屋工、汝今看出さる、再び家を構ふることあらじ、總て汝の桷材は破られ、屋頂は又碎かる、心は〔其の〕

生起を遮られ、此の處に於てこそ消散せぬ。（一八四）

右シヷカ長老

此の世界の阿羅漢、善逝、牟尼は風のために惱まされてあり、若し溫水あらば、婆羅門、「之を」牟尼に供せよ。（一八五）

供養すべきものに供養せられ、尊重すべきものに尊重せられ、禮敬すべきものに禮敬せらるる彼「の牟尼の(三)風氣」を我は除き奉らんと欲す。（一八六）

右ウパヷーナ長老

我「陽に」法を持ちて「諸欲は無常なり」と說ける諸の信男子を見たり、彼等摩尼珠の環や、兒や、妻やに憧れつつ、强く欲望す。（一八七）

實に彼等は如實に法を知らず、「而も」また「諸欲は無常なり」と云へり、彼等には染著を破るべき力あらず、故に「彼等は」妻子と財寶とに賴れり。（一八八）

右イシヂンナ長老

雨降り、雷鳴り、我は獨恐しき凹地に住す、此の獨凹地の中に住せる我に怖畏なく、驚悸なく、「我が」身毛竪立するなし。（一八九）

我が獨、恐しき凹地に住して、怖畏なく、驚悸なく、「我が」身毛の竪立するなき、之我が性なり。（一九〇）

右サンブラカッチャーナ長老

何人か其の心端立して磐石に喩ふべく、震動するなく、染著すべきものの中にありて、染を離れ、怒るべきものに對して怒ることなきや、彼が心斯の如く修練せるが故に苦何處よりか來らん。（一九一）

我が心は端立して、磐石に比すべく、震動するなく、染著すべきものの中にありて、染を離れ、怒るべきものに對して怒ることなし、我が心斯の如く修練せるが故に苦何處よりも來るなし。（一九二）

右キタカ長老

(三)夜の、星宿の鬘[を以て飾らるる]は、眠るがために來らず、斯る夜は智ある人の、警覺するがためなり。 (一九三)

若し[我が戰に出でて]象背より墜ちたるに、象は獨り進み行くとせば、我は敗れて生んよりは戰場に死するぞ勝れる。 (一九四)

右ポーチリヤの兒なるソーナ

喜ぶべく、樂むべき五種の欲を捨て、信心によりて出家し、苦を盡すものとなれ。 (一九五)

我死を歡ばず、生を歡ばず、[唯]我知覺あり正念ありて時[の到る]を待つ。 (一九六)

右ニサバ長老

我菴羅の新芽に似たる衣服を肩にし、象の首に騎りて受食のために、村落に入れり。 (一九七)

其の時我象背より降りて動轉せり、其の時、憍慢なる我は善良となり、諸漏の滅盡に達しぬ。 (一九八)

右ウサバ長老

(四)カッバタクラは「之は[我が]襤褸衣なり」と[云ひ]、極めて重き衣服[を著けて]、甘露の雨を[灑ぎて]法を行へるのみ、禪を修せんがために道を行ふことなし。 (一九九)

汝カッバタ、坐睡することなかれ、汝の耳朶を打つことをなさじ、カッバタ、汝は僧伽衆の中に坐睡して、量を辨知するなし。 (二〇〇)

右カッバタクラ長老

【一】小屋、屋舍は吾人の身を指し、工人とは渇愛を指す。【二】Vātābādha 前偈にいへる風のために惱まさるる病、風邪、風氣或は傴麻質斯、痛風の類。【三】二偈中一偈は釋尊の唱へてソーナを誡めたまひしなり。【四】此の二偈は世尊の唱へてカッバタクラ比丘を誡めたまひしものなり。

第五章

(一)不思議なる哉、諸佛、不思議なる哉、諸法、不思議なる哉、我が師の成就したまひし所、〔佛の〕弟子は此處に於て斯の如き法を證せん。 (二〇一)

無數劫の間に於て、己身を獲得せしこと〔無數〕、其の中にて之は最後〔身〕なり、此の積集身〔此の〕生死輪廻は最後のものにして、今より更に生あることなけん。 (二〇二)

右クマーラ迦葉長老

年少なりとも心を佛の敎に專にし、睡れる者の中にありて、覺てありなば彼の生活や空ならず。 (二〇三)

されば智者は諸佛の敎を思ひ、心を信と戒と(二)靜穩と法見とに專にすべし。 (二〇四)

右護法長老

何人の諸根か寂靜に歸すること、御士に善く馴らされたる馬の如くなる、慢を棄て、漏結を盡したる、此の斯の如き人は諸天の羨む所なり。 (二〇五)

我が諸根は寂靜に歸すること、御士に善く馴らされたる馬の如くなり、慢を棄て、漏結を盡したる此の我は諸の天人にも羨まる。 (二〇六)

右ブラフマーリ長老

(三)膚あしく、心よろしきモーガラーヂャよ、汝常に安定に住す、比丘よ、雪降る寒季の夜は、汝如何にか起居せる。 (二〇七)

摩揭陀〔國〕は總て穀物に滿てりと我は聞けり、他處にて安樂に住する人〔の家〕よりも、我が藁にて葺きたる〔家〕ぞ可き。 (二〇八)

右モーガラーヂャ長老

〔自ら〕得得たるなく、他を輕んずること莫れ、彼岸

に達せる人を賤ます、困めず、羣集の中にありては虚浮ならず、言靜かに、行善く、己の讃言を口にすること莫れ。　(二〇九)

極細微妙なる義を見、巧慧にして、行卑遜に、善く佛に事ふるを習とするもの、斯の如き人には涅槃は得難からず。　(二一〇)

右バンチャーリの兒なる毘婆佉長老

よき冠あり、よき翼あり、よき靑き頸あり、よき嘴あり、よき音聲を有てる孔雀は叫ぶ、此の大地はよく草生ひ、且つよく水に浸され、空はよく雲に「覆はる」。　(二一一)

意よき人の健かなる身體と、禪思する人の、佛のよき敎に於てよく出家したるはよし、此の極淨白、微妙、難見、最上なる不滅の道を(四)獲よ。　(二一二)

右チューラカ長老

歡びつつ徘徊する心は杭木の立てる「處」、杭木と粗朶との存する處にのみ行く。　(二一三)

心、我は汝を邪惡と呼び、心、我は汝を非運と呼ぶ、汝の師の得たる所は得難し、我を非利に陷るることなかれ。　(二一四)

右アヌーパマ長老

闇昧なる凡夫は諸趣の閒に輾轉しつつ聖諦を見ずして長時輪廻したり。　(二一五)

我が精勤なりしや、輪廻は毀たれ、あらゆる生趣は除滅せられ、今や更に生れ出ることあらじ。　(二一六)

右ヴッヂタ長老

阿説他「樹の下」、靑「草」光あり、樹鬱茂せる所に於て、我正念にして、一の佛念想を得き。　(二一七)

今より三十一劫以前、我「一の」念想を得たりしが、此の念想を以て任せしよりして我が漏結の滅盡に達

せり。（二一八）

【一】Aho驚愕、驚異、苦悶、悲哀、讃歎其他の感情を言ひ表す間投詞的不轉語。【二】Pasādaリス・デビッ夫人は諸佛の吾人に寄せる祝福と譯せり。【三】此の長老の體に腫物の類出來たり。【四】接觸せよ。

三頌品第三

實なき清淨を索め、我林間にありて火神に奉事しぬ、清淨の道を知らずして、我天神のために苦行を行ひぬ。（二一九）

我安樂〔の道〕によりて此の安樂を得ぬ、見よ法の良き性を、〔我〕三明に通達し、佛の敎を成ぜり。（二二〇）

先には我（一）梵親にてありしが、今は（二）婆羅門なり、三明ある（三）洗浴者なり、（四）吠陀に通ぜる（五）聞者なり。（二二一）

右アンガニカバーラドヷーヂヤ長老

我出家してより五日、有學にして未だ阿羅漢果に達せず、精舍に入るや、心に誓願起りぬ。（二二二）

我愛の箭を拔かずしては、食はじ、飮まじ、精舍を出でじ、脇を〔著けて〕臥することをもなさじと。（二二三）

此の斯の如くして住せし我が精進勇猛を見よ、三明に通達し、佛の敎を成就したり。（二二四）

右バッチャヤ長老

人の、先に爲すべきことを後に至りて爲さんと望むもの、彼は安樂の地より落ち、後又悔ゆ。（二二五）

爲さんとすること、之を言ひ、爲さんとせざること、之を口にせざれ、爲さずして〔唯〕言ふものを識者は知る。（二二六）

實にも極安樂なるは正徧覺者の說き示し給ひし涅槃なり、憂なく貪なく安隱にして、此處には苦滅びて〔存せず〕。（二二七）

右バークラ長老

沙門の道に希望あるもの安樂に生活せんと願はば、僧伽に屬する衣服と飮食とを輕視することなかるべし。 (二八)

沙門の道に希望あるもの、安樂に生活せんと願はば、坐臥處を見ること、蛇若くは鼠の穴の如くすべし。 (二九)

沙門の道に希望あるもの、安樂に生活せんと願はば、一一を以て足れりとし、一の法を修習せよ。 (三〇)

右ダニヤ長老

極て寒く、極て暑く、極て遲しと〔云ひて〕、青年の業を放棄したるに、機會は過ぎ去れり。 (三一)

寒と暑とを見ること、草を〔見るにも〕及ばずして、丈夫の義務をなすもの、彼は安樂より遠ざかることなし。 (三二)

突婆草、功祚草、ホータキラ草、憂尸羅根、文邪草婆羅婆草〔等〕、我は心を遠離に專にして、〔我が〕胸より〔此等の草を〕遠けん。(六) (三三)

右マータンガ兒長老

巧説、多聞なる沙門の波吒梨子城に住せるもの、其等の一なり、此の門邊に立てる長壽者クッヂャソーピタは。 (三四)

巧説、多聞なる沙門の波吒梨子城に住せるもの、彼等の中の一人なり、此の風に支へられて門邊に住まれる長壽〔僧〕は。 (三五)

善く戰ひ、善く犧を供し、又戰に勝ち、淨行を行ひ、斯の如くして安樂增長す。 (三六)

右クッヂャソーピタ長老

此處に人間の中にありて、他の生類を害ふもの、此の人は此の世、又彼の世の兩處より墜つ。 (三七)

又慈愛の心を以てあらゆる生類を愍むもの、此の斯の如き人は多の善業を積む。（三三八）

善く語ることを習ひ、又沙門の奉事すること、竊に獨坐すること、又心を安靜にすることを〔習へ〕。（三三九）

右ヴーラナ長老

此處に信心なき諸の親族の中に、一人にても信心あり、知慧あり、法に立ち、戒を持てるもの〔あるは、これ〕親族の利益のためなり。（三四〇）

我慈愛よりして、親族等を制し、之を詰責したり、親族の愛心よりして、比丘衆の中に事を行へり。（三四一）

彼等は過ぎ去れり、逝けり、彼等は天界の安樂を獲たり、我が兄弟と母とは諸欲を享くるものとして樂めり。（三四二）

右バッシカ長老

四肢はカーラー樹の結節の如く、痩せて脈管現る、飮食に量を知る人は心貧しきことなし。（三四三）

深林、大林の中にありて、虻〔又は〕蚊に螫され、〔而も〕戰場に〔臨める〕象の如く、正念を失ふことなくして其に堪へん。（三四四）

單なる時は恰も梵王の如く然り、二人なれば天人の如く、三人なれば村の如く、之に過ぐれば〔猶ほ〕諍鬪の如し。（三四五）

右（七）ヤソーヂャ長老

先に汝の身にありし所の信心、今日汝に之あらず、汝にあるものは、汝の有なり、〔之〕我が惡行にあらず。（三四六）

信心は常なくして動搖すと、斯の如く我は之を見たり。〔人は〕好愛し、〔更に〕厭嫌す、牟尼、如何で之がために老い〔朽つ〕べきぞ。（三四七）

牟尼の食は少しづつ家毎に調理せらる、我受食のた

め少づつに遊行せん、我に〔尙ほ〕脚の力あり。（二四八）

右サーチマッチ長老

信心によりて世を棄てたる新得度の新參者は善友の淸淨に自活し、懈倦なきものに交れ。（二四九）

信心によりて世を棄てたる新得度の新參者、大衆の中に住める賢智の比丘は戒律を學ぶべし。（二五〇）

信心によりて世を棄てたる新得度の新參者は、作すべきこと、作すべからざることを熟知して、單遊行すべし。（二五一）

右優波利長老

我は識者たり、利益を思求すること、既に足れるものなりしが、世の迷惑たる、五種の欲は、我を倒しぬ。（二五二）

我魔〔王〕の領域に入り、堅く箭に刺されて、〔而も〕能く死王の網より脫るることを得たり。（二五三）

我あらゆる欲を捨て、あらゆる生有を破り、生〔死〕輪廻を斷じ盡し〔たれば〕、今や再び生るることあらじ。（二五四）

右ウッタラパーラ長老

聞け、總て此處に集り來れる諸親族、我汝等のために法を說かん、再再生を受くるは苦なり。（二五五）

〔精勤を〕發せ、出離せよ、心を佛の敎に傾けよ、魔軍を摧くこと、象の葦の家を〔摧く〕が如くせよ。（二五六）

此の敎に於て、精勤にして住するものは、生〔死〕輪廻を捨て、苦惱の際を盡さん。（二五七）

右アピブータ長老

我流轉して泥犂に赴き、再再また餓鬼世界に入れり、苦〔趣〕に畜生道に、我が住みしこと一再ならず、〔且つ〕久しかりき。（二五八）

また人〔界〕の生を喜び、稀に天界に入り、色界に、

無色界に、非無想處に非有想處に居れり。（三五九）

我「あらゆる」生成「の法」の精質なく、造作にして、動轉し、常に浮動することを了得せり、之を了得し我正念にして、自ら生ぜる寂靜を獲たり。（三六〇）

右瞿曇長老

人の先になすべきことを、後に至りてなさんと希ふもの、彼は安樂の地より落ち、又後に至りて悔ゆ。（三六一）

なさんとすることは之を言ひ、なさざることは、之を言はざれ、なさずして言ふものをば、識者は之を知る。（三六二）

正偏覺者の説かせ給ひし涅槃は實にも極安樂なり、憂なく、著を離れ、安穩にして、此處には苦惱滅して［存せず］。（三六三）

右ハーリタ長老

惡友を擯け、上上の人と交れ、動なき安樂を願ひ、彼の誡むる所に止まれ。（三六四）

大海の上に於て少量の木材に乘りては沈むが如く、同じく懈怠「の人」に依りては、「己」假令善生活の身なりとも沈む、されば彼の懈怠にして精進乏しき「人」を擯けよ。（三六五）

「世間を」遠かれる聖者、專心にして禪思し、常に精進發憤せる識者と共に住せよ。（三六六）

右弃マラ長老

【一】Brahmabandhu 唯生によりて婆羅門たるものの意にて、婆羅門に對する輕蔑の語なり。【二】Brahmana.【三】nhātaka.【四】Vedagu.【五】Sotthiya.【六】二七偈註參照。【七】Vasoja 名稱生。

四頌品第四

「身を」裝飾し、美衣を纏ひ、旃檀木「を以て」彩りた

る舞女は、大道の〔羣衆の〕中に、五樂に合して舞ひ
き。（二六七）
我乞食のために入城し、往きて此の〔婦の〕身を裝飾
し、美衣を著け、宛然死綱に繫れるが如くなるを見
ぬ。（二六八）
それより、我に正思惟起り、患難現れ、厭嫌の情生
じぬ。（二六九）
其より我が心は解脫しぬ、法の善き質を見よ、我三
明に通達し、佛の敎を成ぜり。（二七〇）
　右ナーガサマーラ長老
我隨眠のために屈せられ、精舍を出で、經行處に上
り、其處に地上に倒れぬ。（二七一）
肢體を摩でつゝ、再び經行處に上り、內心安定に住
して、我は經行處に經行しぬ。（二七二）
それより、我に正思惟起り、患難現れ、厭嫌の情生
じぬ。（二七三）
其より我が心は解脫しぬ、見よ法の善き質を、我三
明に通じ、佛の敎を成就したり。（二七四）
　右バグ長老
（一）「我等は此處に滅ぶるものなり」と、愚者は之を覺
らず、人若し之を覺れば、其よりして爭息む。（二七五）
人無智なる時は、〔則ち〕滅せざるものゝ如く振舞ふ、
法を知るものは病者の閒にある無病者〔の如し〕。
（二七六）
放逸なる行爲、汚れたる禁戒、猶豫して行ひたる梵
行、之は〔共に〕大果報を齎すものにあらず。（二七七）
同じく梵行〔を修する〕者の中に尊敬を得ることなく
ば、彼正法より遠かること、空と地との如し。（二七八）
　右サビヤ長老
滿ちて、惡臭あり、魔〔王〕の所屬にして、欲に充ち

たる〔此の身は〕災なる哉、汝の身には九箇の孔あり、常時此より流出す。（二七九）

古人を輕ずることなかれ、如來を惑すことなかれ、天上に於ても彼等は染著することなし、如何に況や人間に於てをや。（二八〇）

人の愚にして、邪智あり、邪意ありて、愚癡に覆はるゝもの、斯の如き人は此處に魔王の投ぜる結縛に染著せん。（二八一）

貪欲と、瞋恚と、無明とを遠ざけたるもの、斯の如く絲を斷ち、縛を解けるものは、此處に染著することなし。（二八二）

右サンダカ長老

五十有五年の間、我〔身に〕塵泥を塗り、月一回の食を喫し、鬚髮を拔きたりき。（二八三）

一脚にて立ち、臥牀を用ひず、若くは乾きたる糞を喰ひ、または〔己に〕充てられたる〔施食〕を受けざりき。（二八四）

我惡趣に導くべき斯る多く〔の業〕を造り、大水に漂はれて、佛に歸依し奉りき。（二八五）

〔我が〕歸依を見よ、法の善を質を見よ、〔我〕三明に通達し、佛の教を成就したり。（二八六）

右チャンブカ長老

我が(三)頗勒窶那の月に、伽耶城に來り、正徧覺者の最上の教を、說きたまへるを見たるは、實に宜しかりき。（二八七）

〔佛は〕大光明ある羣集の師、最上位に到れる導者、人天兩界の勝者、見比倫なき〔人なり〕。（二八八）

大龍象、大雄士、大光輝ありて漏結なく、あらゆる漏結を盡し、何處にも怖畏を有たざる師なり。（二八九）

永く〔塵垢に〕汚され、〔邪〕見の羂に縛せられたる我

セーナカを、彼の世尊はあらゆる纏結より脱れしめたまひぬ。（二九〇）

右セーナカ長老

徐徐たるべき時に當りて急ぎ、急ぐべきに當りて徐徐たる、［此の］愚者は［其の］處理正しからざるによりて苦惱を受く。（二九一）

此の人の利益の減損すること、恰も黑分の月の如く、彼は恥辱を蒙り、又朋友のために惱まさる。（二九二）

徐徐たるべき時に當りて徐徐たり、急ぐべきに當りて急ぐもの、斯る識者は、［其の］處理正しきによりて安樂を獲。（二九三）

此の人の利益の增長すること、恰も白分の月の如く、彼、名聲、稱譽を獲、朋友のために惱さるゝことなし。（二九四）

右サンプータ長老

「羅睺羅跋陀は雙［榮］を具有す」と、智者は我を［稱す］、我は佛の兒にして、又諸法の上に眼を具ふるものなり。（二九五）

我が漏は斷じ盡され、今はまた更生なく、奉施の價ある阿羅漢にして、三明を具し、無滅［涅槃］を見たるものなり。（二九六）

諸欲に盲せる徒輩は、［邪］網に覆はれ、愛の覆蓋に覆はれ、放逸の縛に縛られ、恰も筌の中の魚の如くなり。（二九七）

我は此の欲を捨て、魔の縛を解き、愛を根本より拔きて、我は清涼寂靜となれり。（二九八）

右羅睺羅長老

黃金を以て［身を］覆ひ、侍婢の羣に圍まれ、脇に兒を抱きて、妻は我に近き來りぬ。（二九九）

此の近き來れる我が兒の母の、身を飾り、美服を著

け、死網に繋れるが如くなるを見。(三〇〇)

其より我に正しき思惟起り、患難現れ、厭嫌の情生じぬ。(三〇一)

其より我が心解脱を得ぬ、見よ、法の善き質を、我三明を逮得し、佛の教を成就したり。(三〇二)

右チャンダナ長老

法は定て法行者を護り、善く修したる法は安樂を與ふ、之善く法を修行したる功徳なり、法行者は惡趣に陷ることなし。(三〇三)

法と非法と、雙者には同一の果報あらず、非法は〔人を〕泥犁に導き、法は善道に至らしむ。(三〇四)

されば諸の法に對して喜悦の心を起せ、と斯の如く善く來れることを喜び、法に住立せる尊善逝の弟子の賢にして、最尊最上の歸依をなせるものは〔斯の如く〕指導せらる。(三〇五)

惡瘡の根を斷ち、愛の網を破れり、彼輪廻を盡し〔たれば〕、一物として礙へざること、猶は十五日滿月の夜の月の如し。(三〇六)

右ダムミカ長老

淸白〔の翼〕に包まるゝ鶴の黑き雲に畏れ怖ぢて、避難の處を索め、避難の處に逃れんとす、其の時アヂャカラニー河は我をして娯ましむ。(三〇七)

淸淨純白の鶴の黑き雲に畏れ怖ぢて、所止處を索めて、之を見出さず、此の時アヂャカラニー河は我をして娯ましむ。(三〇八)

此處に此の兩〔岸〕なる閻浮樹は何人をか娯ましめざらん、〔樹は〕大巖窟の背後なる河岸を美うす。(三〇九)

(三)蛇群より脱れたる此等の蛙は徐に鳴いて云ふ「今日は山の小川より移り住むべき時にあらず、アヂャカラー河は安穩、安全にして甚だ樂むべきなり」と。

（三一〇）

右サッバカ長老

我生活の要ありて出家し、具足戒を受け、其より信心を獲、強く精勤し、勇進しぬ。（三一一）

欲を壞れよ、此の身より肉片を除去せよ、兩膝の關節よりして、我が脚は落ちよ。（三一二）

我愛の箭を拔かずしては、食はじ、飲まじ、精舍を出でじ、脇を〔著けて〕臥することもなさじと。（三一三）

此の斯の如くして住せし我が精進勇猛を見よ、我三明に逮達し、佛の敎を成就せり。（三一四）

右ムヂタ長老

【一】法句經六偈註參照。【二】Phaggu 月名、陽曆二月三月に亙れり、或は之は尼連禪河の一名なりとも云ひ、或は伽耶城の別稱なりとも云ふ、毎歲陽曆二三月の交、伽耶の民は尼連禪河に於て祭を行ふ、或年佛此の處に現れ、法を說きたまひける時、セーナカは之を聞いて阿羅漢果を證しぬ。【三】amatamadasaṅghasuppahina. amata は阿伽陀藥果、mada は樂むの意、阿伽陀果を樂むは蛇なれば、此の合成語は蛇群より免れたるの意なり。

五頌品第五

比丘あり、墓田に赴きて、婦女の〔死體の〕冢間に捨てられ、蟲類のために噉はれ、壞れたるを見き。（三一五）

邪なる死屍を見ては、厭嫌の情起るものあるに、〔我には〕、染欲起り、愚夫の如く遺精ありき。（三一六）

飯の熟するよりも早く、我は其の處より去り、正念にして知覺を喪ふことなく一方に入れり。（三一七）

それより我に正しき思惟起り、患難現れ、厭嫌の情生じぬ。（三一八）

其より我が心は解脫しぬ、法の善き質を見よ、（我）三明に逮達し、佛の敎を成就せり。（三一九）

右ラーヂャダッタ長老

不適所に身を措くものは、假令業を求めて徘徊すと

も、得ること無からん、之我が悲運の相なり。(三二〇)
若し〔人〕煩惱を拔き、克ち得たる所、一を棄てなば骰子〔を投ずる〕が如くなるべく、總て棄てなば、〔道〕の凹凸を見ざる盲者の如くならん。(三二一)
爲さんとすることは之を言ひ、爲さんとせざることは、之を言はざれ、爲すことなくして唯言ふものは、識者は之を了知す。(三二二)
愛しく、色好き華の、香なきが如く、善く說かれたる語も、之を行はざるものには效なし。(三二三)
愛しく、色好き華の、加之、香あるが如く、善く說かれたる語は、之を行ふものには效あり。(三二四)

右スブータ長老

雨降りて、〔其の音〕恰も律に調へり、我が屋舍は葺かれ、風を防ぎて樂しく、我寂靜にして、其の處に住す、されば天若し雨を〔降さんと〕欲せば、〔之を〕降せ。(三二五)
……我心亦止息に歸して其處に住す……。(三二六)
……我貪欲を捨離して其の處に住す……。(三二七)
……我瞋恚を捨離して其の處に住す……。(三二八)
……我愚癡を捨離して其の處に住す……。(三二九)

右ギリマーナンダ長老

諸法の中にて、師は其の望みし所、而して〔我が〕樂ひし所の無滅〔の法〕を示し、我は自ら作すべきことを作し竟んぬ。(三三〇)
斯く斯くなりとて說き傳へられざる法は自ら逮得し證知せられたり、我淨智あり、疑惑を解けるもの、汝の側にありて(一)告白をなさん。(三三一)
我宿住を知り、天眼を淨うしぬ、我己利を逮得し、佛の敎を成就しぬ。(三三二)
我精勤にして、汝の敎に於て能く(二)學を聞けり、

總て我が漏結は滅され、今や「我に」更有なし。(三三三)

汝尊き「道」を以て我を訓へ、我を愍み、攝取したり、汝の教示虛しからず、我教を受けて弟子となれり。(三三四)

右スマナ長老

實にも我が母の刺針を用ひしは善し、我は彼の女の言を聽き、母のために敎へられて、精進を起し、專心にして、最上菩提を成じぬ。(三三五)

我は應供の德ある阿羅漢にして、三明あり、不滅「の道」を見たり、(二)ナムチの軍に克ち、無漏にして住せん。(三三六)

内に又外に、曾て我に存せし所の漏結は、總て斷じ盡されて餘りなく、復再び起ることなけん。(三三七)

大姉は(三)賢くも此の義を唱へて曰へり「「見よ」、汝我に(四)愛著する所なからん」と。(三三八)

苦惱は斷じ盡されたり、之は我が最後の積集「身」なり、「最後の」生死輪廻なり、今や我に更有なし。(三三九)

右ワッタ長老

佛は實に我が利益のために、尼連禪河に來らせたまひ、我は其の法を聞きて、邪見を捨てにき。(三四〇)

我種種の犧牲を供し火神を供養しぬ、盲目なる凡愚の我は之を清淨なりと思ひて。(三四一)

邪見の密林に迷ひ入り、「戒行」(五)取のために惑はされ、盲目にして無智なる「我」は不淨を清淨なりと思ひぬ。(三四二)

我邪見を捨て、あらゆる生有を壞れり、我(六)應供の德ある火神を供養し、如來を禮拜せん。(三四三)

我あらゆる愚癡を捨て、生有の愛を壞れり、生「死」輪廻は盡され、今や我に更有なし。(三四四)

右那提迦葉

早朝午時晡時と、日日三たび、我は伽耶なる(七)伽耶頗勒窶の水流に入りぬ。(三四五)

曾て他の生に於て我が犯せし惡邪業を此の水に流さしめんと、先には我に斯の如き見ありき。(三四六)

巧に說き明されたる語、法と義とを具ふる道を聞きて、如實に正しく我は義を觀察しき。(三四七)

我あらゆる邪惡を洗除し、無垢、清淨、潔白となれり、清淨なるものは清淨なるものの嗣續者たり、佛の生子たり。(三四八)

(八)八の支分ある流にあらゆる邪惡を流し、三明を獲、佛の敎を成就したり。(三四九)

右伽耶迦葉長老

(九)汝(一〇)風疾のために(一一)止むことを得ずして森林中に住む、麤粗なる行乞地を與へられて、比丘、汝は如何にか棲めるぞ。(三五〇)

廣大なる喜樂を以つて我が身を貫徹し、麤惡なるものをも受用して林中に住せん。(三五一)

〔四〕念住、〔五〕根、〔五力〕と、〔七〕覺分とを修習しつつ、我は林中に住せん。(三五二)

精進を發し、專心にして、常に堅固に勇猛に、而して一致和合せる〔輩〕を見て、我は林中に住せん。(三五三)

調順せること最第一にして、安定に住したまへる、等覺者を追憶し、晝夜懈倦なくして、我、林中に住せん。(三五四)

右ヴッカリ長老

心、我汝を防止すること、象を小門に〔防止する〕が如くせん、汝欲網、身より生ぜるもの、我は汝を邪事に就かしむることなからん。(三五五)

汝は防止せられて進むことなからん、猶ほ象の門を開くを得ざるが如くに、災なる心よ、汝數數暴力を

用ひ、惡事を快しとすることならん。（三五六）
猶ほ新に捕へて未だ調へざる象は、假令、自ら厭へりとも、鉤を手にせる力人は、能く〔之を〕轉ずるが如く、同じく我汝を轉ぜん。（三五七）
猶は駿馬を御するに巧なる、勝れる御者の生善き〔馬〕を調ふるが如く、同じく我五力の上に立ちて汝を調御せん。（三五八）
我正念を以て汝を縛せん、自ら淸うして汝を調御せん、汝は精進の重荷に制せられて、此より遠く行くことなからん。（三五九）
右ヸヂタセーナ長老

怒る心ありて、智鈍きものは勝者の敎を聽く〔とも〕、正法より遠かること、猶ほ空と地との如し。（三六〇）
怒る心ありて、智鈍きものは勝者の敎を聽く〔とも〕、正法より卻退すること、恰も黑分の月の如し。（三六一）
怒る心ありて、智鈍き者は、勝者の敎を聽く〔とも〕、彼、正法に於いて枯渇すること、猶ほ少水中の魚の如し、（三六二）
怒る心ありて、智鈍きものは勝者の敎を聽く〔とも〕、正法に於て增進せざること、猶ほ田中の腐りたる種子の如し。（三六三）
知足の心を以て勝者の敎を聽く人は、あらゆる漏結を捨て、不動〔の法〕を證知し、至上の寂靜に達し、無漏にして涅槃に入らん。（三六四）
右ヤサダッタ長老

我具足戒を受け、解脫を得て無漏となれり、我はまた彼の世尊を見たてまつり、また精舍の中に共に倶に住しぬ。（三六五）
世尊は夜中久しく、屋外に過しまたひ、精舍〔の事〕に巧なる師は其より精舍に入りたまひぬ。（三六六）

瞿曇〔尊〕は僧伽梨衣を擴げて臥牀を設け、石窟中の獅子の如く、怖畏を捨てて〔臥したまひぬ〕。（三六七）

其より善く言語する、正等覺者の弟子須那は佛尊の面前に於て正法を說きぬ。（三六八）

普く五蘊を識り、道を修め無漏にして至上の寂靜に達せん。（三六九）

右須那クチカンナ長老

賢にして師の言を知り、（二）此處に住し、〔此處に〕愛念を起すもの、彼は（三）實に歸依の心篤き人たり、また識者たり、また（四）諸法に特異の智ある人たらん。（三七〇）

〔假令〕大なる災難起ると雖も、此の省慮ある〔人〕を挫くこと能はじ、彼は實に强力の人たり、また識者たり、また諸法の上に特異の智ある人たらん。（三七一）

大海の如く住止し、欲を無みし、深き智慧あり、微妙の義を見るもの、彼は實に動かすべからざるものたり、また識者たり、また諸法の上に特異の智ある人たらん。（三七二）

多聞にして法を護持するものたり、法の隨法行者たり、此の斯の如き人は識者たり、また諸法の上に特異の智ある人たらん。（三七三）

所說の義を知り、義を知りて、其の如くに行ふもの、彼は實に內に義を〔有するもの〕たり、また識者たり、また諸法の上に特異の智ある人たらん。（三七四）

右コーシャ長老

【一】此の五偈は長老が其の舊師の許に赴きて其の所解を告白するなり。【二】Namuci不脫、邪惡の法を脫せざるものの意にて魔王の別稱なり。【三】Visārada大膽なる、畏るる所なき、賢き。【四】Vanatha森林の下生、灌木、園、貪欲、愛欲。【五】Parāmasa は sīlabbata＝sīla＋vata の後に附せられ、通常戒禁取と譯せらる、牛戒犬戒等の如き戒と牛行犬行等の如き行とにして、此等を清淨解脫の道なりと執せし外道ありしなり。【六】如來を指す。【七】

此處にては Gayaphaggu（ガヤパツグ）卽ち伽耶頗勒窶を尼連禪河の一名と見たり、上二八七偈註參照。【八】八聖道をいふ。【九】以下五偈は佛と此の長老との問答にして 初の一偈は釋尊他は長老の述べたる所なり。【10】上一八六偈の註參照。【11】Abhiññā（アビニーダ）をリス・デビツ夫人は foredoom と譯す、原語の意は近く齎されたるなり。【12】師の言の上に。【13】Bhattimā（バツチマ）分別家の意もあり。【14】直譯「知りて諸法の上に特異者たらん」。

六頌品第六

世に聞えたる瞿曇の神變を見て、［而も］嫉妬と憍慢とに瞞かれ、我初は卑下せざりき。（三七五）

我が思惟する所を知りて、人間の御者は［我を］難詰したまひ、其よりして我に苦惱生じ、身毛不思議に竪起したりき。（三七六）

先に結鬘外道として、我が［得し］(一)神通は些細なりき。其の時我は之を空無なりとして勝者の教に出家しぬ。（三七七）

先には供犠を以て足れりとなし、欲界を大事なりとせしが、後には貪も、瞋も、また癡をも、之を捨てにき。（三七八）

宿住を知り、天眼を淸うせり、神通ありて他人の心を知り、天耳をも達得しぬ。（三七九）

我が之を得んが爲に在家を出でて得度したりし、其の利は我によりて達せられ、［我は］あらゆる結縛を盡せるものたり。（三八〇）

右ウルヴェーラ迦葉長老

(二)ヸーヒ稻は收納せられ、(三)サーリ稻は連枷にて打たれぬ、我は食物を得じ、(三)我は如何になすべきぞや。（三八一）

不可思量の佛を追念せよ、和悅にして身喜に觸れ、常に歡喜踊躍せん。（三八二）

不可思量の法を追念せよ、和悅にして身喜に觸れ、

常に歡喜踊躍せん。（三八三）

不可思量の僧を追念せよ、和悅にして身喜に觸れ、常に歡喜踊躍せん。（三八四）

汝屋外に住す、此の頃の夜は寒く雪氣あり、寒のために害はれ、惱まさるること莫れ、門にて鎖せる精舍の中に入れ。（三八五）

我四無量「心」に觸れ、之によりて安樂に住せん、我動轉なくして住する「が故に」、寒のために惱まさることなけん。（三八六）

右テーキッチャカーニ長老

ともに梵行を修する人人の中に、恭敬を受けざるものは、正法より郤退すること、猶ほ少水中の魚の如し。（三八七）

共に梵行を修する人人の中にありて恭敬を受けざるものは、正法に於て增進せざること、猶ほ田中の腐りたる種の如し。（三八八）

共に梵行を修する人人の中にて恭敬を受けざるものは、法王の敎に於て、涅槃より遠ざかれり。（三八九）

共に梵行を修する人人の中にて、恭敬を受くべきものは、正法より郤退せざること、猶ほ大水中の魚の如し。（三九〇）

共に梵行を修する人人の中に、恭敬を受くるもの、彼、正法に於て增進すること、猶ほ田中の良き種の如し。（三九一）

共に梵行を修する人人の中にて恭敬を受くるもの、「彼は」法王の敎に於て涅槃の傍にあり。（三九二）

右マハーナーガ長老

クッラは墓田に赴きて、婦女の「死體」の冢間に捨てられ、蟲類のために啄はれ、壞れたるを見き。（三九三）

クッラよ、病に侵され、不淨にして、不潔なる身を

見よ、滲下し、滴下して、〔而も〕愚人の歡とする所なり。《三九四》

智見を得んがために法鏡を取りて、我は此の空なる身を内外共に觀察しき。《三九五》

之の如く、其もあらん、其の如く、之もあらん、下の如く上も之あらん、上の如く下も之あらん。《三九六》

日中の如く、夜間も然り、夜間の如く、日中も然り、先の如く後も之あらん、後の如く先も之ありき。《三九七》

〔四〕五種の樂器を以てしては、心を一境にし、正しく法を見る人の〔得る〕が如き、斯の如き喜樂あることなし。《三九八》

右クッラ長老

放逸行の人には、渇愛の増長すること、恰も蔓草の如し、彼生より生に轉輾すること、林中に果實を求むる猿の如し。《三九九》

賤くして、〔五〕毒ある此の愛欲、若し人に勝たば、彼の憂苦の増長すること、猶ほ繁茂せる〔六〕毘羅那草の如し。《四〇〇》

人若し賤くして世に制し難き此の愛欲に勝たば、憂苦の彼を去ること、猶ほ荷葉より水滴〔の落つる〕が如くなり。《四〇一》

汝等此處に集り來れるものに告ぐ「總て汝等に祥福あれ、愛欲の根を堀ること、優尸羅を求むるもの、毘羅那を〔堀る〕が如くし、汝等、葦草の流に〔折らる〕が如く、數數魔のために破らるゝこと莫れ、《四〇二》

佛の言教を行へ、寸時も空過せしむること莫れ、寸時を空過せしむるものは地獄に墮ちて、憂ふべきが故なり。《四〇三》

放逸は塵垢なり、放逸に隨ふは塵垢なり、不放逸と明智とによりて、己の箭を拔け。」《四〇四》

右マールンキャ兒長老

我出家してより二十五年、一彈指の頃も心の寂靜を得ざりき。（四〇五）

心一境なることを得ず、貪欲のために窘められて、（七）腕を扼し、泣きつゝ精舍より出で行きぬ。（四〇六）

「我刀を持ち來らんか、我生きて何の要かある、我が如きものは、戒を拋棄して、如何が死に就くべき」と。（四〇七）

我其の時剃刀を取りて、座牀に就き、己の脈管を斷たんが爲に剃刀を拔きぬ。（四〇八）

其より我に正しき思惟起り、患難現れ、厭嫌の情生じぬ。（四〇九）

其より我が心は解脫しぬ、法の良き質を見よ、我三明に速達し、佛の敎を成就せり。（四一〇）

右サッバダーサ長老

カーチャーナ、起て、坐せよ、醒めよ、多く睡ることなかれ、汝怠惰にして、放逸者の親族、死王のために、惡計を以て勝たるゝことなかれ。（四一一）

譬へば大海の震動の如く、同じく生老は汝を伏す、汝、己の良き（八）洲を作れ、これ汝には他の依處なければなり。（四一二）

師は道を設けたまひ、此〔の道〕は著と生死の怖畏とを超越せり、初夜にも後夜にも精勤して、專心に堅く努力せよ。（四一三）

先にありし縛を解け、僧伽梨衣〔を著け〕、剃刀〔にて頭を〕剃り、乞食物を食へ、遊戯の樂と、睡眠とに耽らず、禪定に入れ、カーチャーナよ。（四一四）

カーチャーナ、禪思せよ、勝を得よ、安隱の道に熟通せよ、無上の清淨に達し、涅槃に入ること、火の水に〔消さるゝ〕が如くならん。（四一五）

光少き燈火は、恰も風のために撓めらるゝ蔓樹の如し、斯の如く汝インダサ姓〔のカーチャーナ〕、取執することなくして、魔を撼がせ、汝諸受の上に貪欲を離れ、此の世に於て清涼〔の身〕となり、死の到るを待て。（四一六）

右カーチャーナ長老

具眼の佛、日種姓は、あらゆる結縛を超え、あらゆる轉生を滅する〔法門を〕巧に說き示したまへり。（四一七）

〔涅槃に〕導き、〔彼岸に〕渡し、愛欲の根本を枯らす、〔此の法門は〕毒の根と屠舍とを壞ちて、涅槃を成ぜしめたり。（四一八）

無智の根本を破るに、業の機械を除き、諸想を執持するに智慧の金剛を投ずるなり。（四一九）

受を知悉せしめ、取を離脫せしめ、智慧を以て生有を觀ること、火坑を〔觀る〕が如し。（四二〇）

大味あり、深遠にして、老死を遮止する、尊き八支道は、安泰にして苦惱を息止す。（四二一）

業を業と知り、果を果と〔知り〕、緣生の法を如實に觀照し、大安隱地に行く、善良〔の人〕は、其の終や可なり。（四二二）

右ミガヂャーラ長老

我生の誇と財と權威とに迷はされ、身の色と形とに誇り狂ひて、徘徊しぬ。（四二三）

一人として己に等しきもの、優れるものありと思はず、過慢心のために傷けられ、愚に頑迷に傲慢なりき。（四二四）

母も父も他の恭敬すべきを認められしものをも、我は憍慢頑迷にして、恭敬の念なく一として禮敬せざりき。（四二五）

第一の導師、調御者中の最優者の光り耀く太陽の如

く、比丘衆に圍繞せられたまふを見。（四二六）

慢と迷とを捨て、清和の心を以て、あらゆる生類中の最上者を頭を以て禮拜しぬ。（四二七）

過慢と卑慢とを捨て、よく之を除けり、「我有」の念は斷たれ、あらゆる類の慢は盡されたり。（四二八）

右補臣の兒チェンタ長老

我齡七歲にして新に出家せし時、神變力を以て、大神通ある龍王を降伏し、（四二九）

阿耨達の大池より、師に水を運び來りき。其より世尊は我を見て宣へり、（四三〇）

「舍利弗、近づき來れる此の兒を見よ、水瓶を攜へ、內心能く定に住す。（四三一）

愛すべき行爲によりて威儀良く、阿㝹樓陀の沙彌は神變力によりて恐怖心を離る。」（四三二）

〔彼〕訓良き人によりて訓良きものとせられ、巧なる

人によりて巧なるものとせられ、義務を終へたる阿㝹樓陀によりて導き敎へられたり。（四三三）

彼最上の寂靜に達し、不轉動〔の法〕を證得し、彼沙彌スマナは「我を賤むこと莫れ」と願へり。（四三四）

右スマナ長老

汝風疾のために止むことを得ずして森林中に棲む、粗にして顧みられざる行乞地に於て、汝は如何にか生活せるぞや。（四三五）

廣大なる喜樂を以て我が身を貫き、粗なる〔食物〕をも之を受用して林中に住せん。（四三六）

七覺支、〔五〕根、〔五〕力を增修し、禪定の樂を具有し、漏結なくして住せん。（四三七）

煩惱を離脫し、心淸淨にして、汙濁なき人を常に觀察し、漏結なくして住せん。（四三八）

內に外に、我にありし所の漏結は、總て斷じ盡され

て餘りなく、復再起ることなからん。（四三九）

五蘊は周く知られ、根本を斷たれて存す、苦惱の滅盡に達し、今や我に後有なし。（四四〇）

右ヌハータカムニ長老

忿なく、調順にして、平等に生活し、能く知りて解脱し、寂靜なる、斯の如き人に何處よりか忿怒〔來らん〕。（四四一）

忿れるものに對して忿るもの、彼は之によりて愈惡し、忿れるものに對して忿らざるものは勝つこと難き爭に勝つ。（四四二）

〔彼は〕自と他との兩者の利を行ふ、他の忿れることを知りて、正念の人は寂に歸す。（四四三）

自と他との兩者の醫者なる彼を、法に通ぜざる輩は、愚蒙なりと思へり。（四四四）

若し〔汝に〕忿起らば鋸の譬喩を思ひ、若し味欲起らば兒の身肉の譬喩を追念せよ。（四四五）

汝が心若し諸欲と生有との間に奔馳せば、正念を以て疾く之を制すること生長せる穀を食ふ惡畜の如くせよ。（四四六）

右ブラフマダッタ長老

掩へるものには強く雨降り、顯なるものには強く降ることなし、されば掩へるを顯せ、斯の如くせば之に雨降ることなからん。（四四七）

世間は死のために礙へられ、老のために圍まれ、愛欲の箭に刺され、常に慳貪に燻べらる。（四四八）

世間は死のために礙へられ、また老のために取卷かる、常に依所なくして害を蒙ること、刄と杖とを取れる盜人〔に逢ふ〕が如し。（四四九）

死、病老の三は火聚の如く迫り來る、〔之に〕抗はんには力なく、〔之を〕避けんには敏速ならず。（四五〇）

一日〔の光陰〕は、少くとも多くとも、之を空しうすることなかれ、一夜を捨つれば之はこれ汝の生命を減ずるなり。（四五一）

遊行、住立、著座、偃臥、最後の一夜は迫り來る、汝放逸なるべき時にあらず。（四五二）

右シリマンダ長老

此の兩足〔の身〕は〔人に〕愛せらるれど、不淨、惡臭にして、種種の汙穢、其の中に滿ち、又處處より滲み出づ。（四五三）

隱れたる鹿は蹄のために、魚は鉤のために、猿は黐のために〔惱まさるる〕が如く、凡夫は惱まさる。（四五四）

愛すべき色聲香味と所觸と、此等の五種の欲は婦女の身にあるを見るべし。（四五五）

愛樂の心を以て此等〔の婦女〕に交はる凡夫は恐しき（九）墓田を擴げ、再生を積むものなり。（四五六）

此等〔の婦女〕を避くること、足、蛇頭を〔避くる〕が如くするもの、彼は正念にして、世に此の毒者を伏す。（四五七）

諸欲に患難〔あること〕を見、出離を安隱なりと見て、あらゆる欲より離れ、我は漏結の滅盡に達せり。（四五八）

右サッバカーマ長老

【一】信者より受くる利得、尊敬等をいふ、佛又は佛弟子等の行ひし神通神變にあらず。【二】Vīhi梵語にてはvrīhiなり、我日本語の粳の原語にあらずやと云ふものあり、sāli も同じく稲の一種なり。【三】以下魔王の化身と長老との問答なり、一偈は魔王、次三偈は長老、第五は魔王、第六偈は長老の唱へし所なり。【四】五種の樂器とは（一）ātata 一面に革を張りたる鼓（二）ātatavitata 全面總て革を張りたる鼓（三）vitata 兩面に革を張りたる鼓、又は絃樂器（四）ghana 銚鈸、銅鑼、鈴、扁鼓等の如く叩きて鳴す樂器（五）susira 管樂器。【五】法句經三三五偈註參照。【六】同上。【七】或は腕を差し延しての意。【八】燈、依所等の意もあり。【九】再三生れ出るが故に。

七頌品第七

美衣を纏ひ、華鬘を著けて、莊校嚴飾し、足に蟲脂を塗り、履を穿ちたる遊女。（四五九）

履を脱ぎ、「我が」面前に合掌し、柔和「なる聲」にて、彼の女は未だ曾て禮敬せしことなき我に告げて曰へり、（四六〇）

「汝齡尚ほ若くして「而も」出家せり、我が（一）道によれ、人界の欲を享けよ、我汝に財を贈らん、我は眞實を語れるなり、「信ぜずんば」、我汝に（二）火を持ち來らん。（四六一）

汝と我と老い朽ちて杖に憑る時、兩人共に出家せん、「斯くせば」兩處に固著あらん。」（四六二）

美衣を纏ひ、「身を」莊嚴し、魔王の羂索を張れるが如き彼の遊女の、合掌して「我に」求むるを見て。（四六三）

其よりして我に正しき思惟起り、患難現れ、厭嫌の情生じぬ。（四六四）

其よりして我が心解脱しぬ、法の宜き安排を見よ、「我」三明に通じ、佛の敎を成ぜり。（四六五）

右スンダラサムッダ長老

アムバータカ遊園の彼方なる森林中に於て跋提耶は愛欲を其の根と共に拔き、其處に多幸にして禪思せり。（四六六）

或は杖鼓を以て、箜篌を以て、未だ小鼓を以て樂むものあり、我はまた樹下に於て佛の敎を樂めり。（四六七）

佛、我に惠を與へ給へ、我此の惠を得なば、我はあらゆる世間「の人」に對して恒に（三）身念を持たん。（四六八）

形色を以て我を量り、音聲を以て我を追ふもの、此の欲貪々欲ある輩は我を知ることなし。（四六九）

内をも知ることなく、外をも見ることなく、四方礙

へられたる愚者、彼は音聲のために誘はる。（四七〇）
内を知ることなくして、外を觀、外なる果を見る人、
彼も亦音聲のために誘はる。（四七一）
内をも知り、外をも觀、見るに障礙なき人、(三)彼は音
聲のために誘はるることなし。（四七二）

右ラクンタカ・バッヂヤ長老

我は獨子にして、母の愛〔兒〕、父の愛〔兒〕なりき、多
の苦行と祈願とによりて得られたるなり。（四七三）
彼の我が利を願ひ、益を求むる父と母との二人は、
我を愍みて佛に捧げぬ。（四七四）
「艱難によりて得たる此の兒は華奢にして柔弱なり、
主よ、我等は之を勝者の走使〔として〕捧げたてまつ
る。」（四七五）
師は、また我を受取りて、阿難陀に告げたまひぬ、
「速に之を得度せしめよ、之は敎へて宜しきものとな
らん」。（四七六）
師は我を得度させ、〔而して〕勝者は精舍に入らせた
まひぬ、其より太陽の未だ上らざるに、我が心は解
脫しぬ。（四七七）
師は其より棄てて靜思より起ち、我を召びて「來れ、
跋提耶」と宣ひき、是我が受戒なりき。（四七八）
生れて甫て七歲にして我は受戒を得三明に達しぬ、
不思議なる哉、法の宜き(四)安排や。（四七九）

右跋提耶長老

樓閣の蔭にありて、最上人の經行したまへるを見、
其處に我は彼に近づき、最上人を禮拜しき。（四八〇）
衣服を一肩にし、掌を合せ、一切生類中の最上者た
る離塵〔尊〕に隨ひ經行しき。（四八一）
問ふことに通ぜる知解者は、其より我に問を質し、
我は、迷妄なく、恐怖なくして、師に應對したてま

つりき。（四八二）

如來は「此等」間の答に對して隨喜の意を表し、比丘衆を顧みて、此の義を宣べたまひき。（四八三）

「多幸なる哉、央伽摩揭陀國の人、「比丘衆は」彼等の捧ぐる衣服、搏食、資具、臥牀、迎拜、適宜の恭敬を受く、彼等は多幸なる哉」と。また宣ひき、（四八四）

「ソーパーカ、今日よりして後我を見んがために近づき來れ、ソーパーカ、之また汝の受戒となれ。」（四八五）

生れて齡七歲にして、我は具足戒を得、最後身を持つ、不思議なる哉、法の宜き安排や。（四八六）

右ソーパーカ長老

手を以て葦を折り、小舍を設けて棲みき、之によりて世人一致して我に「破葦」の名を「與へぬ」。（四八七）

今日は、我手を以て、葦を折るべからず、名高く聞えたまへる瞿曇は、我等のために、戒法を制したまへり。（四八八）

サラバンガは先に總て病は、一として見ることなかりしが、（註）超越天子者の語によりて、此の病見えたり。（四八九）

毘婆尸「佛」の踏み、尸棄、毘沙浮「兩佛」の踏み、また拘留孫、拘那含牟尼及び迦葉「佛」の踏みたまひし道によりて瞿曇佛は往かせたまへり。（四九〇）

愛欲を離れ、取著を去り、七佛は滅盡に入りたまへり、此の法は此の斯の如き法ある「人」によりて說かれたり。（四九一）

四種の聖諦は生類を愍むが故に「說かれたり」、苦、集、道、苦の滅盡たる滅これなり。（四九二）

此の輪廻起れば無限の苦あり、此の身の破壞と命の滅盡とよりして、他の生なく、我は一切處に上解脫を得たり。（四九三）

右サラバンガ長老

【一】敎に住立せよ。　【二】火を取りて誠實を誓ふの式。古代印度に行はれたるなり。　【三】kāyagatāsati 身に繋れる念、身は常住にあらずと觀ずる念。　【四】或は法のよき質や。　【五】佛を指す。

八頌品第八

多の業を作すことなかれ、人人を遠けよ、(一)〔他に模し又は他と競はんと〕努むることなかれ、彼の元氣旺にして切に諸味を求むるものは、安樂を與ふべき福利を捨つ。（四九四）

〔賢者は〕在家の禮拜供養は之を淤泥なりと知る、細き箭は之を拔くこと難く、惡人の恭敬は之を捨つること難し。（四九五）

他の有情の邪業を作出するなく、〔隨つて〕自から之を感ずることなし、これ有情は、業に繫がるるが故なり。（四九六）

〔人は〕他人の語によりて盜人たらず、〔人は〕他人の語によりて牟尼たらず、〔人〕自ら己を知れるが如く、同じく諸天も亦彼を解す。（四九七）

(二)「我等は此處に滅ぶるものなり」と、愚者は之を覺らず、人若し之を覺れば、其よりして爭息む。（四九八）

智慧ある人は、財滅ぶとも、尙ほ生く、智慧を得ずしては、財あるものも、生くことなし。（四九九）

耳を以て總てのものを聞き、眼を以て總てのものを見る、見しもの、聞きしものを總て捨てんことは賢者には應ぜず。（五〇〇）

有眼は猶ほ盲の如く、有耳は猶ほ聾の如し、智者は猶ほ啞の如く、力人は猶ほ弱者の如くなれ、而して福利生ずれば死者の臥するが〔如く〕臥せよ。（五〇一）

右摩訶迦旃延長老

忿らず、恨まず、僞らず、〔又〕兩舌を離れたるもの、

此の斯の如き比丘は、斯くして來世を憂ふることなし。（五〇二）

怒らず、恨まず、僞らず、兩舌を離れ、常に〔諸根〕門を防護せる比丘は、斯くして來世を憂ふることなし。（五〇三）

怒らず、恨まず、僞らず、兩舌を謝し、戒善き比丘は、斯くして來世を憂ふることなし。（五〇四）

怒らず、恨まず、僞らず、兩舌を離れ、友善き比丘は、斯の如くして來世を憂なし。（五〇五）

怒らず、恨まず、僞らず、兩舌を離れ、良智ある比丘は、斯の如くして、來世を憂ふることなし。（五〇六）

如來に對する信心、確立して動くことなく、戒は善良にして、賢聖の樂とし、〔世間の〕讃歎する所たり。（五〇七）

僧伽に對して、喜悅を有ち、識見また直き時は、彼を貧者にあらずと云ふ、其の生活は、空なることなし。（五〇八）

されば智者は諸佛の敎を憶念して信心と戒と、喜悅と法見とを專修せよ。（五〇九）

右シリミッタ長老

怖畏を離れたまへる師を始て見たてまつりし時、人中の最上者を見たてまつりて、我が〔心に〕感動起りき。（五一〇）

手を〔延べ〕足を〔屈げて〕、福運の來るを迎ふるもの、彼は斯の如き師の惠愛を求めて得じ。（五一一）

其の時我妻兒と財穀とを捨て、鬚髮を剃りて、出家得度したり。（五一二）

〔三〕學と生活の規矩とを辨へ、よく諸の根を制し、等覺者を禮拜し、〔何物のためにも〕敗らるることなくして住しき。（五一三）

其より我誓願を起して、心に「之を成ぜんことを」切望しき、「愛欲の箭を拔かずしては、我寸時も坐せじ」と。（五一四）

此の斯の如くして住したる我が精進勇猛を見よ、三明通達せられ、佛の敎は成就せられぬ。（五一五）

我宿住を知り、天眼を淸うしたり、應供の德ある阿羅漢にして解脫して生質なし。（五一六）

其より夜に入り、「更に」日の上る比、あらゆる愛欲を涸盡し、跏趺を結びて坐しき。（五一七）

右摩訶般特迦長老

〔一〕リス・デビヅ夫人の譯によりて之を補ひたり。〔二〕法句經六偈註參照。

九頌品第九

無智なる凡夫の依執する老病を、識者は苦なりと「識る」、苦を識り正念にして禪思する時、人は之に優れる樂みを得ることなし。（五一八）

苦惱を齎し、妄心殺害の苦を與へ、毒ある愛欲を捨て、正念にして禪思する時、人は之に優れる樂を得ることなし。（五一九）

〔二〕雙重の四分に導き、安泰にしてあらゆる煩惱を淨除する最上の道を、智慧を以て見、正念にして禪思する時、人は之に優れる樂を得ることなし。（五二〇）

無憂、離垢、無作、寂靜、あらゆる煩惱を淨除し、結縛を破壞する道を修習する時、人は之に優れる樂を得ることなし。（五二一）

空中に雲鼓響き、鳥路に四方より豪雨來る、比丘はまた山窟に入りてぞ禪思する、此時人は之に優れる樂を得ることなし。（五二二）

花の叢あり、雜色のヴーネーヤ草を以て飾れる河の岸邊に坐し、妙意にして禪思する時、人は之に優れ

る樂みを得ることなし。（五三三）

中夜、人なき森林中に於て、雨降り、有牙の〔獸類〕吼ゆる時、比丘はまた山窟に入りてぞ禪思する、〔此の時〕之に優れる樂を得ることなし。（五三四）

山間に〔入り〕、巖岫によりて、己の疑念を阻め、恐怖を離れ、剛愎を離れて禪思する時、人は之に優れる樂を得ることなし。（五三五）

安樂にして垢穢、剛愎、悲憂を滅し、闘鑰なく、樹林なく、箭なく、あらゆる漏結を盡して禪思する時、人は之に優れる樂を得ることなし。（五三六）

右ブータ長老

【一】Dve-caturanga-gāmina（ドヹ チヤトルアンガ ガーミナ）是れ四向四果の兩種の四分に達するの意。

十頌品第十

(一)大德尊、葉を捨て果を求むる此等の樹木は今や紅色となり、火焰の如く光り輝く、大雄尊〔今は法〕味を分ちたまふべき時なり。（五三七）

樹と花とは愛すべく、四方普く葉を捨て果を求めて、香氣を吹き來る、雄尊、是より出立ちたまふべき時なり。（五三八）

寒きに過ぎず、暑きに過ぎず、大德尊、今や樂しき時節の中にあり、釋迦族民と拘利族民と、尊の西に向ひてローヒニー河を渡らせたまふを見たてまつらんことを。（五三九）

望を以つて田は耕され、望を以つて種は蒔かる、望を以つて財を齎す商主は海に入る、我がよりて存する所の彼の望、願くは成就せよ。（五三〇）

〔人は〕再再種を蒔き、天王は再再雨を降す、耕夫は再再田を耕し、穀は再再國土に入る。（五三一）

乞食は徘徊すること再三、施主は施與すること再三、

施主は施して天界に入ること〔また〕再三なり。（五三二）
廣智者、家に生るれば、〔其の〕雄者は實に七代の父母を淨くす、我天中の天〔又之を〕能したまふと思ふ、これ汝によりて眞の名の牟尼生れたればなり。（五三三）
淨飯はすなはち大仙の父、而して摩訶麻耶は佛の母なり、彼の女菩薩を胎中に護り、〔死して〕身壞れて天界に喜樂す。（五三四）
彼の（三）瞿曇彌は死し、此處より去りて天上の欲を享け、彼の女此等の天子群に圍繞せられ、五種の欲によりて喜樂す。（五三五）
我は堪ふべからざるを堪へ、比倫を絕せる此の佛、（三）菴儗羅婆の兒なり、釋尊、汝は我が父の父、瞿曇尊、〔汝は〕法によりて我が祖父。（五三六）

右迦留陀夷長老

前にも後にも、若し他に人なき時は、獨林間に住する人に、大なる安樂あり。（五三七）
今、我佛の稱讚したまひし森林に獨赴かん、之獨棲して專念なる比丘の安樂とする處なり。（五三八）
定者に喜を與ふる、狂象出沒する、樂しき林に、獨急ぎて入らん、法利に心を專とせる我は。（五三九）
美しく花咲ける寒林に於て、冷しき山窟の中に、四肢に水を灑ぎて我獨り經行せん。（五四〇）
樂しき大林の中に我唯一人にして第二人者なく、爲すべきことを爲し終へ、漏結を盡して住すること何時か之あらん。（五四一）
斯の如く、爲さんことを思へる我が所願成ぜかし、我こそは〔之を〕成ぜん、他は他の作者にあらず。（五四二）
我は甲冑を著けん、林中に入らん、漏結の滅盡に逹せずしては、之より出ることなからん。（五四三）
冷にして美妙の香氣ある風の吹き來る時、我山顚に

坐して無明を破らん。（五四四）

花に掩はれたる林の中に、冷なる洞窟の中に、解脱の樂によりて安樂を得、我は山廓の中に樂まん。（五四五）

此の我〔今日〕、所願を成滿すること、猶ほ十五夜の如くなり、あらゆる漏結を盡して、今や再生なし。（五四六）

右（四）エーカ并ハーリヤ長老

利益も、非利益も、兩者共に未だ來らざるに先づ見るものは、怨も親も其の罅隙を尋ぬ〔とも之を〕見ることなし。（五四七）

入・出息念をよく修習して成就し、次第に積集して佛の所説の如くしたり、此の我世界を照すこと、猶ほ雲を脱れたる月の如し。（五四八）

實に我が心は淨く、限界なく、よく修練せられ、理解せられ、抑制せられて、四方に光り輝く。（五四九）

智慧ある人は財亡ぶとも、尚ほ生く、智慧を得ずしては、財あるものも生くることなし。（五五〇）

智慧は所聞を裁斷するもの、智慧は名稱、頌辭を增加するもの、智慧を有てる人は此の苦〔界〕にありとも、安樂を得。（五五一）

〔有情の〕生れ、死する、之は今日の法にあらず、希有にあらず、未曾有にあらず、此處に何の未曾有事の如きかあらん。（五五二）

生れたるものゝ生の次には必ず死あり、生れ、生れたるものは此處に死す、これ斯の如きは生命あるものの法なればなり。（五五三）

他の人の生くるに利なること、之は死者の利にあらず、死したるに悲泣する、之れは名譽にあらず、淸淨にするにあらず、沙門婆羅門の稱歎する所にあらず。（五五四）

悲泣は眼と體とを害ひ、色と力と、又智とは「之がためにし」衰ふ、彼に取りては四方歡樂ならず、彼の親も安樂なることなし。（五五五）

されば在家に住みては智ある人と多聞の人とを「迎へんと」願ふべし、此等の人の智慧分別によりて務を超ゆること、恰も船によりて滿ちたる河を「超ゆる」が如し。（五五六）

右(三)　マハーカッピナ長老

我が進歩の遲遲たりしため、先には我輕蔑せられき、兄はまた我を追ひ出して云ひき、「今汝は去りて家に還れ」と。（五五七）

我は伽藍の房舍中にありて斯の如く追ひ出され、而も佛の教に望を懷き、愁然として立ちたり。（五五八）

其處に世尊は現れたまひ、我が頭を撫で、我が手を捉へて、伽藍の中に導きたまひき。（五五九）

師は我を愍みて、(六)足拭を與へたまひ、「汝の心を」一境に住めて、「此の(七)淨きものに定立せしめよ」と「宜ひき」。（五六〇）

我世尊の語を聞き、「佛の」教を樂みて住し、最上利に達せんがために三昧を行じき。（五六一）

我宿住を知り、天眼を清淨にせり、三明に逮達し、佛の教を成就せり。（五六二）

パンタカは己を化作すること二千體、樂しき菴婆林中に坐して、「供養の」時を報ずるを待ちたり。（五六三）

其より師は我に時を報ずるの使者を遣はしたまひ、時の報ぜらるるや、我は空中に上りき。（五六四）

我は師の足を禮して、一面に坐しき、我が禮敬して坐せるを師はやがて攝受したまひき。（五六五）

一切世間の祭壇、梵施の受者、人間の福田は供養物を受けたまひき。（五六六）

右チューラパンタカ長老

種種雜多の不淨物に滿てる大糞塊、大疽腫、大創傷、恰も滿ちたる泥沼の如し。（五六七）

膿血に滿ち、糞坑に祕める〔此の〕身は水液を流出するもの、常に腐〔水〕滲み出づ。（五六八）

六十の腱に縛せられ、肉の硬膏を以て塗られ、皮の鎧を被せられたる無用の腐臭身。（五六九）

骨の鎖に繫がれ、筋の經に結ばれ、互に相連りてあれば、種種の行動〔をなす〕に堪ふ。（五七〇）

〔身によりて〕欲念を起す人は〔之を〕此處に棄て、死王の側に至ること必せり。（五七一）

身は無明のために障へられ、四種の結縛のために縛せらる、身は暴流に沈められ、隨眠の網に掩はる。（五七二）

五種の障礙に繫がれ、疑惑を所有す、愛欲の根たるものに追はれ、愚癡の蓋のために蓋はる。（五七三）

此の身は業の車に載せられて斯の如く轉輾す、成は壞に終り、種種の生有は壞滅す。（五七四）

此の身を我が有なりと思へる闇昧の凡夫輩は恐ろしき墓田を擴げ、再再生を受く。（五七五）

此の身を捨つること、糞に塗れたる蛇の如くするものは、生有の根を棄て、無漏にして涅槃に入らん。（五七六）

右カッパ長老

〔人里を〕離れて音少く、猛獸の出沒するところ、比丘は靜思をなさんがために、〔此の如き〕座臥を受用せよ。（五七七）

冢間より又は街路より塵布を持ち來り、其を以て僧伽梨衣を縫ひ、麤服を著用せよ。（五七八）

心を卑うして、比丘は〔諸根の〕門を護り、善く自ら

制して家より家に戸戸乞食に歩け。(五七九)

麁なるにても滿足し、他の多くの美味を貪ることなかれ、諸味に著せるものの心は、禪思を樂むことなし。(五八〇)

牟尼は少欲、滿足、他に遠ざかり、在家者にも出家者にも共に混ずることなくして住せよ。(五八一)

自己を表示すること、恰も鈍者又啞者の如くなるべく、識者は群集の中にありて、時ならざるには言ふべからず。(五八二)

彼は何人をも罵ることなく、害ふことを避くべし、戒律に於て自ら攝し、飮食に於て量を知るべし。(五八三)

巧く相を執へて、心の起を知り、時に順じて止と觀とを修習すべし。(五八四)

不休息の精進を具へ、常に努力すべく、苦惱の際涯を盡さずしては識者は信賴をなすことなし。(五八五)

斯の如くして住し、清淨を憧憬する比丘は、あらゆる漏を盡し、また涅槃に達す。(五八六)

右ヴンガンタの兒なるウパセーナ長老

自己の利益を知り、更に此處に「佛の敎に於て」沙門の道に入れるものに適せる語を觀察すべし。(五八七)

此の敎に於て、良友ある、廣く學を修むる、師の「敎を」聽かんと欲する、是沙門に適する所なり。(五八八)

諸佛に對して敬意ある、如實に法を供養し、また僧を尊敬する、是沙門に適する所なり。(五八九)

行處親近處あり、生活は清淨にして難ずべき所なく、心を確立せる、是沙門に適する所なり。(五九〇)

行とまた制とを具へ、愛すべき威儀あり、增上心に住止せる、是沙門に適する所なり。(五九一)

牟尼たるものは邊鄙にして騷少き森林中の座臥處を受用すべきなり、是沙門に適する所なり。(五九二)

戒と多聞と法を研究するに如實なると、諦理を曉了すると、之沙門に適する所なり。（五九三）

〔世の〕無常なると、無我想と、不淨想と、世間不可樂想とを修習せよ、之沙門に適する所なり。（五九四）

〔七〕覺支、〔四〕神足、〔五〕根、〔五〕力、及び聖なる八支道を修習せよ、之沙門に適する所なり。（五九五）

牟尼は愛欲を捨て、諸漏の根本を壞り、解脫して住せよ、之沙門に適する所なり。（五九六）

右ゴータマ長老

【一】此等の偈を唱へて世尊に歸鄕を勸めたてまつる。【二】Gotami 喬曇彌、瞿曇の女姓なり、摩耶夫人を指す。【三】Angirasa 佛の一名なり。【四】Ekavihārika 獨棲の意、此の長老、本名をチッサ・クマーラと云へり。【五】Mahākappina 摩訶迦賓那、大刼賓那。【六】pāda-punchani 足を拭ふものをいふ。【七】これは上の足拭を指す。

十一頌品第十一

(一)ウッヂュハーナ兒よ、汝森林の中に於て、雨季の如くして何の利益かある、(二)季節の風は汝に取りて樂しかるべし、是れ入定者は〔他より〕遠離すべきが故なり。（五九七）

季節風の雨時に雲を拂ふが如く、我が(三)遠離の想は弘敷す。（五九八）

卵より生れ、黑色にして、冢間を家〔の如くに〕(四)徘徊するもの、我をして身に就て(五)離欲の正念を起さしめき。（五九九）

他の護るものなく、また他を護ることなきもの、斯の如き比丘は諸欲に期望なくして安樂に臥す。（六〇〇）

清みたる水あり、大なる磐石あり、黑面猿と鹿と羣り、水〔草〕セーヷーラに覆はる、此等の岩山は我をして樂ましむ。（六〇一）

我は森林、岩峽、洞窟、邊鄙の坐臥處、猛獸の往來

する處に住し來れり。(六〇二)

此等の生類を打ち、屠り、苦に至らしめんと、我に斯る卑うして過ある思惟の起りしことを知らず。(六〇三)

我師に奉事し、佛の敎を成ぜり、我重荷を卸し、生有の因を滅せり。(六〇四)

我、彼の利益のために、在家を出でて、出家得度せしが、今其の利益を成就し、あらゆる結縛を斷じ盡せり。(六〇五)

我は死を欣ばず、我は生を欣ばず、恰も務を終りたる奴僕の如く、時の至るを待つ。(六〇六)

我は死を欣ばず、我は生を欣ばず、正覺、正念にして時の至るを待つ。(六〇七)

右サンキッチャ長老

【一】Ujjuhānaとは山の名なり、爆林に掩はれ、山中淋池、洞窟多く、處々水流れて雨時には登ることを得ず、故に之を譬として引用せるなり。或は之は鳥の名なり、此の鳥寒に堪へず、雨時は密林中に認みて出ることとなし、故に之に譬へたりとも云ふ。【二】Verambha季節風又は山窟なりとも云ふ。【三】遠離と結び著ける想、意識、智覺。【四】鴉。【五】Virāganissitasati 離欲に關する、離欲を旨とする正念。

十二頌品第十二

此處に此の世に於ては、能く學習せられたる戒をこそ學習せよ、これ戒は[之を]行ふものにあらゆる成效を與ふるが故なり。(六〇八)

智者は三種の安樂を望みて戒を護るべきなり、稱讃と、獲利と、死後天界に於ける喜樂と之なり。(六〇九)

持戒者は自制によりて多の友を得、汙戒者は邪惡を行ひて友より遠ざかる。(六一〇)

汙戒の人は誹謗と汙名とを獲、持戒者は常に讃歎と令名とを受く。(六一一)

戒は第一の住立所なり、之諸善の母なり、あらゆる

法中最第一なるものなり、されば戒を淨くせよ。（六一二）

戒は渚岸なり、また(一)防護なり、心の(二)光明なり、
また、一切諸佛の(三)津頭なり、されば戒を清淨にせよ。（六一三）

戒は無比の力、戒は最上の武具なり、戒は最尊の莊嚴、戒は希有の甲冑なり。（六一四）

戒は勢强大なる堤防なり、戒は無上の薫香、戒は最上の塗香、「人は」之によりて方より方へ赴く。（六一五）

戒は第一の旅料、戒は最上の旅資なり、戒は最第一の運載にして、「人は」之によりて方より方へ行く。（六一六）

此の世に於ては毀訾を得、死後地獄に於ては憂苦す、
戒の上に定住なき愚者は一切處に憂苦あり。（六一七）

此の世に於ては稱譽を得、死後天上にありて喜樂す、
戒の上に定住ある賢者は一切處に喜樂あり。（六一八）

此の處にありては戒こそは第一なれ、而して智者は最上なり、人間界にも天上界にも戒智あるものに勝利あり。（六一九）

右(四)シーラヴー長老

我賤しき家に生れ、貧にして財乏しく、我は稼業卑しく、(五)不淨物の清除者なりき。（六二〇）

人人には忌み嫌はれ、罵られ、我は心を卑うして多の人を禮敬しき。（六二一）

時に我正覺者大雄者の比丘衆に圍繞せられ、摩掲陀の最大都府へ入らせたまふを見奉りき。（六二二）

我擔杆を捨て、禮拜せんが爲に近きたてまつれば、
人中最上者は我を慈愍して立たせたまひき。（六二三）

其より我は師の足を拜して一面に立ち、一切生類中の最上者に對して出家「の許可」を求めき。（六二四）

其よりして悲愍の師、一切世間の慈哀者は我に對して、「來れ比丘」と宣へり、之我が受戒なりき。（六二五）

我は懈倦なくして唯獨森林中に住し、師の言を行ふて、勝者の我に敎へたまひし如くせり。（六二六）

夜の初分に於いて前生を追憶し、夜の中分にありて天眼を淸淨にして、夜の後分に至りて闇蘊を碎きたり。（六二七）

其より夜に入り、〔更に〕日の上る比、因陀維と梵天とは來りて合掌し、我を禮拜しき。（六二八）

「人間中にて生勝れたる人、汝に歸命す、人間中にて最上なる人、汝に歸命す、汝の諸漏は滅盡せらる、尊、汝は供養を受くるに堪ふるものたり。」（六二九）

時に師は我が天子の羣に圍繞せらるるを見、微笑を漏して、此の義を宣べたまひき、（六三〇）

「苦行と梵行と自制とまた調順と、之によりて婆羅門たり、之を最上の婆羅門〔といふ〕と。」（六三一）

右(六)　スニータ長老

【一】saṃvara 攝護、持戒、律儀等の意あり。【二】abhibhāsana 喜悅滿足の意もあり。【三】涅槃の大海へ自ら渡り、また他 渡すべき。【四】具戒者の意。【五】Puppha-chaḍḍaka 之をリス・デビツ夫人は花を取り棄つるものと譯せり、puppha には花の外に經水の意あることを知らば、此の貧人は之より生ずる婦人の不淨物を始末するを渡世とせしことを思ふべし。【六】Sunīta 善く指導せられたるの意。

十三頌品第十三

嘗て央伽王の領土に於いて位高き扈從たりしもの、今日、我ソーナは諸法の上に勝れ、苦惱の彼岸に達せり。（六三二）

(一) 五〔下分結〕を斷ち、五〔上分結〕を捨て、更に五〔根〕を修練せよ、五著を超えたる比丘は暴流を渡りたる〔人〕と稱せらる。（六三三）

虚誇放逸にして外欲ある比丘は戒も定も慧も成滿するに至らず。（六三四）

爲すべきを爲さず、而も爲すべからざるを爲す、虚誇にして懈怠なる此等の輩の諸漏は增長す。（六三五）

人常に精進して、自ら觀念を修し、非事に遠ざかりて、常に是事を行ひ、而して正念覺知あり、斯る人の諸漏は滅盡に至る。（六三六）

直き道說き示されたらば、往きて還ることなかれ、自ら己を勵まし、涅槃を成就せよ。（六三七）

我極度の努力を爲すや、世間無上の師、具眼者は箜篌を喩として法を說き示したまひき。（六三八）

我其の言を聽き、教を樂みて住しき、最上利に達せんがために止を行ぜり、我三明に遠達し、佛の教を成就せり。（六三九）

出離を專一とし、不瞋恚を專一とし、取を盡せし人の心の遠離と、（六四〇）

愛欲を滅盡するを專一とせし人の心に愚癡なきと、處の生起とを見て、〔我が〕心解脫せり。（六四一）

善く解脫を得、心寂靜に歸し、旣に爲し終へたるものは更に〔業を〕積むことなし、〔彼に〕爲すべきことなし。（六四二）

恰も一塊石より成れる山の風のために搖がされざるが如く、同じく色味聲香觸等總て。（六四三）

可愛不可愛の法も亦、斯る人の〔心を〕動かすことなし、其の心は住立し、繫結を離れ、又滅盡を觀る。（六四四）

右ソーナ・コーリヰサ長老

【一】法句經三七〇偈註參照。

十四頌品第十四

我在家より出でて出家の身となりし以來、卑く、〔且つ〕過ある思惟の我に起りしことを知らず。（六四五）

此等の生類を打ち、屠り、苦に至らしめんと、此の長時の間、我に斯る思惟起りしことなし。（六四六）

無量の慈心の善く修練せられ、佛の教に隨ひて次第に積集せられたることを知る。（六四七）

あらゆるものを親とし、友とし、あらゆる生類を哀愍する我、常に不瞋恚を樂み慈愛心を修練す。（六四八）

我動かず、搖がざる心を悅ぶ、我善人の行へる梵行を修習す。（六四九）

非尋に逮達せる、正偏覺者の弟子は直に聖き沈默に達してあり。（六五〇）

恰も石山の聳立して動かざるが如く、同じく比丘は愚癡を盡したるが故に、撼かざること山の如し。（六五一）

執著なくして常に清淨を求むるものには毫末量の邪惡も虛空の大にぞ見ゆる。（六五二）

邊地にある都城を、內外より防護するが如く、等しく自己を防護せよ、瞬時も、空過せしむることなかれ。（六五三）

我は死を欣はず、我は生を欣はず、恰も務を終りたる奴僕の如く、時の至るを待つ。（六五四）

我は死を欣はず、我は生を欣はず、正覺、正念にして時の至るを待つ。（六五五）

我師に奉事し、佛の教を成ぜり、我重荷を卸し、生有の因を滅せり。（六五六）

我は彼の利益〔を成ぜん〕がために在家を出でて、出家得度せしが、今其の利益を成就し、あらゆる結縛を斷じ盡したり。（六五七）

精勤にして成ぜよ、之我が敎誡なり、今我圓寂に入

らん、我は隨處に解脱を得たり。（六五八）

右レーヴタ長老

譬へば牛善く、勝れたる〔牛〕の荷に繫がれ、荷を運ぶに、過度の重に壓されて〔而も〕軛を離るることなきが如く、（六五九）

等しく智に飽滿せること、海の水に〔滿てる〕が如くなる人は、他人を輕侮することなし、之生類の賢き法なり。（六六〇）

時〔の內〕にありて、時に降伏し、生有非有に降伏せる人人は苦を受く、此の青年の人は此の處にありて憂苦す。（六六一）

樂の法によりて上げられ、苦の法によりて下さる、如實に識知せざる愚人は〔苦樂〕兩者のために惱まさる。（六六二）

苦惱の上に快樂の上に、又中〔道〕の上に欲念を超越せるもの、彼等は住立して恰も門柱の如く、彼等は煽られ壓へらるゝことなし。（六六三）

所得あるにも、所得なきにも、名譽にも、令聞にも、批難にも稱讚にも、また苦痛にも安樂にも。（六六四）

彼等一切處に染著することなき、猶ほ蓮葉の上の水滴の如し、勇者は一切處に安樂を得、一切處に敗亡するなし。（六六五）

法によるが故に得ざると、不法なる利得とは、法に合うて得ざるこそ、不法の利得に勝りたれ。（六六六）

覺少きものゝ譽高きと、智ある人の譽なきとは、智ある人の譽なきこそ、覺少きものゝ譽高きに勝りたれ。（六六七）

智鈍きものに稱歎せらるゝと、智ある人に誹謗せらるゝとは、智者に誹謗せらるるこそ愚者に稱歎せらるゝに勝りたれ。（六六八）

欲より出る安樂と、遠離に伴ふ苦惱とは、遠離に伴ふ苦惱こそ欲より出る安樂に勝りたれ。（六六九）

非法によりて生ると、法によりて死するとは、法に合へる死こそ、非法にして生るに勝りたれ。（六七〇）

欲望と忿怒とを捨て、生有より生有に心寂靜に歸せるものは世に依著なくして遊行す、彼等には愛なく〔また〕非愛なし。（六七一）

〔七〕覺支、〔六〕根、また〔五〕力を修習し、最上の寂止に達し、無漏にして涅槃に入らん。（六七二）

右ゴーダッタ長老

十六頌品第十五

大味ある法を聽いて、我益之を信ず。說き示されたる時は欲貪を離れ、一切處に著するとなし。（六七三）

此の世界地輪上にありて多の像は欲貪を伴へる清淨の思惟を攪すが如し。（六七四）

猶ほ風のために揚げられたる塵埃を雨の鎭むるが如く、等しく智を以て見る時は思惟息止す。（六七五）

「一切諸行は無常なり」と、斯の如く智を以て見る時、人は苦に厭嫌す、之清淨の道なり。（六七六）

「一切諸行は苦なり」と、斯の如く智を以て見る時、人は苦に厭嫌す、之清淨の道なり。（六七七）

「一切諸法は無我なり」と、斯の如く智を以て見る時、人は苦に厭嫌す、之清淨の道なり。（六七八）

長老憍陳如は出離の念銳く、佛に次いで開悟し、生死を捨離して、梵行を完成したる人。（六七九）

暴流、羂索、强き杙、碎き難き山、杙と羂とを斷ち、破り難き岩を破りて、彼禪思者は渡りて彼岸に達し、魔の縛より脫れたり。（六八〇）

浮虛にして動轉する比丘は惡友に親近し、波のため

に倒され、大海の中に沈む。（六八一）

浮虚ならず、動轉せず、愼重にして諸根を攝し、善友ある智者は苦惱の際を盡すものたるべし。（六八二）

四肢はカーラー樹の結節の如く、瘦せて脈管現る、飮食に量を知る人は心貧しきことなし。（六八三）

深林、大林の中にありて虻または蚊のために螫され、〔而も〕戰場に〔臨める〕象の如く正念を失ふことなくして之に堪へん。（六八四）

我は死を欣はず、我は生を欣はず、恰も務を終れる從僕の如く、時の到るを待つ。（六八五）

我は死を欣はず、我は生を欣はず、正覺、正念にして時の到るを待つ。（六八六）

我師に奉事し、佛の敎を成ぜり、我重荷を卸し、生有の因を滅せり。（六八七）

我彼の利益のために在家を出でて、出家得度せしが、此の利益我今之を成ぜり、羣棲して我に何の效かある。（六八八）

右阿若憍陳如長老

人にして己を調柔し、定に住し、動作は梵天の道に則り、心の寂靜を悅びたまへる正覺者。（六八九）

人は此の一切諸法の彼岸に達したまへる〔佛〕を禮拜し、諸天も亦之を禮拜すと、斯の如く我は阿羅漢に聞けり。（六九〇）

一切諸結を超越し、(一)林より非林に來り、諸欲より脫るるを樂みとすること、黃金の鑛より〔脫るる〕が如し。（六九一）

彼(二)那伽は雪山林中にありて快樂極まり、あらゆる那伽の名あるものの中にて眞に此の名に相應する最上者なり。（六九二）

我汝がために那伽を說かん、彼は惡を犯さざるなり、

慈愛と不害と此の二は那伽の兩足なり。（六九三）

正念と正覺と、此等は那伽の他の〔兩足なり〕、大那伽は信心を手とし、平靜〔と云ふ〕白牙あり。（六九四）

正念は首、智慧は頭、(三)思惟は(四)法思、和住は法腹、遠離は其の尾なり。（六九五）

彼の禪思者は、入息を樂とし、內心善く定に住す、那伽は、行くにも定に住し、那伽は、立つにも定に住す、（六九六）

那伽は臥すにも定に住し、坐するにも定に住し、那伽はあらゆる場合に防護す、之那伽の成就なり。（六九七）

過なきを受け、過あるを受けず、食物と被衣とを得て、蓄積したるを斥く。（六九八）

細麤の繫結を〔斷ち〕、あらゆる纏縛を斷ちて、隨處に行くに、期望する所なくして到る。（六九九）

猶は水中に生じて、淨香あり、愛すべき白蓮の水のために汙さるゝことなくして生長するが如く、（七〇〇）

等しくまた佛は世に生れ出で、世に住し、〔而も〕世のために汙されたまはざること、猶ほ赤蓮華の水に〔汙れざる〕が如し。（七〇一）

點じたる大火も薪を與へざれば、消滅に歸す、餘燼存すとも「既に消えたり」と稱せらる。（七〇二）

此の義理を啓示すべき譬喩、識者により說明せられぬ、那伽によりて說明せられたる那伽を諸大那伽は知識せん。（七〇三）

貪より離れ、瞋より離れ、癡より離れ、漏あるなし、那伽は身を捨て無漏にして圓寂に入らん。（七〇四）

右ウダーイ長老

【一】Vanain nibbanain には林、非林、有欲、無欲、離欲等の意義ありされば此處は語を互にして見るを可とす。【二】Naga は過ぐるものなき義(na+aga)、又惡を犯さざるの意(na+agu)にて、龍、象、また人中優れたる人の意。【三】vimanisa.【四】dhammacintana.

二十頌品第十六

(一)或は祭祀のため、或は富財のため、我等の先に害せしもの、總て之怖畏にして、此等のものは震ひ且つ悲めり。(七〇五)

汝には此の怖畏の狀なく、顏色益和悅す、斯る大怖畏あるに汝何故に憂懼せざるや。(七〇六)

(二)長よ、期望なきものには心中苦悶なし、繫結を盡したるものはあらゆる怖畏を超越せり。(七〇七)

生有の因を盡し如實に法を見たるが故に、死に恐怖なく、恰も重荷を卸すが如くなり。(七〇八)

我善く梵行を修し、道をも善く修習したり、我死に恐怖なく、恰も病の癒ゆるが如し。(七〇九)

我善く梵行を修し、道をも善く修習したり、[我]生有の愛樂なきことを見、嘸みて捨てたる毒[の如くせり]。(七一〇)

[生死の]彼岸に度りて、取著なく、務を終り、無漏なり、命の盡るに滿足せること、恰も刑場を免れたるが如し。(七一一)

(三)最上法性に達し、一切世間に欲なく、焚ゆる家より脫れたるが如く、死に[當りて]憂苦せず。(七一二)

集合せるもの、又生有を得るもの、之は總て依止なしと、大仙は斯の如く宣ひたり。(七一三)

佛によりて說かれたるが如く、斯の如く之を知るものは生有を執ふることなきこと、恰も熾熱せる鐵丸の如し。(七一四)

我には、「ありき」と云ふ[思]なく、「あらん」と云ふ[思]なし、諸行は滅盡せん、此處に何の憂懼かあらん。(七一五)

長よ、純なる法の生起と、純なる行の繁衍とを見る

こと如實なるものには怖畏あることなし。(七一六)
草や薪に等しき世間を、智慧を以て見る時は、彼我有の念を有たず、「我に之なし」とて憂苦することなし。(七一七)
我身を厭嫌し、生有に欲望あるなし、これ此の身は破られ、他「の身」は更にあることなければなり。(七一八)
汝等「我が」身を以て爲すべきことあらば、望む所によりて之を爲せ、我には之を緣としてこゝに瞋恚も情愛もあることなけん。(七一九)
彼の此の語を聞いて、希有にも身毛卓立しき、劍を抛ちて、諸青年等は下の如くいへり。(七二〇)
「大德、何を爲してか、將た誰か汝の師たり、誰人の敎に依りてか汝は此の無憂性を得たる。」(七二一)
「一切智者、一切見者、勝者は我、師範なり、大悲愍者、一切世間の醫者たる師なり。(七二二)
彼によりて此の滅盡に達する無上の法は說き示されたり、彼の此の敎によりて「我は」此の無憂性を得たり。」(七二三)
盜賊等は仙士の善く說きたる語を聞いて劍と「他の兇」器とを捨て、或者は其の業より離れ、或者は出家を樂へり。(七二四)
此等の識者は善逝の敎に於て出家得度し、「七」覺支、「五」力を修習して、心歡喜し、滿足して無爲涅槃の道に達しき。(七二五)

右アヂムッタ長老

沙門比丘パーラーパリヤの閑居、獨坐、禪思してありし時、「下の如き」思起りき。(七二六)
如何なる次第により如何なる禁行と(四)行とに「よりてか」、人は自己の義務を果せるものなる、而して何人を害はざるや。(七二七)

人間の諸根は、利益となり、また不利益となる、護られざるは不利益となり、護られたるは利益となるなり。《七二八》

諸根を護り、諸根を防ぎてぞ、人は自己の義務を果せるものなり、又何人をも害はざらん。《七二九》

若し〔人〕諸の形色に走らんとする眼根を制せず、患離を見ることなくば、彼は苦惱より脫せず。《七三〇》

若し〔人〕諸の音聲に連らんとする耳根を制せず、患離を見ることなくば、彼は苦惱より脫せず。《七三一》

未だ出離を見ざるもの若し諸の香氣を嗅がば、彼は香氣に迷惑して、苦惱より脫せず。《七三二》

酸味甘味または辛味を記憶し、味欲に執著するものは、心覺醒することなからん。《七三三》

美にして快き諸の觸を記憶し、貪欲の根に染著せるものは種種の苦惱を得。《七三四》

此等諸の法より、心を防止すること能はざるものは、其よりして、總て此の五〔根〕より、苦惱彼に追隨す。《七三五》

膿血に滿ち、また數多の死屍に〔滿てる身は〕、勝れる人の手に成り、彩られて、美しき籃の如し。《七三六》

辛き甘味、苦しき愛の繫縛を覺らざること、蜜を塗りたる剃刀を〔覺らざる〕が如し。《七三七》

女の形貌、女の味、また女の觸、女の香氣、此等のものに染著するものは種種の苦を得。《七三八》

婦女の孔穴は、總て五處五處に〔汁液を〕滲み出す、精進して此等を防止し得るもの、《七三九》

彼は利益の人、彼は法住者、彼は巧妙、明辨の人なり、是れ〔彼〕法あり、義ある務を樂みて、爲すべきが故なり。《七四〇》

不放逸にして明辨なる人は、(五)沈下を來すべき、利

益なき務を、務と見做さずして斥けよ。（七四一）

利益の伴へることと、法によれる喜樂と、之を執して行へ、之ぞ最上の喜樂なる。（七四二）

種種の方便を用ひて他に克たんことを希ひ、打ち、殺し、更に憂苦し、暴力を以て他を侵し、（七四三）

猶ほ力ある人の〔物を〕割くに、橛を以て、橛を拔くが如くす、巧慧の人は、諸根を制するに、諸根を以てす。（七四四）

信心、精進、定、念、慧を修習し、五〔力〕を以て五〔欲〕を打ち、婆羅門は往くに苦悶あることなし。（七四五）

彼は利益の人たり、法住者たり、總て佛の言敎を爲し行ひて餘す所なし、彼の人は安樂を加ふ。（七四六）

右バーラーダリヤ長老

熱誠にして法を追憶すること長時、沙門婆羅門に問うて、〔而も〕心の安靜を得ざりき。（七四七）

此の世に於て彼の彼岸に達せるものとは誰ぞ、誰か無滅の〔法〕に達せる、誰人の法にして最上義に通ぜしむるものをか、我は受取せん。（七四八）

餌を食ふ魚の愚にして鉤に懸れるが如く、恰も(六)エーパチッチ阿修羅王の大因陀羅の羂に縛せられたるが如くなりき。（七四九）

我は(七)之を曳摺らん、我は此の憂苦より脫れん、誰か此の世に於いて、我が縛を解き、正覺を得せしむるぞ。（七五〇）

何の沙門婆羅門か、我に〔其の〕斷絕を指示する、何人の法にして、老死を排除するものをか我は受取せん。（七五一）

疑惑、猶豫と絡まり、議論の力と結び、忿怒を得、心戻にして、貪欲と、（七五二）

愛欲の弓より放たれたるもの、(八)三十〔の身見邪見

と」結べるもの、凡そ立てるものは、之を破りて、己の力を見よ。　（七五三）

他の諸の見を捨てず、思惟、追憶によりて益熾ならしめたる、我之がために衝かれて動轉すること、恰も風に搖がさるる木葉の如し。　（七五四）

我有の念は我が内心に起りて疾く熟するに至る、身は六の觸處にして〔我有は〕常に此處に發出す。（七五五）

我未だ疑惑なる我が此の箭を拔くに、探針を以てして、他の刀を以てせざる醫者を見ず。　（七五六）

誰か刀なく傷なくして我が内心にある箭、總て我が四肢を害はずして我が箭を拔かんや。　（七五七）

彼の最尊にして毒と過とを排除したまふ法主は深處に陷りたる我に陸を〔示し〕手を示したまはん。（七五八）

我は沼の中にあり、除き難き塵埃の側に祕む、虛僞、嫉妬、議論、昏沈、隨眠の蔓れる中にあり。（七五九）

染欲によれる思惟の車乘は調戲の雷、繫結の雲、橫邪の見を運載す。　（七六〇）

流は四方に流れ、蔓は芽を生じて存す、誰か此等の流を防ぎ、誰か此の蔓を斷たん。　（七六一）

大德、流を防止する堤防を築け。汝の心より生ぜる流をして、暴力を以て樹を撃つが如くせしむることなかれ。　（七六二）

斯の如く我が、恐怖を生じ、此岸にありて彼岸を索むるに依止處となりたまひしは仙士の羣に圍繞せられ智慧を武器としたまへる師なりき。　（七六三）

水に流さるる我に對し構よく、清く、法の精を以て造りて强き階を與へたまひ、尙ほ「恐るることなかれ」とも我に宣ひたり。　（七六四）

念處の樓閣に上りて、我は先に身見を愛樂せりと思ひし輩を觀察したりき。　（七六五）

我船に上るべき道を見しとき、己に住止することなくして、最上の埠頭を見たり。（七六六）

己より出で、最上の因より生ずる箭、此等を止めんがために最上の道を說き示したり。（七六七）

長時我に隨臥し、長夜定著したりし我が結縛を、毒と過とを除きたまふ佛は、我がために拂ひたまへり。（七六八）

右テーラカーニ長老

飾りたる像、瘡腫の塊、病を懷き、多の思惟を有てる積集の身を見よ、之に確固なく、住立なし。（七六九）

摩尼珠と耳環とを以て飾り、骨と皮とを以て組みたる色身を見よ、衣服を以て美しきなり。（七七〇）

足には蟲脂を塗り、顏には香粉を施せり、これ愚人愚迷のためには可矣、「されど」彼岸を求むるものには然らず。（七七一）

髮は組みて八辮となし、眼は安繕那膏を塗れり、之愚人愚迷のためには可矣、彼岸を求むるものには然らず。（七七二）

新しくして飾ある安繕那壺の如き、腐臭の身は裝飾せらる、之愚人愚迷のためには可矣、彼岸を求むるものには然らず。（七七三）

獵夫羂を設け、鹿は之に繫らず、餌を食ひ盡して「獸獵者は泣悲めり、我等は去らん」と云ふ。（七七四）

獵夫の羂は破られ、鹿はこれに繫らず、餌を食ひ盡して、「獸獵者は憂ひ悲めり、我等は去らん」と云り。（七七五）

此の世にありて財ある人を見るに、愚にして財を得て「而も」施すことなし、慳貪の人は財を蓄積し、諸欲を貪ることまた益甚し。（七七六）

王は暴力を用ひて地上を征服し、全地海に至るまで

併せ有して、海の此方にては滿足せず、海の彼方をも得んと求む。（七七七）

王者も他の多の人人も愛欲を離れざるに死に會ひ、未だ十分ならざるに身を捨つ、これ此の世に於て諸欲を滿すことなければなり。（七七八）

親族のものは髮を亂して、其を泣き悲み、また「願くは我等不死なれ」といふ、衣服を以て包みたるを外に運び、火葬堆を組みて其より荼毘に附す。（七七九）

彼は串を以て刺され、富財を捨て、單一衣にして燒かる、死せるものには、親族朋友または同人も依止にあらず。（七八〇）

嗣續者は彼が財を持ち去る、人は其の業によりて赴くものなり、死せるものには財は隨ひ行かず、兒も妻も財も國も〔隨ひ行かず〕。（七八一）

財によりて長壽を得ず、富によりて老を滅さず、これ賢者は彼の壽命を少量なり、無常なり、變壞の法なりと稱すればなり。（七八二）

富めるも貧しきも共に〔死の〕觸に觸る、愚なるも賢なるも同じく觸れらる、愚者は愚に打たれて臥し、賢者は〔死の〕觸に觸れて震ふことなし。（七八三）

されば智こそは財に勝りたれ、智によりて〔人は〕此世に於て終末に達す、終末に達せざるよりして愚癡のものは生生邪業を犯す。（七八四）

人は輪廻界に入りて次第に胎に入り、また他の世界に入る、其の少智にして〔而も〕信心あるものは胎に入り、また他の世界に入る。（七八五）

恰も盜賊の現行中捕へられ、己の業によりて、邪法のものは滅さるるが如く、同じく羣衆は來生、他の世界に於て、己の業のために、邪法あるは滅さる。（七八六）

諸欲は美しく、甘く、愛すべく、種種の形色により

て心を攪す、されば大王、我は諸欲の上に患難を見て出家したり。（七八七）

弱齡の靑年も老年も、身體の壞るるや、樹果の落つるが如くなり、大王、我は之をも見て出家せしなり、眞の沙門道こそ勝りたれ。（七八八）

我信心によりて出家し、勝者の敎に入れり、我が出家には失なし、我負債なくして食を受けん。（七八九）

諸欲を見ること、熾火の如く、黃金を〔見ること〕、刃の如く、胎に下るより來る苦と、地獄の大苦とを見、（七九〇）

此の患難を見て我は其の時震驚しき、我は其の時刺されて、諸漏の滅盡に逹せり。（七九一）

我師に奉事し、佛の敎を成就したり、我重擔を卸し、生有の因を滅せり。（七九二）

我、彼の利益のために、在家を出でて、出家得度せしが、今其の利益を成就し、あらゆる結縛を斷じ盡せり。（七九三）

右ラッタバーラ長老

色を見て、愛相を思惟するものは正念を忘失す、染著の心あるものは、〔色を〕感受し、且つ之を愛執して存す。（七九四）

色より生ずる彼が種種の受と貪と害とは增長し、其の心は苦惱に逢ふ、斯の如くして苦を積むものは涅槃に遠ざかれりと稱せらる。（七九五）

聲を聞きて愛相を思惟するものは正念を忘失す、染著の心あるものは〔聲を〕感受し、且つ之を愛執して存す。（七九六）

聲より生ずる彼が種種の受と貪と害とは增長し、其の心は苦惱に逢ふ、斯の如くして苦を積むものは涅槃に遠ざかれりと稱せらる。（七九七）

香を嗅ぎて愛相を思惟するものは正念を忘失す、染著の心あるものは「香を」感受し、且つ之を愛執して存す。（七九八）

香より生ずる彼が種種の受と貪と害とは増長し、其の心は苦惱に逢ふ、斯の如くして苦を積むものは涅槃に遠ざかれりと稱せらる。（七九九）

味を喫して愛相を思惟するものは正念を忘失す、染著の心あるものは「味を」感受し、且つ之を愛執して存す。（八〇〇）

味より生ずる彼が種種の受と貪と害とは増加し、其の心は苦惱を受く、斯の如くして苦を積むものは涅槃に遠ざかれりと稱せらる。（八〇一）

觸に觸れて愛相を思惟するものは正念を忘失す、染著の心あるものは「觸を」感受し、且つ之を愛執して存す。（八〇二）

觸より生ずる彼が種種の受と貪と害とは増加し、其の心は惱害を蒙る、斯の如くして苦を積むものは涅槃に遠ざかれりと稱せらる。（八〇三）

法を知りて愛相を思惟するものは正念を忘失す、染著の心あるものは「法を」感受し、且つ之を愛執て存す。（八〇四）

法より生ずる彼が種種の受と貪と害とは増加し、其の心は惱害に逢ふ、斯の如くして苦を積むものは涅槃に遠ざかれりと稱せらる。（八〇五）

彼は諸の色に染せられず、色を見て正念を失はず、離染の心を以て「色を」感受し、且つ之に愛執せずして存す。（八〇六）

色を見、或はまた受を感ずること彼が如くならば「其の苦は」滅ぜられて積まることなく、斯くて彼は正念にして遊方す、斯くして苦を積むことなきものは

涅槃に近づけりと稱せらる。（八〇七）

彼は諸の聲に染せられず、聲を聞きて正念を失はず、離染の心を以て［聲を］感受し、且つ之に愛執せずして存す。（八〇八）

聲を聞き、或はまた受を感ずること彼が如くならば［其の苦は］減ぜられて積まるることなく、斯くて彼は正念にして遊方す、斯くして苦を積むことなきものは涅槃に近づけりと稱せらる。（八〇九）

彼は諸の香に染せられず、香を嗅ぎて正念を失はず、離染の心を以て［香を］感受し、且つ之に愛執せずして存す。（八一〇）

香を嗅ぎ、或はまた受を感ずること彼が如くならば［其の苦は］減ぜられて積まるゝことなく、斯くて彼は正念にして遊方す、斯くして苦を積むことなきものは涅槃に近づけりと稱せらる。（八一一）

彼は諸の味に染せられず、味を喫して正念を失はず、離染の心を以て［味を］感受し、且つ之を愛執せずして存す。（八一二）

味を喫し、或はまた受を感ずること彼が如くならば［其の苦は］減ぜられて、積まるることなく、斯くて彼は正念にして遊方す、斯くして苦を積むことなきものは涅槃に近づけりと稱せらる。（八一三）

彼は諸の觸に染せられず、觸に觸れて正念を失はず、離染の心を以て［觸を］感受し、且つ之に愛執せずして存す。（八一四）

觸に觸れ、或はまた受を感ずること彼が如くならば［其の苦は］減ぜられて、積まるることなく、斯くて彼は正念にして遊方す、斯くして苦を積むことなきものは涅槃に近づけりと稱せらる。（八一五）

彼は諸の法に染せられず、法を知りて正念を失はず、

離染の心を以て〔法を〕感受し、且つ之に愛執せずして存す。（八一六）

法を知り、或はまた受を感ずること彼が如くならば〔其の苦は〕滅ぜられて積まるることなく、斯くて彼は正念にして遊方す、斯くして苦を積むことなきものは涅槃に近づけりと稱せらる。（八一七）

右マールンキャプッタ長老

圓滿の身、善美にして、生よく、愛すべし、世尊、汝は金色なり、汝は皓白齒なり力用の人なり。（八一八）

生よき人にある相好、此等大人の相は總て汝の身にあり。（八一九）

清明なる眼、大にして端しく、嚴かなる好き顏ありて、沙門團の中に、光を放つこと、恰も太陽の如し。（八二〇）

和貌美く、黄金に似たる膚ある比丘、斯く優れたる色ありて汝沙門となりて何の利益かある。（八二一）

汝は王、轉輪王、四方の主、征服者、閻浮洲の君たるに適せり。（八二二）

刹帝利種、富財の王も汝の附隨者たらん、瞿曇、諸王中の王者、人間の主、王事を領理せよ。」（八二三）

世尊宣はく「セーラ、我は王なり、無上の法王なり、法によりて輪を轉ず、轉ぜられざる輪を。」（八二四）

セーラ言はく「汝瞿曇、正覺者、婆羅門、無上の法王と名乘り、法を以て輪を轉ずと云ふ。（八二五）

誰か尊の軍帥、師の嗣續の弟子なる、誰か此の轉ぜられたる法輪を倣ひて轉ずる。」（八二六）

世尊宣はく「セーラ、我が轉じたる輪、無上の法輪を、如來隨生の舍利弗は倣ひて轉ず。（八二七）

識知すべきものを識知し、修習すべきものを修習し、捨棄すべきものを我は捨棄したり、されば婆羅門、

我は佛にぞある。（八二八）

我に關する疑惑を除け、信ぜよ、婆羅門、正等覺者を常に見ることは有り難し。（八二九）

其の常に世に現ることは有り難し、婆羅門、我はこれ覺者なり、無上の醫者なり。（八三〇）

至高無比にして魔軍を伏するもの、あらゆる敵に克ち、四方懼る所なくして喜ぶ。」（八三一）

セーラ言はく「諸友、具眼者の語る所を聞け、彼は醫師なり、大雄者なり、林間の獅子の如く吼ゆ。（八三二）

至高無比にして魔軍を克服するものを見て誰か信仰せざらん、假令黑族の生ならんとも。（八三三）

(九)我に〔伴はんと〕願ふものは伴へ、また願はざるものは去れ、我は此處に、勝智者の側にありて出家せん。」（八三四）

「尊、若し正徧覺者の此の敎を喜ばば、我等も亦勝智者の側にありて出家せん。」（八三五）

此等三百の婆羅門、合掌して願ふらく「世尊、我等、汝の側にありて梵行を修せん。」（八三六）

「セーラ、現生、卽時に〔果を齎す〕梵行は善く說かれたり、精勤に、修學する人の、此の處にありて出家するは徒爾にあらず」と世尊は宣ひき。（八三七）

「具眼者、世尊、我等は今より先第八日、汝に歸依して、七夜に汝の敎に調御を得たり。（八三八）

汝は佛、汝は師、汝は魔羅に克てる牟尼、汝は(一〇)愛著を破りて、自ら〔生死の流を〕度り、〔更に〕此の羣生を渡す。（八三九）

汝は生の素質を超え、諸漏を盡せり、〔汝は〕取著なく、恐怖畏懼を捨てて、獅子の如し。（八四〇）

此等三百の比丘は掌を合せて立てり、雄尊、足を伸せ、諸龍象、師の〔御足を〕禮せよ。」（八四一）

右セーラ長老

我がために象の首に柔かなる被衣は敷かれ、我はサーリ稲の飯に淨き肉を撒きたるを食ひしが、（八四二）

我今日運よく、根よく、遺穗の鉢に入るを樂む、ゴーダーの兒なるバッチヤは取著なくして禪思す。（八四三）

塵衣の受用者にして、根よく、遺穗の鉢に入るを樂む、ゴーダーの兒なるバッチヤは、取著なくして禪思す。（八四四）

常乞食者にして、根よく、遺穗の鉢に入るを樂む、ゴーダーの兒なる、バッチヤは、取著なくして禪思す。（八四五）

但持三衣者にして、根よく、遺穗の鉢に入るを樂む、ゴーダーの兒なる、バッチヤは、取著なくして禪思す。（八四六）

次第乞食者にして、根よく、遺穗の鉢に入るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッチヤは、取著なくして禪思す。（八四七）

但一座食者にして、根よく、遺穗の鉢に落つるを樂とす、ゴーダーの兒なるバッチヤは取著なくして禪思す。（八四八）

鉢乞食者にして、根よく、遺穗の鉢に入り來るを樂とす、ゴーダーの兒、バッチヤは取著なくして禪思す。（八四九）

不重受食者にして、根よく、遺穗の鉢に入るを樂とす、ゴーダーの兒、バッチヤは、取著なくして禪思す。（八五〇）

阿練若住者にして、根よく、遺穗の鉢に入るを樂とす、ゴーダーの兒、バッチヤは、取著なくして禪思す。（八五一）

樹下住者にして、根氣よく、遺穗の鉢に入り來るを

樂とす、ゴーダーの兒なるバッチャは取著なくして禪思す。（八五二）

露地住者にして、根氣あり、遺穂の鉢に落つるを樂とす、ゴーダーの兒なるバッチャは取著なくして禪思す。（八五三）

冢間住者にして、不屈不撓なり、遺穂の鉢に落つるを樂とす、ゴーダーの兒なるバッチャは取著なくして禪思す。（八五四）

隨處住者にして、根氣強く、遺穂の鉢に入るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッチャは、取著なくして禪思す。（八五五）

常坐者にして、根氣よく、遺穂の鉢に入り來るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッチャは取著なくして禪思す。（八五六）

少欲者にして、根氣よく、遺穂の鉢に入るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッチャは、取著なくして禪思す。（八五七）

知足者にして、根氣強く、遺穂の鉢に落つるを樂とす、ゴーダーの兒なるバッチャは、取著なくして禪思す。（八五八）

遠離者にして、根氣よく、遺穂の鉢に入るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッチャは、取著なくして禪思す。（八五九）

非交遊者にして、精力強く、遺穂の鉢に來るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッチャは、取著なくして、禪思す。（八六〇）

精勤者にして、根氣強く、遺穂の鉢に入り來るを樂とす、ゴーダーの兒なるバッチャは、取著なくして禪思す。（八六一）

價貴く、黄金と蟲脂とを以て造れる鉢を棄て、土製

の鉢を取れり、之我が第二の灌頂なり。(八六二)
先には我高く圓形なる城壁の中に、堅固の望樓ある家に、劍を手にする人に護られ、[而も]恐懼して住せり。(八六三)
我今日運よく恐懼なく、恐怖畏懼を捨て、ゴーダーの兒バッヂャは、森林に入りて禪思す。(八六四)
戒蘊の上に住立して、念と智とを修習し、次第に一切繫結の滅盡に達せり。(八六五)
右カーリ・ゴーダーの兒、バッヂャ長老
沙門、汝は行きつゝ、「我は立住まれり」と云ひ、また我が立住まれるに、「立住まらず」と云ふ、沙門、汝に此の義を問ふ、如何なれば汝は立てるに、我は立てるにあらざるや。(八六六)
アングリマーラ、我は常にあらゆる生類に對し (二)
害意を捨てて立つ、然るを汝は生類に對して自制心なし、されば我は立ち、汝は立たざるなり。(八六七)
久しい哉我が大仙を崇拜したることや。沙門大林に入らせたまへり、我教を含める汝の偈を聞いて千の罪惡を棄てん。(八六八)
斯の如くして、盜賊は、刀と武具とを穴、崖、那落に投じ、盜賊は善逝の御足を禮し、其處にありてぞ佛に出家を願ひたる。(八六九)
佛はまた悲愍の大仙、人天兩界の師、其の時彼に向ひて「來れ、比丘」と宣ひき、之ぞ彼の比丘たることなりける。(八七〇)
人の、先に放逸にして、後に放逸ならざるもの、彼此の世を照すこと、雲を離れたる月の如くなり。(八七一)
人の作したる惡業、善の爲に覆はるれば、彼此の世を照すこと、雲を脱れたる月の如し。(八七二)
若齡の比丘の佛の敎に勤むもの、彼は此の世界を照

すこと、雲を脱れたる月の如くなり。（八七三）

我が敵、法の談を聽け、我が敵、佛の敎に勤しめ、我が敵、法を領納せしむる、此等安靜の人人に交はれ。（八七四）

我が敵、忍辱を談じ、和合を讃する〔人人〕の敎を折折に聽聞し、且つ之に順ひ行へ。（八七五）

斯の如き〔敵は〕必定して、我をも亦他の何人をも害ふことなく、最勝の寂靜に達し、强きをも弱きをも護らん。（八七六）

渠工は水を導き、箭工は箭を矯む、木工は材を曲げ、賢人は己を調ふ。（八七七）

或ものは杖を以て、鉤、又は鞭を以て矯む、我は斯の如き杖と刃とを以てせずして調柔に歸したり。（八七八）

先に我意念ありて〔他を〕害するものたりしに、我が名を「不害」と稱へき、今日我眞實の名を得たり、我は何人をも害ふことなし。（八七九）

我、先には盜賊にして、アングリマーラとして知られき、大水のために流されて、佛に歸依するに至りぬ。（八八〇）

我、先には血染の手にして、アングリマーラと稱せられき、〔我が〕歸投を見よ、生有の因は滅せられたり。（八八一）

苦趣に導くべき斯の種の多の業を作して、業果に觸れられ、負債なくして食を受く。（八八二）

愚にして智劣れる輩は放逸に耽り、智ある人は不放逸を護ること、最勝の珍寶の如くす。（八八三）

怠惰に耽ることなかれ、欲樂の愛著に〔耽ること〕なかれ、精勤にして、禪思あるものは、最上の安樂を獲ん。（八八四）

分別せる諸法の中に於て、(三)最勝なるものに我は遂

しぬ。これ我善く到れるなり、惡く到れるにあらず、〔而して〕我が之を度量せるや邪ならざりき。（八八五）

我三明に逮達し、佛の敎を成就したり、これ我善く到れるなり、〔而して〕我が之を度量せるや、邪にあらず。（八八六）

林中に、若しは樹下に、山間に、若しは窟中に、我は其の時悸えたる心を以て、處處にぞ立ちつる。（八八七）

我安樂に臥し、立ち、安樂に生活を營みて、魔羅の羂に懸らず、嗚呼、我は師の慈愍を蒙れり。（八八八）

我先には父母兩系共に高き婆羅門族の生なりき、今は我善逝、法王、師の兒なり。（八八九）

愛欲を離れ、取著あることなく、〔六根〕門を護り、よく自ら制し、邪惡の根本を斷ちて、我は漏盡に達せり。（八九〇）

我師に奉侍し、佛の敎を成就せり、我重擔を卸し、生有の因を滅せり。（八九一）

右アングリマーラ長老

父母、姉妹、親族を捨て、五種の欲を捨てて、アヌルッダは禪思す。（八九二）

舞踏、唱歌に伴はれ、鐃鉢の〔響に連れて〕醒めしが、魔羅の境界を樂みし我は、之によりて〔三〕清淨を獲ることなかりき。（八九三）

之をも超えて佛の敎を樂とし、あらゆる暴流を超えて、アヌルッダは禪思す。（八九四）

色聲香味と愛すべき觸と、此等をも亦超越して、アヌルッダは禪思す。（八九五）

牟尼は受食を終り、單獨にして第二人者なく、無漏なるアヌルッダは塵衣を尋ぬ。（八九六）

牟尼は塵衣を選び、取り、洗ひ、染め、被著したり、有慧無漏のアヌルッダは。（八九七）

大欲あり、不知足、輕噪にして交際を好むもの、此等の邪惡にして染汚なる諸法は、斯の如き人の〔法〕なり。（八九八）

正念、少欲、知足、非破壞的にして閑居を樂み、智慧ありて精勤なり。（八九九）

此等善良にして、菩提の支分たる諸法は、斯の如き人の法にして、彼はまた無漏なりと、斯く大仙は宣へり。（九〇〇）

我が思惟する所を知りて、世の無上なる師は心所造の身を以て、神通によりて、近きたまひき。（九〇一）

我が思惟せし所、之よりも上なるを說きたまひ、亂想を解くを樂みたまへる佛は、非亂想を說きたまひき。（九〇二）

我其の法を知りて、敎を樂みて住しき、三明に通達し、佛の敎を成就したり。（九〇三）

五十五年の間、我は自ら制せ、〔常坐〕不臥者、二十五年の間、我は自ら制して惛惰を泯せり。（九〇四）

斯の如く心安立せるものには入息出息なし、無欲なる具眼者は寂靜によりて圓寂に歸せん。（九〇五）

毅然たる心を以て、受を降伏しき、心の解脫は燈火の滅するが如くなり。（九〇六）

今や此等の觸を第六とせるものは牟尼の最後〔身〕なり、正覺者入滅したまはば、他の法〔生ずること〕なからん。（九〇七）

今や天界に於て再び有網の住居なく、生〔死〕輪廻は斷に盡され、今や再生あるなし。（九〇八）

彼の比丘は、大梵天王の如く、一瞬時間に世間を見ること一千方、諸種の神通力を具へ、〔人天〕の生死と其の時機とを見る、天子よ。（九〇九）

（一四）我昔（一五）アンナバーラと呼べる、貧しき食物運搬

者にして、擧高き沙門（一六）ウパリッタに供養を爲しき。（九一〇）

我釋氏族に生れ、アヌルッダとして知られたり、舞踏唱歌に伴はれ、鐃鉢の音に連れて目覺めき。（九一一）

其より正覺者、怖畏なき師を見奉り、信心を起し、出家得度しき。（九一二）

我が往昔住みし所のまゝに、宿住を知り、帝釋天の生によりて三十三天の中に立てり。（九一三）

七たび人主として、國事を領理し、四方の主、勝利者、閻浮洲の君として刀杖を用ひず、法を以て〔民を〕訓誡しき。（九一四）

之より七〔輪廻〕、之より七〔輪廻〕と、十四の輪廻を、其の時我は天上界に立ちて知識しぬ。（九一五）

五分の定に於て、寂靜、（一七）單一の修習に於て、我輕安を獲、我が天眼を淨うしぬ。（九一六）

群生の生死、去來を知り、五分の定に立ちて、〔群生の〕斯くなり、斯くならざるをも〔知りき〕。（九一七）

我佛に奉事し、佛の敎を成就したり、我重擔を卸し、生有の因を滅せり。（九一八）

伐地族のヹールヷ村にて命盡き、下の竹林中に於て我は無漏にして入滅せん。（九一九）

右アヌルッダ長老

花咲ける大林中に閑居して〔心を〕一境にし、坐して禪思せる沙門の思は下の如くなりき、（九二〇）

「世尊・人中最上者の世に存したまふや、比丘の威儀は異らざりしが、今や異れるが如し。（九二一）

如何なるものにも滿足して、之もて寒風を防ぎ陰所を蔽ふに適度の量を受用しぬ。（九二二）

美味なる、或は不味なる、少き、或は多きを食らず、惑はず、唯生命を繫がんがために受用しぬ。（九二三）

汝の漏結盡くるや、生活の要具、藥物、更に〔他の〕
物品に對して、強き欲念あらざりき。（九二四）

林中に、樹下に、岩窟の間に、幽靜の情を長じつつ、
其を目的として住しき。（九二五）

謙遜に、節儉に、溫柔にして、心剛愎ならず、優美にし
て饒舌ならず、〔自他の〕利を思ふに心專なり。（九二六）

其より、行く所、食ふ所、受用する所、愛すべく、
威儀は宛然滑かなる油河の如し。（九二七）

あらゆる漏結を盡したる大禪定家、大慈利者、斯る長
老は今や涅槃に入れり、斯の如きは今や少し。（九二八）

善法と智慧との消盡によりて、一切善勝の方を具備
せる勝者の敎は滅さる。（九二九）

邪法と、塵勞の時季と、遠離顯現と、正法特異の時
季と、（九三〇）

此等塵勞は增加して衆多の人に入り、愚人を弄ぶこ
と、猶ほ羅刹の狂を〔弄ぶ〕が如く見ゆ。（九三一）

彼等は塵勞のために、彼此〔の塵勞〕のために敗られ、
自ら攝り、或は公告せる塵勞物の上に奔馳す。（九三二）

彼等正法を捨てて互に相諍はん、邪見に隨ひて之を
最上なりと思はん。（九三三）

彼等財と兒と妻とを捨て家を去りたるもの、一匙の
量の乞食のためにも、爲すまじきとを行はん。（九三四）

腹に滿つるまで食ひて、（一八）背を下にして臥し、目覺
めては談話・師の禁じたまひし談話をなす。（九三五）

總て技工の術を尊重して學び、內心安靜ならずして、
沙門道を求むと云ひて徒坐す。（九三六）

土、油、洗粉、水、座牀、飮食等在家人の捧ぐるものは
之を求むること多量なり。（九三七）

楊枝と（一九）カピッタ果と花の食ふべきものと、豐富な
る搏食と、菴羅果と阿摩勒果と。（九三八）

薬物の上に於ては醫者の如く、爲すべき・爲すまじき事の上には俗人の如く、莊飾には遊女の如く、權威には刹帝利種の如し。（九三九）

彼等は二心ある者、詐欺者、僞證者、瞞著者にして、多の手段を以て財施を受けん。（九四〇）

計略に適せる手段や意向に奔走し、生活のために方便を用ひて多の財を引き寄す。（九四一）

集會を起すには業のためにして法のためにせず、他人のために法を說いては利得のためにして法義のためにせず。（九四二）

教團の外にありて教團の利得を爭ひ、他人の所得を受用し、無慚にして愧ぢず。（九四三）

或は頭を剃り、僧伽梨衣を纏へるものは、斯の如く耽著するなく、利得名聞に放心して、名譽をのみぞ求むる。（九四四）

斯くして種種の事去れるに當り、今や先の如くに之を爲すことは容易ならず、觸れざるものに觸れ、既に觸れたるものを護るとは〔又容易ならず〕。（九四五）

譬へば正念を現前せしめ、履なくして荆棘の地を行くが如し、牟尼は斯の如く行履すべし。（九四六）

往昔の行者を思ひ、彼等の梵行を憶念して、假令今日最後なりと雖も、無滅の道に觸れよ。」（九四七）

沙羅樹林に於いて、之を語りて、諸根を修練せる沙門、婆羅門、〔大〕仙、再生を斷盡せる人は、圓寂に歸せり。（九四八）

【一】長老或時獨り行きて盜賊の群に捕へられ、泰然自若たりしより賊の首領偈を以て長老に問へり。【二】以下七一九偈迄アヤムッタ長老の答辯なり。【三】Uttamadhammata 最上法の性質、情態、又は最上の法たることの意。【四】Vata 上三四二偈の註を見よ。【五】巴利原典出版協會の版本には atho sīdati saññuttaṁ とあれど之にては意義通じ難きによりて同版本の脚註によりて adhosidan-saññuttaṁ を取れり、下に沈むと關聯せる、沈下の伴ふてき。

[六]Vepacitti 毗摩質多羅。[七]魚餉。[八]dve ca jaññasā-syuta 二重の十五と混ずるの意、之は二十の身見と十の邪見とを指すといふ。[九]己に隨へる婆羅門等に對ひて云ふ。[一〇]anu-saya 惰眠。[一一]法句經一四二偈註。[一二][一三]涅槃。[一四]此の二偈はアヌルッダの前生物語の如し。[一五]Annabhāra 食荷 食物を荷物として運搬する人の意か。[一六]Uparittha 上に立てる人の意、固有名詞と見ざるも、意通ぜざるにあらず、リス・デビッ夫人の譯に隨ひ兩者とも固有名詞と見たり。漢譯中阿含經十三卷說本經に「我憶昔貧窮、唯仰捃拾活、歸已供沙門、無患最上德、因此生釋種、名曰阿那律」といへる、併せ見るべし。[一七]ekodibhāvita。[一八]背を下にし、仰向に臥するは稚兒の法にして比丘は右脇を下にして臥するが法なり。[一九]kapittha學名Feronia elephantum.

三十頌品第十七

心を莊嚴し、自ら攝せる、多の愛すべき[比丘衆]を見て、パンダラサ姓の仙人は、ブッサと呼べる[人]に問ひて云へり、 (九四九)

「未來に於て、如何なる欲望の[人]、如何なる意志の[人]、如何なる擧動の[人]かある、問はれて汝、我に之を語れ。」 (九五〇)

「パンダラサと呼ぶ仙人、我が言ふ所を聽け、好く之を思念せよ、我[汝がために]未來を語らん。 (九五一)

未來に於ては、忿り又は恨み、[己の惡を]覆ひ、剛腹にして詐僞心あり、嫉妬心あり雜言を吐くもの多からん。 (九五二)

[己れ]法を識知せりと思ひ、[而も]深海の邊に立てるものは、法を輕んじて重からず、且つ互に相恭敬することなし。 (九五三)

未來世に於て世に多の患難起らん、劣智慧[の輩]は善く說かれたる此の法を汙さん。 (九五四)

(一)會議に際しては、假令德卑くとも、大膽に陳述する饒舌無學のもの、優勢の人たらん。 (九五五)

會議に際しては假令德具はれりとも、正義に隨ひて

陳述する、彼の慚恥心あり、〔而して〕欲念なきものは劣勢ならん。（九五六）

未來世に於ては劣智慧〔の輩〕金及び銀、田地、宅地、山羊、羊、奴婢とを愛好せん。（九五七）

愚にして怒り易く、戒に於て心を安定せず、虚誇にして爭闘を樂とする獸〔の如き輩〕横行せん。（九五八）

又輕浮にして、碧色の衣服を纏へるものあらん、詐欺心あり、頑固に、而も巧辯にして交際に巧なるもの、貴人の如く濶歩せん。（九五九）

油を以て、髪を滑かにし、眼に（一）安繕那藥を〔塗りたる〕輕噪〔の輩〕は、牙色の衣服を纏うて、街路を行かん。（九六〇）

善く染めたる阿羅漢の（二）幢旗は解脱せる人の嫌はざる所なり、〔然るに〕白衣に戀著せる輩は〔此の〕六袈裟衣を嫌はん。（九六一）

利得を望み、怠惰にして、精勤乏しく、邊土の林間を厭ひて村落の中に住止せん。（九六二）

常に邪なる生活を樂みて利益を得んものに從はん、〔彼の〕自制心なくして〔他の行に〕倣ふものは。（九六三）

利益を得ざるものは恭敬すべからざらん、假令好愛すべき賢者なりとも、〔利を得ざる〕時は人之に隨事せざらん。（九六四）

己の（三）幢旗を賤みて蠻民の染めたる紅きを〔著け〕、或は外道輩の（四）白き幢旗を護持せん。（九六五）

其の時は又た彼等（五）袈裟に對して、尊敬を拂はざるべく、比丘も亦た袈裟に對して省察することなからん。（九六六）

苦のために打勝たれ、矢を以て貫かれて痛み惱める象の省慮は大恐怖なりき、不可思議なりき（九六七）

其の時六牙の象は深紅なる應供者の幢旗を見、卽時

に意味深き偈を唱へけり、

「人にして煩惱なきものこそ、黃色の衣服を著くべけれ、調御なく實語なきもの、彼に黃衣は應はしからず。（九六九）

既に煩惱を捨て、戒に於て善く安住し、調御と實語とある人、彼にこそ黃衣は應はしからめ。（九七〇）

破戒劣智邪曲にして、諸欲に放縱にし、心散亂して憤勵乏しきもの、斯の如き人には、黃衣は應はしからず。（九七一）

人にして戒を具へ、貪欲を離れ、安定に住し、心思惟潔白なるもの、彼にこそ黃衣は適すべけれ。（九七二）

輕噪、浮誇の愚人にして戒なきもの、彼にこそ白衣は適せめ、〔彼〕黃衣を何にかせん。（九七三）

若しは比丘、若しは比丘尼の心汚れ、恭敬の念なきもの、未來世に於て、此れ等慈悲心ある人を抑壓せん。（九七四）

愚者は長老によりて衣服を護持することを敎へらるとも、劣智邪曲にして、諸欲を縱にするものは之を聽くことなからん。（九七五）

斯の如くして敎を受けたる此等愚者は互に相敬ふことなく、恰も（七）驛馬の馭者に〔對する〕が如く、師〔の言〕に意を用ふることなけん。（九七六）

最後の時至れる未來世に於ては、比丘及び比丘尼の行跡は斯の如くならん。（九七七）

此の未來大恐怖の來るに先ち、溫柔に友愛にして相恭敬せよ。（九七八）

慈心あり悲愍あり、戒に於て攝し、精進、熱烈にして常に堅く奮迅せよ。（九七九）

放逸を恐るべきものと見、精勤を安隱なりと〔見て〕、八支の道を修習せよ、甘露の道に觸れん。」（九八〇）

右ブッサ長老

其の力に隨ひて行ひ念ひて、正念を失はず、其の思惟行によりて、放逸ならず、內に樂み、心善定に住し、單り滿足せるもの、これをこそ比丘とは云ふべけれ。（九八一）

濕りたる又は乾きたるを食ひて、［而も］甚く飽くことなく、腹滿たず、飲食量あり、正念ありて、比丘は遊行せよ。（九八二）

四五片の飯をも喫するなくして、水を飲まば、これ專心なる比丘の樂住には足る。（九八三）

此［の敎］に於て、求むることを得べき適度の衣服を受く、これ專心なる比丘の樂住には足る。（九八四）

跏趺を組みて坐せるものの膝に雨降ることなし、これ專心なる比丘の樂住には足る。（九八五）

樂を苦なりと見、苦を樂なりと見、兩者の中間に存することなくば、世に誰［人］によりてか、何かあらんや。（九八六）

我に邪欲なく、怠惰なく、我精勤乏しきことなく、寡聞ならず、(へ)不行跡なるなくば、世に誰［人］によりてか、何かあらんや。（九八七）

博聞にして、而も智慧あり、諸の戒法に於いて善く定に住し、念を心止息に專にするものは、頭上にも立て。（九八八）

亂想を專とし、亂想を喜とする獸［の如きもの］、彼は無上の安隱、涅槃を得ることなし。（九八九）

亂想を棄て、亂想なき道に樂むもの、彼は無上の安隱、涅槃を獲得す。（九九〇）

村里又は森林に於て、窪地又は陸地に於て、阿羅漢の住止する處、其の地は樂むべき［處］なり。（九九一）

森林は樂むべし、凡夫は此處に樂むことなけれど、

貪欲を離れたる〔人〕は樂む、彼等は諸欲を求むるものにあらず。（九九二）

〔己の〕過を指示し、〔失を〕責むる智者、斯る賢者を見ば、〔寶の〕在所を告ぐる人の如くにして事へよ、斯る人に事ふるものには是ありて非あることなし。（九九三）

誡めよ、敎へよ、不相應の事より遠ざからしめよ、彼善人には愛せられ、惡人には憎まれん。（九九四）

具眼の佛世尊は、無智〔なる我が〕爲に法を說かせたまひぬ、法の說かるるや、〔我〕欲心を抱きて耳を欹てぬ。（九九五）

我が聞きしことは徒勞ならざりき、我解脫を得、無漏〔の身〕となり、〔而も〕宿住〔通と〕、天眼〔通と〕、（九九六）

心差別神〔通と〕、死〔通と〕、生〔通と〕、耳界淸淨〔通と〕は我が誓願にあらざりき。（九九七）

頭を剃り、僧伽梨衣を纏ひ、智慧第一の長老なる優波帝須は樹下によりてぞ禪思する。（九九八）

非尋を具有したる彼最尊覺者の弟子は直に尊き寂默を獲。（九九九）

猶ほ巖石の山の、堅く立ちて動かざるが如く、等しく比丘は、愚癡を滅して、動ぜざること宛然山に似たり。（一〇〇〇）

執著なくして常に淸淨を求むるものには毫端の邪業も虛空の大にぞ見ゆる。（一〇〇一）

我は死をも歡ばじ、我は生をも歡ばじ、知覺あり正念ありて、此の身を放棄せん。（一〇〇二）

我は死をも歡ばじ、我は生をも歡ばじ、務を終りたる奴僕の如く、時の至るを待つ。（一〇〇三）

此の死は兩處ともに之あり、後にも先にも不死あることなし、〔されば〕修せよ、失ふことなかれ、瞬時を〔空〕過せしむることなかれ。（一〇〇四）

邊地にある都城を内外より防護せるが如く、等しく自心を防護して瞬時も〔空〕過せしむることなかれ、これ瞬時を〔空〕過せしむるものは（九）泥犂に墮ちて憂ふべきが故なり。 （一〇〇五）

寂靜に達し、止息に歸し、（一〇）神呪を語り、輕噪ならず、邪惡の法を拂ふこと、風の樹葉を〔拂ふ〕が如くす。 （一〇〇六）

寂靜に達し、止息に歸し、神呪をかたり、輕噪ならず、邪惡の法を拔くこと、風の樹葉を〔拔く〕が如くしぬ。 （一〇〇七）

寂靜に達し、住著を去り、淸澄にして汚濁なく、戒善く、智慧ありて、苦惱を盡すものとなれ。 （一〇〇八）

在家の人にも、或は又出家の人にも、信賴すべからざるものあり、〔初〕善良なりとも不良となるあり、不良にして再び善良となるあり。 （一〇〇九）

貪欲、瞋恚、（一一）踈懶、（一二）輕噪、疑惑、此等の五は比丘の心が汚すものなり。 （一〇一〇）

精勤にして住し、〔他の〕恭敬を受くるものは、〔他の〕不敬に逢ふとも、等しく其の定を動ずることなし。 （一〇一一）

禪思あり、堪忍あり、微細の見觀あり、取〔蘊〕を滅すを喜とするもの、彼を善人と呼ばん。 （一〇一二）

大海、大地、山又火も、師の勝れたる解脫には譬とするに足らず。 （一〇一三）

〔佛に〕倣うて〔法〕輪を轉じ、大智あり安定ある（一三）長老は地水火〔の如く〕にして染せられず、汚さるることなし。 （一〇一四）

智慧波羅蜜に達したる大智者、大牟尼は愚なる〔人が如くに〕して愚ならず、常に淸涼にして遊行す。（一〇一五）

我（一四）師に奉事し、佛の敎を成じ、重き荷を卸し、再

生の因を除けり。（一〇一六）

精勤によりて〔道を〕成ぜよ、之我が教誡なり、今我圓寂に入らん、我は隨處に解脱を得たり。（一〇一七）

右舍利弗長老

（一五）識者は兩舌を吐く人、怒る人、〔己の惡を〕覆ふ人、〔他の〕破滅を歡ぶ人と交を結ぶべからず、惡人と合會するは禍なり。（一〇一八）

識者は須らく信心ある人、好愛すべき人、智慧ある人博聞の人と交を結ぶべきなり、善人と合會するは幸なり。（一〇一九）

飾りたる像、瘡腫の塊、病を抱き、多の思惟を有てる積集の身を見よ、之に確固なく、住立なし。（一〇二〇）

摩尼珠と耳環とを以て飾り、骨と皮とを以て組みたる色身を見よ、衣服によりてぞ美しき。（同）

（一六）多聞にして、演說巧なる佛の侍者、（一七）瞿曇は擔を卸し、結を離れて〔己の〕臥處を設く。（一〇二一）

煩惱を盡し、結を離れ、著を超えて清涼となり、生死の彼岸に到りて最後身を持つ。（一〇二二）

日の親なる佛の〔說き給ひし〕法の住止する處、〔此の〕涅槃に達るべき道の上にぞ此の瞿曇は立てるなり。（一〇二三）

佛より得たる〔法門は〕八萬二千にして、比丘より得たる〔法門は〕二千なり、此等八萬四千の法門〔を我は〕護持す。（一〇二四）

此の寡聞の男は老いること牛の如し、彼の肉は太れども、彼の智慧は加はることなし。（一〇二五）

博聞の〔其の〕所聞を以て、寡聞の人を輕視するは、恰も盲者の燈火を携ふるが如し、我は然くこれを了解す。（一〇二六）

博聞の人に敬事せよ、聞きし所は喪はざれ、之梵行

の根なり、されば持法者たれ。（一〇二七）
〔一部を聞いて〕、始終を知り、義理を知り、詞句に熟通するものは正しく法を學び、義理を觀る。（一〇二八）
堪忍によりて願樂生じ、努力して之を測る、彼の内心善定に安住せるものは時に隨ひて奮努す。（一〇二九）
博聞にして法を護持し、智慧を有し法を識らんことを望める佛弟子、此の斯の如き人に事へよ。（一〇三〇）
彼の博聞なる持法者は、大仙の〔寶〕藏を保護するものなり、博聞の人は、あらゆる世界の敬ふべき眼目なり。（一〇三一）
法を遊園とし、法を樂み、法を思議し、法を憶念する比丘は正法より退墮することなし。（一〇三二）
身〔の勞苦を〕慳むこと甚だしく、命は〔時時に〕衰ふるに、奮起することなく、肉身の安樂を貪ぼるものに、沙門の樂何處よりか來らん。（一〇三三）

（一八）諸方〔我に〕分明ならず諸法我に了解せられず、良友〔世を〕去りて宛然黑闇の如くなり。（一〇三四）
朋友失せ亡び、師過ぎ去れるものには身念の如き、斯の如き〔良〕友あるなし。（一〇三五）
古きものは世を去り、新きものは我に和せず、我今日獨禪思すること雨時に巣籠りせる鳥の如し。（一〇三六）
（一九）諸國より來り、〔法を〕聽かんとする、衆多のものの〔我を〕見るを遮らざれ、見よ、これ我が時到れるなり。（一〇三七）
（二〇）諸國より來れる衆多のものに、師は〔師を〕見奉ることを許したまひ、具眼者は〔これを〕遮りたまはざるなり。（一〇三八）
二十五年の間、有學者たりし我に貪欲の想起らざりき、法の善き性を見よ。（一〇三九）
二十五年の間、有學者たりし我に瞋恚の想起らざり

き、法の善き性を見よ。(一〇四〇)
二十五年の間、我慈悲身業を以て、世尊に隨侍し奉ること、恰も〔體を〕離れざる影の如くなりき。(一〇四一)
二十五年の間、我慈語業を以て、世尊に隨侍し奉ること、恰も〔體を〕離れざる影の如くなりき。(一〇四二)
二十五年の間、我慈意業を以て、世尊に隨侍し奉ること、恰も〔體を〕離れざる影の如くなりき。(一〇四三)
佛の經行したまへるには後より隨ひ經行し、法を說きたまへば我に智慧生ぜり。(一〇四四)
我所作未だ辨ぜず、有學にして、心意未だ熟せず、而も我等を慈愍したまひし師の圓寂に〔逢ふ〕。(一〇四五)
あらゆる人に勝れ給ひし正遍智者の圓寂に歸し給ふや、其の時恐怖ありき、其の時身毛卓竪しき。(一〇四六)
「(一三)多聞者、持法者、大仙の〔寶〕藏を護る人、一切世間の眼目たる阿難陀〔尊〕は圓寂に入れり。(一〇四七)
多聞者、持法者、大仙の〔寶〕藏を護る人、一切世間の眼目にして、暗中に黑闇を拂ふ〔人〕なり。(一〇四八)
行處あり、正念あり、堅固ある仙士、正法の支持者、阿難陀長老は寶の源なり。」(一〇四九)
「(一四)我師に奉事し、〔我〕佛の教を成ぜり、〔我〕重擔を卸し、再生の因を除けり」(一〇五〇)

【一】saṅghambhi とあり、僧伽の中にありての意とも解せられざるに非ず、今はリス・デビツ夫人の譯に倣ふ。【二】añjana 安闍那とも音譯す、黑色の塗藥にして眼瞼に塗り以て黑くしたり。【三】黃色の法衣、即ち袈裟をいふ。【四】九六一偈の註を見よ。【五】白衣をいふ。【六】kāsāva 又は kāsāya 袈裟、袈裟耶、迦羅沙曳、もと赤黃色、又は黃色の意なりしが轉じて此等の色に染めて作りたる出家の法衣をも袈裟と稱するに至れり。【七】khaluṅka 最も適切に直譯すれば荒々しく走る馬と云ふべし。【八】pācaro の形を取れり、anādara を取らば不注意なり。【九】niraya 惡趣。【一〇】二偈註參照。【一一】thīnamiddha 昏沈、睡眠の二。【一二】uddhacca 掉舉、調戲、掉悔等の譯あり。【一三】舍利弗長老。【一四】佛を指す。

【二五】以下二偈は阿難陀の提婆達多に黨せし者を誡めたるなり。【二六】以下兩偈は阿難陀の開悟の時唱へし偈。【二七】阿難陀自身を指す。【二八】舍利弗の入寂を聞いて。【二九】世尊の其の侍者たる阿難陀を誡め給ひし偈。【三〇】阿難陀の之に就て述べし偈。【三一】以下三偈は第一結集の時集りし比丘等の阿難陀尊を讃歎して唱へしものなり。【三二】之は長老入滅の時自ら唱へし偈。

四十頌品第十八

(一)羣集の長者となりて遊行することなかれ、心亂れ、定得難からん、衆人の集るは苦なりと見て羣集を喜ぶこと莫れ。（一〇五一）

牟尼よ、俗家に入ることなかれ、心亂れ、定得難からん、彼の元氣旺にして諸味を貪るに切なるものは、安樂を與ふる福利を捨つ。（一〇五二）

是れ〔昔人〕は俗家の此の禮拜供養は、之を泥土なりと知りたればなり、細き箭は之を拔くこと難く、惡人の尊敬は之を擯くること難し。（一〇五三）

(二)〔山間の〕坐臥處を下り、我は乞食のために都城に入りぬ、癩人の食を取れるを〔見〕、我は恭しく之に近きぬ。（一〇五四）

彼は腐り果てたる手をもつて、我に其の食を薦めぬ、食を〔我が鉢に〕投ずるや、指も亦た其處に壞れ落ちぬ。（一〇五五）

井に倚れて我は其の食を食ひぬ、食ひつつありても、食ひ終りても、我に厭嫌の念起らざりき。（一〇五六）

(三)施食の來るに隨ひて之を食とし、牛溲を藥とし、樹下を坐臥とし、補綴衣を衣服とす、此等を受用するもの、彼こそは四方の人なれ。（一〇五七）

(四)山を上りながら命を喪ふものある所を、彼の佛の嗣續者たる迦葉は知覺あり正念あり、神通力を以て、毅然として上り行く。（一〇五八）

迦葉は乞食より歸り、岩山を上りて、取著なく、怖畏を捨てて禪思す。（一〇五九）

迦葉は乞食より歸り、岩山を上りて、取著なく、燒かるるものの中に於て清涼にして禪思す。（一〇六〇）

迦葉は乞食より歸り、岩山を上りて、取著なく、(五)爲すべきを爲し終り、(六)煩惱なくして禪思す。（一〇六一）

カレーリの蔓草に掩はれて、愛すべく、樂むべく、象聲の〔響く處〕、此等岩山は我をして娛ましむ。（一〇六二）

碧雲の色ありて美しく、冷にして清き水を湛へ、(七)インダゴーパカ蟲に掩はるる、此等岩山は我をして娛ましむ。（一〇六三）

碧雲の峯に似、樓閣の秀でたる頂に譬ふべく、象聲〔響き渡りて〕、樂むべき此等岩山は我をして娛ましむ。（一〇六四）

雨降り注ぎたる、樂むべき高臺、諸仙の往來する山地、(八)冠ある鳥の聲繁き處、此等岩山は我をして娛ましむ。（一〇六五）

專心正念にして、靜慮を凝さんとする我には〔之にて〕足る、福利を求め、專心なる比丘の我には足る。（一〇六六）

安樂を求め、專心なる比丘の我には足る、觀行を求め、專心なる斯の我には〔之にて〕足る。（一〇六七）

烏麻花〔の衣〕を著け、雲に覆はれたる虛空の如く、種種の鳥類〔此處に〕羣れり、此等岩山は我を樂ましむ。（一〇六八）

〔此處には〕在家の人は集らず、獸羣悠遊し、種種の鳥類羣集せり、此等岩山は我を樂ましむ。（一〇六九）

淸みたる水あり、大なる磐石あり、黑面猿と鹿と羣り、水〔草〕(九)セーヷラは〔之を〕覆へり、此等岩山は我を樂ましむ。（一〇七〇）

（一〇）五種の樂器を以てしては、心を一境にし、正しく法を見る人の〔得る〕が如き、斯の如き喜悅我にあることなし。（一〇七一）

多の業を作すことなかれ、人人を遠けよ、（一一）〔他に模し、又は他と競はんと〕努むることなかれ、彼の元氣旺にして切に諸味を求むるものは、安樂を與ふる福利を捨つ。（一〇七二）

多の業を作すことなかれ、此の非利を與ふるものを遠ざけよ、身は困み疲る、彼は苦み惱みて（一二）止息を得ることなし。（一〇七三）

（一三）彼、唇を動したるのみにては、自己を見ることなく、而も（一四）首を強くして徘徊し、「我は優れり」と思ふ。（一〇七四）

愚者は劣れる身にして、己は優れりと思ふ、識者は此の強頑の心ある人を稱揚せず。（一〇七五）

或は「我は優れり」と、或は更に「我は優れるにあらず」と、「我は劣れり、又は等し」と、〔智者は〕憍慢の中に動ずることなし。（一〇七六）

智慧あり、眞實を談り、戒律の上に安定を得、心の止息に達したるもの、彼をも亦智者は稱揚せん。（一〇七七）

同じく〔梵行を修する〕者の中に、尊敬を得ることなく、正法より、遠ざかること空と地との如し。（一〇七八）

梵行を增長し、常に正しく慚愧の念を存するもの、彼等の再生は斷じ盡されたり。（一〇七九）

輕躁にして心定まらざる比丘は、假令補綴の衣を纏ふと雖も、猶ほ猿の獅皮〔を纏へる〕が如く、彼之によりて美なることなし。（一〇八〇）

輕躁ならずして心定まり、愼重にして、諸根を攝したるものは、美しきこと猶山窟中の獅獸の如し。（一〇八一）

此等許多の天子、神通力あり、名譽あるもの、十千數

の天子、總て此等は梵身〔天〕に屬す。（一〇八二）

賢にして大禪慮あり、善く定に住せる（一五）法將軍、舍利弗〔尊〕を〔彼等は〕禮拜し合掌して立つ。（一〇八三）

「人間中の生よきもの、汝に歸命す、人間の最上なるもの、汝に歸命す、汝の禪思する所、我等は其〔の如何なるか〕を知らず。（一〇八四）

諸佛各各の行處は實に深遠にして、思議せられず、我等假令毛端を裂くもの集りたらんとも、〔之を〕知らず。」（一〇八五）

斯の如く此の恭敬の德ある舍利弗〔尊〕の、天子の羣に恭敬せらるるを見て、刧賓那は笑を漏しぬ。（一〇八六）

佛刹田を盡し、大牟尼〔世尊〕を除き、頭陀の德に於ては我優れり、我に等しきものなし。（一〇八七）

我師に奉事し、〔我〕佛の敎を成ぜり、〔我〕重擔を卸し、再生の因を除きたり。（一〇八八）

衣服にも、臥榻にも、飲食にも染せられず、瞿曇は不可測量にして水のために汚されざる蓮華の如く、意出離に傾き、三界を離脫せり。（一〇八九）

彼大牟尼は念住を頸とし、信仰を手とし、大智者は智慧を頭とし、常に寂滅を得て遊方す。（一〇九〇）

右大迦葉長老

【一】下の三偈は大迦葉長老の比丘の群集に混じ、在家に往來するを見て唱へしものなり。【二】以下四種の要具に就て比丘を誡む。【三】piṇḍa 摶食。【四】日日の登山に就て逃ぶ。【五】所作已辨。【六】無漏。【七】一三偈註を見よ。【八】孔雀。【九】sevala學名 vallisneria 若婆羅(?.)。【一〇】三九八偈註參照。【一一】リス・デビッ夫人の譯によりて意を補ひたり。【一二】samatha 舍摩他、止、止息、寂靜、能滅、能調。【一三】直譯すれば唇を打ちたるだけにての意、唯反復讀誦するのみなるを云ふ、之のみにては人は自己の實情を悟ることなし。【一四】傲慢にして首を屈することなし。【一五】dhammasenāpati 舍利弗の一稱號なり。

五十頌品第十九

我あらゆる生有を無常と觀じつつ、山窟の中に第二人者なく唯獨、住すること何時か之あらん、之我に何時か來らんや。（一〇九二）

我破れたる衣服を纏へる牟尼〔として〕、黄衣を著け、我意なく、慾念なく、貪と瞋と同じく癡とを盡し、安樂にして、(一)山坂に入りて住すること、何時か之あらん。（一〇九二）

無常にして、殺と病との據所たり、死と老とに惱まさるる此の身を觀察しつつ、怖畏心なくして、獨り林間に住すること、何時かこれあらん、これ何時か來らんや。（一〇九三）

我智慧を以て造れる銳き刀を取りて、怖畏を生じ、苦惱を齎す渴愛の蔓を其の種種の附生物〔と共に〕、斷ち切りて住すること何時か之あらん、之亦何時か來らんや。（一〇九四）

我智慧を以て造り、火熱熾なる諸仙の劒を急ぎ取り、獅子座の上にて魔王を其の軍勢と共に敗らんこと何時か之あらん、之何時か來らんや。（一〇九五）

我善良の輩、法を尊ぶこと、斯の如くなる人人の間に交はり、如實に〔諸法を〕觀、諸根に勝てるものの長者たること、何時か之あらん、これ何時か來らんや。（一〇九六）

我が山廓中に〔入りて〕己利を〔念ぜるを〕煉惱、飢渴、風熱、蟲蛇の惱まさざること何時か之あらん、之何時か來らんや。（一〇九七）

大仙の知得し給ひて、見ること難き四種の諦理を、〔我〕己を安定し、正念を喪はず、智慧を以て、之に達せんこと何時か之あらん、之何時か來らんや。（一〇九八）

無量の色聲香味と可觸と法とを、熱氣あり、(三)止を有する我、智慧を以て之を見んこと、何時か之あらん、

之何時か來らんや。（一〇九九）

麤惡の語を以て談ぜらるるとも、之を原として惑ふことなく、又た稱讃せらるるとも、之を原として踊躍せざらんこと、何時か之あらん、これ何時か來らんや。（一一〇〇）

木と、草と、蔓と、此等の諸蘊と、(三)無量の法と、內外共に同じく秤量せんこと何時か之あらん、之何時か我に來らんや。（一一〇一）

衣服を著けて森林の中に、仙士の踏める道を行く我に、雨季の雲の新なる水を以て降り注がんこと何時か之あらん、之何時か來らんや。（一一〇二）

冠ある鳥、孔雀の森林中に〔將〕山窟中に鳴くを聞いて、起ち上がり、不滅〔の道〕に達せんがために思を致さんこと何時か之あらん、之何時か來らんや。（一一〇三）

龍界に流入し、河口强くして、怖るべき恒伽河、閻牟那河、薩羅娑縛底河を沈むことなく神通力を以て渡らんこと何時か之あらん、之何時か來らんや。（一一〇四）

我戰場を徘徊する象の如く、諸欲に欲を斷ち、心を禪思に繫けて一切淸淨の相を斥けんこと何時か之あらん、之何時か來らんや。（一一〇五）

貧者の負債に窘められ、富者のために惱まされたるが、隱れたる〔寶〕を獲て踊躍するが如く、大仙の敎に通じて〔踊躍する〕こと何時か之あらん、之何時か來らんや。（一一〇六）

「在家人の生活を營む要なからずや」と云ひて、汝我を勸誘すること多年なりき、心、今我が出家せるを何故に汝は意を注ぐことなき。（一一〇七）

心、汝は我を勸誘せしにあらずや、「山廓の中なる種種の羽翼ある鳥の雷電の轟轟たる響に應ずる、此等は森林中に入定せる汝をして娛ましめん」〔と云ひ

て」。 （二〇八）

家、愛すべき朋友親族及び世界に嬉戯するの樂と諸欲の欲とを總て捨てて、之に達しぬ、然るに、心、汝は我に滿足することなし。 （二〇九）

之は我がためにこそあれ、他のためにあらず、武裝の時至れるに、何の要ありてか悲傷する、總て動搖すべきものなりと觀じ、不滅の道を求めて出家したり。 （二一〇）

善語者、兩足中の勝者、大醫師、可化丈夫の御者は宣へり「心は動搖して猿に似、貪欲を離れざるものには制すること難し。 （二一一）

欲は種種にして甘く樂しく、無智の凡夫は之に賴る、彼の再再生を求むるものは苦を願ひ、心のために導かれて惡趣の中に亡ぶ。 （二一二）

孔雀、蒼鷺の聲頻なる森林の中に、汝は豹や虎に圍繞せられて住し、身の欲望を捨てて、樂著することなかれと、斯の如く、心、汝は先に我を慫慂したりき。 （二一三）

禪と根と力と(四)覺支定修とを修習せよ、佛の教に於て三明に觸れよと、斯の如く、心、汝は先に我を慫慂したりき。 （二一四）

不滅に到り、救濟に達り、あらゆる苦惱を斷盡し、あらゆる煩惱を淨除する八支の道を修習せよと、心、汝は斯の如く我を慫慂したりき。 （二一五）

蘊の上に苦「あり」と正しく見よ、苦の由りて出る所、之をも捨てよ、此處にありて苦を斷じ盡せと、心、汝は先に斯の如く我を慫慂したりき。 （二一六）

苦は無常なりと正觀し、空なり無我なりと、又邪惡なり殺害なりと「正觀し」、心の度量を止めよと、心、汝は先に斯の如く我を慫慂したりき。 （二一七）

圓頭醜形、凛乎として來り、髑髏〔形の鉢〕を手にして諸家の間に乞食せよ、師なる大仙の敎に身を委ねよと、心、汝は先に斯の如く我を慫慂したりき。（二二八）

善く己を攝して、街路の間を往來し、家にも欲にも愛著の心なく、明なる滿月の夜の月の如くなれと、斯の如く、心、汝は先に我を慫慂したりき。（二二九）

森林住者たれ、乞食者、冢間住者、著襤褸者、坐不臥者たれ、常に頭陀を樂とせよと、斯の如く、心、汝は先に我を慫慂したりき。（二三〇）

樹を植ゑて果〔を得んと〕望むものの、樹を根より斫らんことを望むが如く、心、汝の我を無常動轉に慫慂せんとするは、之に比すべきことをなすにあらずや。（二三一）

形色なくして遠行し獨遊するものよ、今や我汝の語に服せざるべし、是れ諸欲は苦なり辛なり大怖畏なればなり、我は涅槃をこそ想望して遊行せめ。（二三二）

我が出家したるは不運のためにあらず、無慚恥のためにも、不面目のためにもあらず、轉氣にも、また生活のためにもあらず、心。（二三三）

欲の少きと、覆を捨棄すると、苦を息止するとは善人の稱嘆する所なりと、心、汝は其の時斯く我を慫慂したり、今汝は先に修習せし所に歸る。（二三四）

愛欲と無明と、愛と非愛と、美しき色と、樂しき受と、適意の欲とは既に擲げられたり、我は擲げたるを再び返さんがために努力せじ。（二三五）

心、あらゆる場合にありて、我汝の語に隨ひ、多生の中、我汝の怒に觸れしことなし、〔此の〕内生の身は汝の知恩より〔來れり〕、汝苦を作るや、輪迴久しきに及べり。（二三六）

心、我等を婆羅門となすは汝なり、汝は〔我等を〕刹

帝利、王、仙士となす、〔我等〕或時は吠奢、首陀となる、天子たるも汝の運載による。（二三七）

汝の因によりてぞ、我は阿修羅となる、汝を本として我等墮地獄者たり、其より或時は畜生となる、餓鬼たるも汝の運載による。（二三八）

〔香具師の〕度度假面を示すが如く、汝我を誑すこと再再なることなけん、我狂すれば汝は氣力衰ふ、心、我汝に對して何の非をか爲せる。（二三九）

先には此の心、望により、欲に隨ひ、樂に任せて流轉したり、我今日能く之を制すること、象師の猛象を〔制する〕が如くせん。（二四〇）

師も亦我に此の世界を無常、不堅實にして精質なしと示したまへり、心、我を勝者の教に入らしめ、大にして超え難き暴流を超えしめよ。（二四一）

心、汝今や先にありし如くあらざるべし、(五)我今更に汝の制抑を蒙らじ、我大仙の教に於て出家せり、我の如きものは損失を忍ぶことなし。（二四二）

山海河地、四〔方〕、四維〔上方〕下方總て無常にして、三有は患難あり、心、何處に行いてか汝は安樂を享けん。（二四三）

醜なり、醜なり、我が心、更に何をか爲んとするぞ、心、(六)〔我〕汝の制抑を蒙むるものたらじ、我は斷じて兩口の鞴に觸れじ、醜なり、滿ちて九の孔より滲み出るもの。（二四四）

野猪、羚羊の窺に出沒する天作巧妙なる窟舍の中に、又は新雨の降り濺ぎたる森林の中に、心、汝は此處に窟に入りて樂を享けん。（二四五）

深青色の頸あり、善き冠あり、善き翼あり、雜色の羽に包まるる空中の飛行者は美妙の聲、雷〔の如き〕音を有す、此等は汝の林中に禪思するを樂ましめ

ん。

(七) 四指草の上、美しく花咲きて雲〔の色〕に似たる森林に雨降るや、我山中に臥して樹木の如くせん、我が〔臥床は〕柔にして綿の如くならん。(一一三六)

主のなしたまふが如く、同じく我はなさん、〔我が〕得る所のもの、之を以つてまた足れりとせん、懈なき〔革工の〕柔に鞣したる猫皮の嚢を作るが如くに我はなさん。(一一三七)

主のなしたまふが如く、同じく我はなさん、〔我が〕得る所のもの、之を以つてまた足れりとせん、精進によりて我れ汝を伏すること、巧なる象師の狂象を〔伏する〕が如くせん。(一一三八)

調馬師の馬を矯むるが如く、善く汝を調順し、固定せしむることによりて、我は安泰にして、心を防護する人の常に行へる道を履むことを得。(一一三九)

強力を以て汝を縁境に縛すること、強き繩を以て柱に象を〔縛するが〕如くせん、我正念を以て能く汝を護り、能く修練せば、あらゆる生有に依著することなからん。(一一四〇)

智慧を以て邪路に依るものを遮り、努力によりて制して、〔正〕路を行はしめよ、(苦)の集の起滅あるを見て、第一語者の嗣續者とならん。(一一四一)

心、汝は我を指導するに、四種顚倒の制御する所となれる野人の如くす、汝は結縛を破れる悲愍の大牟尼に師事するにあらずや。(一一四二)

美しく飾れる森林中にありて、心自在なる獸の、雲の鬘ありて樂しき山に入れるが如く、心、汝は其の人影稀なる山間にありて樂まん、心、汝は必して彼岸に到らん。(一一四三)

男子又は女子の汝の欲望と制御とに從ひ、安樂を享(一一四四)

くるものは、無智にして魔羅の制御に從ひ、生有を喜びて、心、汝の從屬たるものなり。　(二一四五)

右バーラプタ長老

【一】pavana 山又は岡の中腹、險しき傾斜面、坂。【二】samatha 一〇七三偈の註參照。【三】無常、無我にして精(sāra)あるなし等。【四】bojjhangasamādhibhāvanā。【五】【六】生類の身を指す、再び生を受けざるの意。【七】caturangula tiṇa 紅色の毛氈に似たる草の一種。

六十頌品第二十

(一)我等森林に住し、乞食を食とし、遺穗の鉢に入るを樂むもの、內心善く、定に住して魔王の軍を破らん。　(二一四六)

我等森林に住し、乞食を食とし、遺穗の鉢に入るを樂むもの、魔王の軍を震はすこと、象の葦の舍を〔震はす〕が如くせん。　(二一四七)

我等は樹下に住し、耐忍力あり、遺穗の鉢に入るを樂むもの、內心、善く定に住して、魔王の軍を破らん。　(二一四八)

我等樹下に住し、耐忍力あり、遺穗の鉢に入るを樂むもの、魔王の軍を震はすこと、象の葦の舍を〔震はす〕が如くせん。　(二一四九)

(三)醜なる哉、骨を以て組み、肉と筋とを以て縫ひたる小舍、滿ちて惡臭あり、他の肢體なるを己の有なりと思へり。　(二一五〇)

胸に潰瘍を有てる妖魅、皮膚に包める糞袋、汝の身には九の孔あり、之より〔液汁〕常に滲み出づ。　(二一五一)

汝の身は九の孔ありて惡臭を有つ、結縛を作るもの、比丘は之を避くること、恰も潔白を好める人の糞を〔避くる〕が如くす。　(二一五二)

若し人我が之を知れるが如く斯くの如く之を知らば

遠くより〔之を〕避くること、雨期の糞坑の如くすべきなり。　(二五三)

(三) 如是、如是、大雄士、沙門、汝の云ふ所の如し、然も此の處にありて淪落すること、恰も泥中の老牛の如くなる人あり。　(二五四)

(四) 蓋黄を以て、又は他の顔料を以て、空中に描き得べしと思へる、之は之を害ふものにして他にあらず。　(二五五)

彼の虚空に等しくして、内能く定に住せる我が心を〔汝の〕邪心に接せしむることなかれ、恰も鳥の火聚に〔入る〕が如くに。　(二五六)

飾れる像、瘡腫の塊、病を抱き、多の思意を有てる積集の身を見よ、之に堅固なく、住立なし。　(二五七)

(五) 種種の方便を具有せし舍利弗の涅槃に歸するや、其の時恐怖ありき、其時身毛卓起しき。　(二五八)

げにも諸行は無常にして、起滅を性となし、生起して〔而も〕滅盡す、其等の息止は安樂なり。　(二五九)

五蘊を己と見ずして、他と見るものは微細なるを貫くこと、箭を以て毫末を〔貫く〕が如くす。　(二六〇)

諸行を己と見ずして、他と見るものは微妙〔の理〕を穿つこと、箭を以て毫末を〔穿つ〕が如くす。　(二六一)

槍を以て刺さるるが如く、頭を燒かるるが如し、正念の比丘は欲貪を捨てんがために出遊すべし。　(二六二)

槍を以て刺さるるが如く、頭を燒かるるが如し、正念の比丘は、生有の貪欲を捨てんがために出遊すべし。　(二六三)

己心を修練し、最後身を持ちたまへる人に勸められ、我足の大指を以て鹿母樓閣を震ひ動かしき。　(二六四)

あらゆる纏結を解く此の涅槃は、柔惰によりても、小なる力を以ても、達すべきにあらず。　(二六五)

此の年若き比丘、此の優勝なる人は魔を其の眷屬と共に併せ敗りて、最後身を持つ。（二六六）

雷は毘婆羅山と、槃荼婆山との岩窟に墜つ、斯の比倫なき〔佛の〕見は山窟に入りて禪思す。（二六七）

（六）安静寂滅に歸し、邊地に坐臥せる牟尼は佛尊の嗣續者にして、梵天に敬禮せらる。（二六八）

安静寂滅に歸し、邊地に坐臥せる牟尼、佛尊の嗣續者たる迦葉等を敬禮せよ、梵志。（二六九）

人また百生の間、總て婆羅門の生を經、婆羅門として人間中に吠陀を知ること再再。（二七〇）

三吠陀の讀誦者にして、其の彼岸に度れるものたらんとも、此〔の人〕を禮拜するは〔迦葉尊を禮拜するの〕十六分が一にも價せず。（二七一）

朝餐に先ちて順次並に逆次に八解脱を見、其よりして受食に赴くもの、（二七二）

斯の如き比丘を侵すことなかれ、婆羅門、（七）己を穿つことなかれ、斯の如き阿羅漢に對して汝の心に信念を起せ、速に合掌して禮拜せよ、汝の頭を破らるることなかれ。（二七三）

彼の輪廻のために惱まされ、正法を見ざるものは、非行處、曲路、邪道に奔馳す。（二七四）

糞に塗れたる蛆蟲の如く、行に惑はされ、利養恭敬に心を專にして〔而も〕ボッチラは空しく去る（二七五）

（八）兩處に於て解脱を得、内心善く定に住せる彼の端嚴なる舍利弗の來るを見よ。（二七六）

〔愛欲の〕箭を去り、結縛を盡し、三明ありて、魔王を賊するもの、人間の供養を受くるの德あり、最上の福田なり。（二七七）

（九）此の數多の天子等、神通力あり、名稱あるもの、十千の天子は總て梵輔天に屬す、目犍連に歸命しつ

つ、合掌して立てり。（二七八）
「生善き人、汝に歸命す、最上の人、汝に歸命す、尊、
諸漏汝の身に盡き、汝は應供の德あり。（二七九）
人天のために恭敬せられ、生れて死に勝てり、白蓮
華の水のために〔汚されざる〕が如く、行に汚さるる
ことなし。」（二八〇）
彼の比丘は、大梵天王の如く、一瞬時間に世間を見
ること一千方、諸種の神通力を具へ、〔人天の〕生死
と其の時機とを見る、諸天子よ。（二八一）
(一〇)智慧と、戒と、寂靜とによりて彼岸に達れる比丘、
彼舍利弗こそは最上者ならめ。（二八二）
百千俱胝生の己身を一刹那の間に化作せん、彼は變
化に巧にして神通に熟せり。（二八三）
目犍連は定と明とに熟通し、無依著者の敎に於て成
滿に達し、賢智ありて諸根を寂靜にし、結縛を破毀す
ること、恰も象の腐りたる蔓樹を〔破毀する〕が如く
しき。（二八四）
我師に奉事し、佛の敎を成じ、重擔を卸し、再有の
因を除けり。（二八五）
我、彼の利益のために、在家を出でて、出家得度せ
しが、今此の利益、〔卽ち〕あらゆる纒結の滅盡に達
したり。（二八六）
(一一)佛弟子弁ヅラと、婆羅門カクサンダとを害して、
ヅッシーの煮られたる地獄は如何なりしぞ。（二八七）
一百の鐵杙あり、各各〔苦〕感を與ふ、佛弟子弁ヅラ
と、婆羅門カクサンダとを害して、ヅッシーの煮られ
たる地獄は斯の如くなりし。（二八八）
佛の弟子なる比丘にして、(一二)之を知れるもの、斯の
如き比丘を害せば、魔王、汝は苦惱に會はん。（二八九）
大海の中部に宮殿峙つこと一劫、瑠璃色にして、樂

しく、火焰〔の如き〕光明あり、此處に種種の色なせる天女數多ありて舞踏す。(一一九〇)

佛の弟子たる比丘にして、之を知れるもの、斯の如き比丘を害せば、魔王、汝は苦惱に會はん。(一一九一)

佛の勸告により、比丘衆の期待に應じて足の大指を以て鹿母樓閣を震ひ動かせしもの、(一一九二)

佛弟子たる比丘にして、之を知れるもの、斯の如き比丘を害せば、魔王、汝は苦惱に會はん。(一一九三)

神通力により我足の大指を以て堅固なるヱーヂャヤンタ樓閣を震ひ動かすや、天子は震ひ驚きぬ。(一一九四)

佛弟子たる比丘にして、之を知れるもの、斯の如き比丘を害せば、魔王、汝は苦惱に會はん。(一一九五)

ヱーヂャヤンタ樓閣の中に於て、帝釋天に問うて言へり「汝卻いて愛欲の滅盡解脫を知れりや」と、帝釋天は彼に問はれて如實に答へき。(一一九六)

佛弟子たるものにして之を知る比丘、斯の如き比丘を害せば、魔王、汝は苦惱を受けん。(一一九七)

善法樓閣の中に於て、衆の面前に、大梵王に問うて言へり「汝、今日も尙ほ、汝が先きに有ちけると、同じき見を有てりや、汝は梵界に於て、光輝の過去しつつあるを見るや。」(一一九八)

大梵王は彼に問はれて、如實に答へき、「尊、我が先に有ちたる、彼の見は、今我之を有たず。(一一九九)

我梵界に於て光輝の過去しつつあるを見る、我今日我は常住なり、恒久のものなりとの語の虛なりしことを〔知る〕」(一二〇〇)

佛弟子たるものにして之を知れる比丘、汝若し斯の如き比丘を害せば、魔王、汝は苦惱に會はん。(一二〇一)

解脫〔の喜〕を以て大彌樓山の頂を見、東弗婆提洲の森林と、地上に棲息せる人人とを〔見き〕。(一二〇二)

佛弟子たるものにして之を知れる比丘、魔王、斯の如き比丘を害せば、汝は苦惱を得ん。《一二〇三》
火は「我愚人を燒かん」と思ふことなし、而も愚人は此の燃ゆる火に觸れて燒かる。《一二〇四》
之と同じく、魔王、汝は此の如來を襲うて、自ら己を燒くこと、猶ほ火に觸れたる愚人の如し。《一二〇五》
魔王、汝如來を襲へば、不善業を積む、波旬、汝は「我が邪業は熟せず」と思へりや。《一二〇六》
魔、汝罪業を犯せば、長夜に積集せらる、魔王、佛より縛を解け、諸比丘に對して、欲想を起すことなかれ。《一二〇七》
斯の如く比丘は、ベーサカラー林中にありて、魔王を叱しき、其より彼の夜叉は、不興にして其の處に隱沒しぬ。《一二〇八》
斯の如く具壽摩訶目犍連は偈頌を唱へけるとぞ。

【一】以下目犍連の諸比丘を誡むるの偈。【二】以下長老を誘惑せんとしたる遊女に對して。【三】遊女之に答へて。【四】以下一偈長老の之に答ふるなり。【五】以下四偈舍利弗の入滅したる時。【六】以下六偈大迦葉に就て。【七】己の利を堀ち殺すをいふ。【八】二偈舍利弗を稱歎す【九】以下舍利弗目犍連を稱歎す。【一〇】以下目犍連の語。【一一】長老と魔王との問答。【一二】地獄の狀態。

大集品第二十一

(一)我在家より出でて、出家得度したるに、魔より〔出來れる〕此の强暴の思想我を追尾す。《一二〇九》
生善くして、術に習ひ、堅く武裝せる大弓手たり、逃れざるもの一千、之を四方に退散せしめん。《一二一〇》
若し此の數よりも多き婦女出で來らんとも、我を惱ますことなからん、我は法に住立す。《一二一一》
此の日の族なる佛の〔說きたまひし〕涅槃趣向の道を我一たび聞いて、我が心之を樂む。《一二一二》

我れ斯くして住せるに、波旬、汝は近き來る、死〔王〕我も同じく之をなさん、汝は我が道を見ることなからん。（二二三）

㊂樂と非樂と、家に依れる思とを總て抛ちて、何處にも欲を起すことなくば、彼比丘は欲なきによりて無欲者たり。（二二四）

此處に大地と、形色ある天上界と、總て無常にして老い朽つ、識者は斯く如く學び識りて遊行す。（二二五）

人は㊃本質の上に執著心を起す、見聞し觸知する處にも亦、此處に欲なくして欲念を除去せよ、これ此處に染せらるることなきもの、彼は牟尼と名けらるればなり。（二二六）

六十八〔の邪見〕に依るものは凡夫の思想を具へ、非法の上に住著す、何の宗派にも屬することなく、而して邪執あらざるもの、彼こそは比丘なれ。（二二七）

性格豐に具はり、長夜に定に住して、僞ならず、欲なくして智慧ある牟尼は寂靜の道に達し、緣起を滅して死の至るを待つ。（二二八）

瞿曇の弟子、憍慢を捨てよ、憍慢の道を捨てて餘す所なくせよ、汝憍慢の道に迷惑して追悔すること久し。（二二九）

群生は覆のために覆はれ、慢のために災せられて、地獄に墮つ、群生は慢のために災せられ　地獄に坐れて長夜に憂苦す。（二三〇）

道〔によりて〕勝てる比丘の、能く〔道を〕履修せるものは絕て憂苦することなし　名譽と安樂とを享く、之を法見〔の人〕と呼ぶは正し。（二三一）

されば此の世に於て、剛愎なく、憍慢なく、障礙を捨てて、淸淨となり、憍慢を捨てて餘す所なく、安靜にして、智慧により、〔苦の〕際を盡すものとな

れ。(一二二二)

(四)我貪欲のために燒かれ、我が心燃燒せらる、可矣、瞿曇、慈愍を垂れて、我に消除の法を說け。(一二二三)

想の顚倒によりて汝が心は燃燒せらる、貪欲と倶有なる清淨相を捨離せよ。(一二二四)

一境性にして、善く定に住せる心を、不淨〔相〕に修練せよ、汝に身念あるべく、厭嫌〔の情〕多かるべし。(一二二五)

非相をも修練せよ、憍慢、愛執を抛捨せよ、其より憍慢を知悉し、寂靜にして遊行せん。(一二二六)

〔人の〕よりて己を苦むることなき、斯の如き語をこそ說け、他人をも害することなかれ、斯る語は善く說かれたるなり。(一二二七)

他の聞きて喜ぶ語、〔此の〕愛語をこそ口にせよ、他の惡を擧げずして言ふはこれ愛〔語なり〕。(一二二八)

不滅の語は眞なり、之不朽の法なり、寂靜の人は眞と義と法との上に住立すと稱せらる。(一二二九)

涅槃に達せんがために、苦惱の際を盡さんがために、佛の說きたまひし安隱の語、之語中の最上なるものなり。(一二三〇)

深智の智者にして、道と非道とを熟知せる大智の舍利弗は比丘のために法を說く。(一二三一)

略しても說き、廣くも語る、九官鳥の聲の如く、〔彼は其の〕無礙辯を表す。(一二三二)

彼の此の說法の美音を聞いて、愛すべき、耳にして樂しむべき音聲のために比丘等は心歡喜し、怡悅して耳を傾く。(一二三三)

(五)今日十五日、五百人の比丘は清淨に達せんがために集り來れり、諸仙は結縛を斷ち、苦を解き、再生を盡せり。(一二三四)

猶ほ、轉輪王の、諸大臣に伴はれて此の大地を海際に至るまで、普く巡行するが如く、（一二三五）

同じく、三明ありて死魔を滅せる弟子輩は、無上にして戰に克ち、（六）隊の主たる師に奉侍す。（一二三六）

總て世尊の兒にして、此の中實なきはあらず、愛欲の箭を去る此の日族〔の佛尊〕を禮拜せよ。（一二三七）

（七）一千を超ゆる比丘は善逝に奉侍す、塵垢なき法、怖畏なき涅槃を説きたまふ人に。（一二三八）

彼等は正徧覺者の説きたまへる廣大の法を聞く、正徧覺者は比丘衆等に圍繞せられて、光輝を發ちたまふ。（一二三九）

世尊、汝は龍の名を有ちたまひ、諸仙中第七仙に當らせたまふ、大雲の如くして弟子に〔法〕雨を澍ぎたまふ。（一二四〇）

日中住より去りて、師を見たてまつらんがために、大雄氏、弟子鵬耆娑は汝の足を禮す。（一二四一）

魔の邪路に克ち、障礙を破りて、遊行したまふ、此の纏縛を解く人、分分に分別して依著なき人を見たてまつれ。（一二四二）

暴流を度らんがために種種なる道を説きたまへり、此の不滅〔の法〕の説き示さるるや、諸法見の人住立して動さるるなし。（一二四三）

〔世の〕燈明となる人はあらゆる立處の彼岸を透視したまへり、彼十法中最上〔の法〕を證知して説示したまへり。（一二四四）

斯の如くして善く法の説かれたるに、法を知れるものの中、何人か果して放逸ならんや、されば此の世尊の敎に於て精勤にして常に禮拜しつつ學べ。（一二四五）

（八）憍陳如長老は出離の志鋭く、佛に續いて悟を開きたるもの、常に安樂住と遠離とを獲る人なり。（一二四六）

佛弟子にして師の教を行ふものの達すべきことは、總て此の精勤にして學習する人の成就せる所なり。（一二四七）

大威力、三明あり、〔他の〕心の所趣を知る、佛の嗣續者たる憍陳如は師の足を禮拜す。（一二四八）

苦惱の際を盡したる牟尼の、山の中腹に坐せるを、三明ありて、死魔を滅せる佛弟子は、侍事したてまつる。（一二四九）

（九）大威力ある目犍連は〔己の〕心を以て、解脱を得て、精質を滅せる彼等の心を驗す。（一二五〇）

斯の如くしてあらゆる支分を具備し、苦惱の際涯を盡し、種種の方便を具有せる瞿曇に師事す。（一二五一）

猶は雲なき空に、垢穢なくして輝く月の照らすが如く、同じく、大牟尼、（一〇）鵬耆羅娑、汝は名稱によりてあらゆる世界を照す。（一二五二）

（一一）我先に詩歌に醉ひて村より村へ、都より都へと流離しけるが、其より一切法の彼岸に達したまへる正徧智者を見たてまつりき。（一二五三）

苦惱の彼岸に達したまへる彼牟尼は、我がために法を説きたまひき、我法を聞きて和悦し、信心我に起りき。（一二五四）

我彼の語を聞き、〔五〕蘊、〔十二〕處、〔十八〕界を知りて、出家得度しき。（一二五五）

如來は此等の佛の教を行ふ、數多の婦女また男子の利益のために現れたまふ。（一二五六）

世間に來れるものを見る、此等比丘、比丘尼の利益のために、牟尼は菩提を得たまひき。（一二五七）

有眼者、日族の佛尊、有生を慈愍して四種の聖諦を説きたまへり、（一二五八）

苦と、苦の生起と、苦の超越と、苦を息止する聖き

八支の道と之なり。(一二五九)

此等は斯の如く、如實に説かれ、我は此等を説かれし如くに見たり、われ己利に達し、佛の教を成就しぬ。(一二六〇)

實にも我れ佛の側に來りしことは徒爾ならざりき、分別せられたる諸法の中にて、最も尊きものに我は通じき。(一二六一)

神通の彼岸に達し、耳根を清淨にし、三明あり、神足を獲、〔他人の〕心の所趣を知悉す。(一二六二)

(二)「現法に於て疑惑を斷じたまふ尊智の師に問ひたてまつる、世に知られ、譽高く、心寂靜に歸したる一比丘アッガーラヴにありて死しき。(一二六三)

尼拘律陀劫彼とは彼の名なり、之世尊の〔此の〕婆羅門に與へたまひし所、(三)堅固の法を見たまへる世尊、彼は世尊を禮拜し、解脫を索め、勤めて精進して行じき。(一二六四)

釋氏、普眼者、我等は總て彼の佛弟子を知らんと欲す、我等の耳は總て聽くの用意をなせり、世尊は我等の師、世尊は無上者なり。(一二六五)

我等の疑惑を斷ち、之を我等に語りたまへ、饒智者、圓寂せる〔比丘〕を指示したまへ、普眼者、我等の中にありて〔之を〕示すこと、千眼の帝釋天の諸天の〔中にありて示すが〕如くしたまへ。(一二六六)

此の世のあらゆる纏縛、愚癡の道、無智の伴、疑惑の處、此等は如來に到れば〔更に〕存することなし、これ如來は最上の人眼なればなり。(一二六七)

眞に若し人煩惱を〔斷つこと〕、譬へば風の空中に〔浮べる〕雲羣を〔斷つ〕が如くすること能はずんば、一切世間は黑闇に覆はれ、光あるものも輝くことなからん。(一二六八)

賢人は光明を作すものたり、賢者、我は汝を然なりと思ふ、我等（四）禪觀を見る汝の處に來詣したり、〔此の〕衆の中にありて我等に劫波を示したまへ。（二六九）

妙好の人、疾く好好の音聲を揚げさせたまへ、白鳥の〔其の首を〕擡げて、善く調ひて、圓かなる聲を以て徐ろに歌ふが如くに、〔我等〕總て意を傾けて聞かん。（二七〇）

生死殘りなく棄て、〔邪惡を〕掃ひたまへる〔佛に〕切望して說法を請ひたてまつらん、そは凡夫の欲は果つべからず、如來は慮りて〔事を〕行ひたまふが故なり。（二七一）

汝全智者のなし給へる此の十全の說示は領受せられたり、我は此の最後の合掌を手向けたり、〔劫波を〕知りながら、〔我等を〕誑したまはざれ、尊智の人。（二七二）

漏す所なく、聖者の法を覺り、知りて誑したまふことなかれ、大精進の人、猶ほ熱時暑熱に惱める人の水を〔求むる〕が如く、汝の語を得んと願ふ、聽者に雨を降したまへ。（二七三）

劫波は法利ある梵行を修したり、之彼に取りて空なりしや、彼は圓寂せりや、將た有餘滅に入れりや、我等は彼が解脫せし如くに之を聞かん。」（二七四）

「此處に名色の上に、彼は愛欲を斷ちたり」と世尊は〔宣へり〕、「長時依著せし愛欲の流を〔斷ち〕、生死を渡りて、殘りなし」と、五者の最長たる世尊は宣へり。（二七五）

「汝の此の語を聞きて、〔我が心〕悅ぶ、仙士中の第七者、我は徒には問はざりけり、婆羅門は我を欺きたまはず。（二七六）

佛の弟子は〔口に〕言ふが如く、〔身に〕行ひ、虛僞の

死王の强き網を破れり。（二七七）
世尊、却比耶は取著の初を見たり、却比耶は渡ることと難き死王の領域を超えたり。（二七八）
兩足中の最上者、我は汝天中の天を拜し、汝の兒、〔汝の〕後に出て、龍象の眞子なる龍象を拜す。」（二七九）

右鵬耆婆長老

國譯長老偈 終

大集品第二十一

【一】鵬耆婆長老、未だ沙彌たりし時、數多の著飾りたる婦人の精舍に入り來るを見て。【二】以下自己の境界を述ぶ。【三】一五二偈註を見よ。【四】以下阿難陀長老に向ひて。【五】佛自恣の經を說き給ひし後。【六】sattha-vāha 武具を携ふるものと見るも可きか。【七】涅槃に關する說法の後。【八】憍陳如の事。【九】目犍連。【一〇】佛の異名。【一一】過去の追憶。【一二】以下尼拘律陀の死に就て問ふ。【一三】涅槃。【一四】vipassanā 觀と譯す、samatha（止）と對して、禪の觀念の方面を表す。

[illegible]

國譯長老尼偈

彼の祥者、尊貴者、正遍智者に歸命したてまつる

一頌品第一

長老尼、襤褸を以て「衣服を」作り、「之を」纏ひて、快く臥せよ、是れ汝の愛欲は制せられて、鍋中の枯菜の如くなりたればなり。（一）

斯く姓名不詳の長老尼は此の偈を唱へたりとぞ。

解脫尼、（一）「四種の」結より脫るると、（二）羅睺の捕へし月の如くせよ、解脫の心を以て負目なき「身となり、世の」施食を受けよ。（二）

斯く世尊は解脫と「呼べる」（三）式沙彌尼を常に此の偈を以て誡め給へり。

富樓那尼、諸の法を成滿すると、十五日の月の如くせよ、圓滿なる智慧を以て「愚癡の」闇塊を破れ。（三）

右佛の富樓那尼に示し給ひし偈。

帝須尼、（四）學によりて學修せよ、汝諸の（五）繫結に敗らるること莫れ、所有ゆる繫結より離れ、無漏「の身となりて」、世に遊行せよ。（四）

右佛の帝須尼を誡め給ひし偈。

（六）帝須尼、心を諸法に專にして、（七）刹那も「空」過せしむる勿れ、そは刹那を「空」過せしむるものは（八）泥洹に墜ちて憂ふべきが故なり。（五）

右他の帝須尼の偈

堅固尼、滅を得よ、「諸の邪」想を制むるは樂し、無上の安隱、涅槃を成せよ。(六)

右堅固尼の偈

(九)諸根を習修せる尼は堅固の法によりて堅固なり、(一〇)魔王を其の眷屬と共に併せ敗りて、最後身を持せよ。(七)

右他の堅固尼の偈

友尼、信心によりて出家して、交友を悦べ、安隱「涅槃」に達せんがために諸の善法を修せよ。(八)

右友尼の偈

善尼、信心を以て出家して、善法に於て樂め、諸の善法を修習せよ、安隱「涅槃」は無上「の法」なり。(九)

右善尼の偈

寂靜尼、超え難き(一一)死王の領土を「超え」、暴流を渡れ、(一二)魔王を其の眷屬と共に併せ敗りて最後身を持せよ。(一〇)

右寂靜尼の偈

三の屈れるものを脱るる上に於て、我は巧に脱れ、善く免れぬ、(一三)「三とは」臼と杵と屈れる主となり、我は生と死より脱れ、生有の慾を盡せり。(一一)

右解脫尼の偈

「最上果に達せんとして」願樂を起せるものは、終に心を以て「涅槃に」接せん、諸欲に繫縛せらるることなきものは、上流「般の人」と稱せらる。(一二)

右法與尼の偈

行ひて後に悔なき佛の敎を行へ、(一四)疾く足を洗ひて一面に坐せよ。(一三)

右毘舍法尼の偈

諸界の苦なることを見、生をして再び「汝の身に」來らしむること勿れ、生有の愛欲を斷たば寂靜にして遊行

せん。（一四）

右佛の善意尼に示し給ひし偈

我は身業を攝し、語業さては意業を〔攝せり〕、愛念を其の根より拔きて清涼寂靜となれり。（一五）

右鬱多羅尼の偈

（一五）老尼、（一六）汝襤褸を以て〔衣服を〕作り、〔之を〕纏うて快く臥せよ、是れ汝の愛欲は制せられて、清涼寂靜〔の身〕となりたればなり。（一六）

右佛の善意老尼に示し給ひし偈

〔我〕力弱く、杖に倚りて食を乞ひ廻り、四肢震ひて其處なる地上に倒れぬ、肉身に過難あることを見て、其より我が心解脫せり。（一七）

右達磨尼の偈

家を捨てて得度し、愛したる兒と畜類とを捨て、貪と瞋とを捨て、無明を除き、愛念を其の根より拔きて、我は寂靜寂滅を得たり。（一八）

右僧加尼の偈

【一】四種の結とは欲・有・見・無明等四種の繫縛を云ふ。【二】日蝕月蝕は日月の羅睺と稱ふる阿修羅王のために捕へらるるによると信ぜられたり。【三】Sikkhamānā 學法女、又は正學女と譯す、成年の婦女にして比丘尼たらんと志すものを二年間戒律を學修せしめて、其の品行を驗し、特に懷胎の有無を驗す。【四】戒定慧の三。【五】煩惱の異名。【六】諸經要集三三三偈。【七】Khaṇo 機會を去らしむ、好機を逸せしむるの意と見るも可なるが如し、四五九偈參照。【八】地獄餓鬼畜生修羅の四惡趣を云ふ。【九】信・進・念・定・慧の五種の根を云ふ。【一〇】法句經一七五偈參照、大小の煩惱を盡して、再び世に生れ出ることなし、故に最後身を持すると云ふ。【一一】死王の領土卽ち暴流の意、共に此の輪廻界を指す。【一二】七偈參照。【一三】此の婦もと、他のために舂きて生計せしが如く、而して其の夫は傴僂なりしなり。【一四】師に事ふる禮の一端を示すなり。【一五】原語の意は晩年にして出家したる尼。【一六】一偈參照。

二頌品第二

難陀、病み、汚れ、腐りたる〔此の〕合成〔の身〕を見よ。

(一)靜穩に歸し、心を定念に住せしめ、不淨想を修習せよ。【一九】

又無相念を修習し、憍慢心を捨てよ、其の憍慢の除滅より汝は寂靜にして遊方せん。【二〇】

斯の如く世尊は常に此等の偈を以て難陀式沙彌尼を敎へ給へり。

此等(二)七種の菩提分、涅槃に達するの道は、我總て之を佛の指示に從ひて修習したり。【二一】

我旣に彼の(三)世尊を見奉りたれば此は「我が」最後の合成「身」にして、轉生輪廻は斷じ盡され、今より再び生を受くることあらじ。【二二】

右チェンター尼の偈

解脫したる者、我は巧く脫れ、(四)杵「取る業より」善く免れたり、我が「夫は」無慚恥にして我を(五)傘ほどにも「思はず」、我が釜は(六)疽「の如く」なりき。【二三】

我は貪と瞋とを斷盡して住す、我は樹下に入り「吁、樂なる哉」と「云ひて」、快く禪思す。【二四】

右姓名不詳の某比丘尼の偈

我が所得は(七)迦尸國歲入の額に達しぬ、都民は(八)我に價を附して、價なき我に價を定めぬ。【二五】

其より我は色に於いて嫌厭の念を起し、嫌厭の念を起して、我は欲を離れぬ、我は再び生死輪廻に流轉せざらんことを、「我は」(九)三明を證知し佛の敎を成ぜり。【二六】

右アッダカーシー尼の偈

假令「我」瘦せ、病みて、甚く力衰へたりとも、杖に憑れて山を登り往く。【二七】

(一〇)僧伽梨衣を下し、鉢を伏せて、岩石の上に身を休む、「愚癡」の闇塊を碎きつつ。【二八】

右質多尼の偈

〔我〕假令苦み惱み力乏しく年邁きたりと雖も、杖に倦れて山を登り往く。（二九）

僧伽梨衣を下し、鉢を伏せて、岩上に坐し、其より我が心解脱せり、我三明に達し、佛の敎を成せり。（三〇）

右慈愍尼の偈

（一）〔白黑〕分の十四日、十五日、又八日に、及び（二）變改分に於て、天群を欣讚して八支具足せる布薩戒を護れり。（三一）

其の我今は一食を〔取り〕、頭を剃り、僧伽梨衣を纏ふ我は天群を願はず、胸中の怖畏を制せり。（三二）

右友尼の偈

母、下足蹠より、上頭髮の頂に至るまで、此の不淨にして汚臭ある身を觀察せよ。（三三）

斯の如くして住せる者には所有る貪愛根絶され熱惱斷じ盡さる、我は（三）淸涼滅熱に歸したり。（三四）

右（一四）無畏母の偈

（一五）無畏尼、凡夫の愛著せる〔此の〕身は壞滅すべきものなり、〔我〕正知正念あり、此の身を捨てん。（三五）

我が多の苦法より〔脫れ〕、精勤を樂めるよりして、愛盡に達し、佛の敎を成せり。（三六）

右（一六）無畏長老尼の偈

四たび五たび我は精舍を出で去りぬ、心の安靜を得ず、心を歸順せしむることを得ず。（三七）

其の第八夜に於て我が愛欲斷たれぬ、我多數の苦法より〔脫れ〕、精勤を樂めるよりして、愛盡に達し、佛の敎を成せり。（三八）

右娑摩尼の偈

【一】諸經要集三四二、三四三偈。【二】念・擇法・精進・喜・輕安・定及び捨の七をいふ、覺支・覺分・覺意等の異譯あり。【三】此處に云へる世尊とは法身の佛にして色身の佛の意に非ずと解せり。【四】此比丘尼の前身は貧うして穀物を舂きて渡世したるなり。

【五】此の夫は傘を造りて渡世したり。【六】Daddu は惡臭を放つ皮膚病の一種、物を煮る釜の不潔にして惡臭を放てるをいふ、或は Dalidda とす、貧の意。【七】此女もと迦尸國の遊女たりしなり、迦尸とは婆羅奈斯城を首都とせし國なり。【八】註解書にては taṁ を五百金の金と見て、此の五百金の財を價となし云云とせり。【九】六神通の中、宿命通、天眼通、漏盡通の三を云ふ。【一〇】下七五偈註參照。【一一】諸經要集四〇二偈參照、陰曆一箇月を白分黑分の二分に分ち、各分の八日、十四日、十五日の三日を布薩日と稱し、比丘、比丘尼は一處に集會して懺悔の式を行ひ、在家人は八齋戒を持つ、所謂六齋戒日なり。【一二】布薩式は毎半月の八日、十四日、十五日の三日に行ふべき定なれど村落に入るべき用あるため此等の日を變更して七日又は九日、十三日及び望分の初日に行はざるを得ざることあり、之を變改月分と云ふ。【一三】煩惱の熱惱なるに對し涅槃の狀態を清涼なりと云ふ。【一四】無畏と云ふ子（出家して長老となる）ありて後出家したる故に無畏の母と云ふ、此の二偈の中初の一は無畏長老が其の母を誡むるの偈、後の一は母尼の之に答ふる偈なり。【一五】自ら己を呼ぶなり。【一六】愛欲の盡きたるを謂ひ、涅槃を指す。

三頌品第三

我が出家よりして二十五年の間、未だ曾て心の安止を得たることを知らざりき。（三九）

我が未だ歸順せざるや、我心の安靜を得ず、其より（一）時那の敎を記憶して不安を抱けり。（四〇）

我多數の苦法より〔脫れ〕、精勤を樂めるよりして、愛の滅盡に達し、佛の敎を成じぬ、我が愛念の涸らし盡されてより今日は第七夜なり。（四一）

右他の娑摩尼の偈

四たび五たび、我は精舍より出で去りぬ、心の安靜を得ず、心を歸順せしむることを得ずして。（四二）

我が信仰する所たりし彼の尼は我に近寄り、我が爲に法を演說せり、（二）蘊處界の法を。（四三）

我に說き敎へしが如く、我は其の法を聞きて七日の間一跏趺を組みて坐せり、喜と樂とに飽きつつ、第八日に〔愚癡〕の闇塊を破りて我は足を伸せり。（四四）

右鬱多羅尼の偈

涅槃に達するの道なる此等(三)七種の覺支は、佛の指示し給ひしが如く、我は之を修習したり。(四五)

(四)空無相〔定〕は願ふ所に從つて我之を得、佛の御子〔として〕常に涅槃を樂む。(四六)

諸欲の天界に屬するものも、人界に屬するものも、共に斷ぜられ、生死輪廻は盡されて、今や我に再生なし。(四七)

右他の鬱多羅尼の偈

(五)我鷲頂山の日中住より去りて、岸頭に象の暴流を渡れるを見たり。(四八)

一人あり鉤を取りて「足を與へよ」と云ひて請ひ、象の足を伸すや、人は之に騎りたり。(四九)

馴れざるものの馴れ、人人に服從するを見、之によりて我は其より林間に入り、心を定に決めぬ。(五〇)

右柔順尼の偈

(六)「母耆婆」と〔呼び〕汝は林中にありて泣く、己を知れウッビリ、八萬四千の人は總て同く耆婆と名け、此の墓にて焚かれぬ、此の中汝は誰をか哭せるぞ。(五一)

憂に沈める(七)我が娘の憂を除けるが故に、我が胸に立ちて見ること難き箭を拔けり。(五二)

我此の日箭を拔き取りて、(八)饑餓を離れ、寂靜の身となれり、佛法僧、牟尼に歸依し奉る。(五三)

右ウッビリーの偈

佛の敎を說くスッカー尼に事へざる此の王舍城の民は何をか爲せる、蜜を食へるが如く放心せり。(五四)

智ある人は此の滅することなくして噴き出る甘露を吸はんと思ふこと、道行く人の雲を〔望むが〕如し。(五五)

汝スッカー、白淨の法によりて、諸の貪欲を離れ、定に住し、魔王を其の眷屬と共に併せ敗りて、最後身を持せよ。(五六)

右スカー尼の偈

(九)世に出離[の法]あるなし、遠離によりて何をか爲す、諸欲の樂を享けよ、後に至りて悔ゆる勿れ。(五七)

諸欲と諸蘊の縛著は槍と戟とに喩へらる、是等を汝は欲樂と云へど、之我が樂とする所に非ず。(五八)

歡樂は一切處に斷せられ、闇愚の蘊は破られぬ、(一〇)波旬よ、斯の如く之を知れ、魔王よ、汝は[我に]敗られぬ。(五九)

右セーラー尼の偈

(一一)諸仙の[獨り]到るべくして[凡夫には]入り難き處は、少智の婦女は此處に達すること能はす。(六〇)

若し正しく法を觀る人の、心善く定に住し、智慧現前する時は、我等が婦人たるに於いて、何[の障礙]かある。(六一)

歡樂は一切處に斷せられ、闇愚の蘊は破られたり、波旬よ、斯の如く之を知れ、魔者よ、汝は[我が爲に]敗られたり。(六二)

右ソーマー尼の偈

[一]勝者の意、佛のことなり、盲龜の喩の如き世尊の平生敎へ給ひしことを憶ひ起して。 [二]五蘊、十二處、十八界に關して法を說きたるなり。 [三]上二一偈參照。 [四]空等至及び無相等至なり。 [五]靈鷲山を云ふ。 [六]五一偈は耆婆と名くる娘を喪ひて林中の塚間に泣き悲める母を世尊の誡め給ひし偈、此に「母耆婆」と云へる母は親む意の語、我が娘なれども斯く呼べるなり、後の二偈は母の覺を開きて述べたるなり。 [七]娘の爲の憂。 [八]愛、渴愛を云ふ。 [九]魔王とセーラー尼との問答なり、初の一偈は魔王の語にして、後の二偈はセーラーの之に答へたるなり。 [一〇]Pāpimā 惡事を願ひ、惡事をなし、又は惡事に關係するものの意にて魔王の異名なり。 [一一]之もソーマー尼と魔王との應對なり、初の一偈は魔王の言、次の二偈はソーマー尼の語。

四　頌品第四

(一)定心に安住せる迦葉は佛嗣續の兒子にして、宿住智あり、又天道と惡趣とを見る。(六三)

又生の滅盡に達し、上智を得て、所作已に辨じたる牟尼は、此の(二)三種の明智あるによりて三明の婆羅門たり。(六四)

同じくバッダー•カピラーニーは三明を具して死を棄つるものなり、魔王を其の眷屬と共に倂せ敗りて、最後身を持つ。(六五)

(三)我等兩者は世に過難あるとを見て出家せるもの、諸漏を盡し、柔和にして淸涼寂靜となれり。(六六)

右バッダー•カピラーニー尼の偈

〔一〕此の四偈はバッダー•カピラーニー尼が摩訶迦葉の德に擬へて己の德を逃べたるものなり。〔二〕三種の明智とは所謂三明のことにて、六神通の中、宿住通(上に宿住通と云へるもの)天眼通(上に天道と惡趣とを見ると云へるもの)、漏盡通(上に所作已に辨じたる牟尼と云へるもの)の三を云ふ。〔三〕摩訶迦葉と己バッダー•カピラーニー尼となり。

五頌品第五

我出家してより二十五年の間、一彈指の間も心の安息を得ざりき。(六七)

心の安靜を得ず、欲樂の爲に染せられ、我は腕を擴げて泣きつつ精舍の中に入り來りぬ。(六八)

我が歸依者とせし比丘尼は我に近づき來り、我が爲に蘊處界の法を說きぬ。(六九)

彼〔の尼〕の法を聞きて我は一面に坐して(一)宿住を知るに至り、天眼を淸うしぬ。(七〇)

〔他の〕心を知る智を〔得〕、又耳界を淨うし、神〔足〕をも亦我〔之を〕證得し、諸漏の滅盡に達せり、我六神通を證得し、佛の敎を成せり。(七一)

右姓名不詳の某比丘尼の偈

(二)色と、形と、幸運と又譽とに醉ひ、年の若さに心亢りて我は他人を見下したり。(七二)

愚者に言ひそやさるる此の身を樣樣に飾りて、獵夫

の網を張るが如く、妓宅の戸に立ちたり。（七三）

陰なる又陽なる多くの裝飾を見せ、笑顏して多數の人を欺きたり。（七四）

此の己れ今日は髮を剃り、(三)僧伽梨衣を纏ひ、乞食〔の爲に〕遊行し、(四)非尋を得て樹下に坐す。（七五）

天界人界共に有ゆる結縛を斷ち、總て漏を盡して、淸涼寂靜の身となれり。（七六）

右もと遊女たりし離垢尼の偈

思惟の正しからざるよりして、我は欲染に惱まされ、心從順ならずして、散亂せしことあり。（七七）

煩惱の爲に囚へられ、樂觀に從ひ、染著心の虜となりて心の平安を得ざりき。（七八）

瘦せて〔膚色〕黃ばみ、又醜くなりて我は遊行すること七年、晝夜苦み惱みて樂を得ず、（七九）

其より繩を手にして、森林の中に入りぬ、我再び俗〔生活〕をなさんよりは、此處に縊るぞ宜しきと思ひて。（八〇）

繩を堅くして樹枝に縛り、繩を頸に投げ掛けし時、我が心解脫を得き。（八一）

右獅子尼の偈

(五)歡喜尼、〔病に〕冒され、汚れ腐りたる〔此の〕身を見よ、靜穩に歸し、心を安定に任せしめ、不淨〔觀〕を修習せよ。（八二）

此の身の如く、彼の身もあるべく、彼の如く、此もあるべし、凡愚の歡とする〔身〕は、不潔にして惡臭を發つ。（八三）

斯の如く晝夜倦まず之を觀察せば、其より〔汝は〕己の智慧によりて厭ひて〔之を〕見るに至らん。（八四）

我は精勤して如實に〔之を〕尋ね討めたれば、此の身の內我正に之を觀たり。（八五）

其より我は身に於て厭離の念を抱き、内心又欲を離れたり、精勤にして繫結なく、寂靜にして涅槃を得たり。《八六》

右歡喜尼の偈

(六)火と月と日と天とを我は拜し、(七)河岸に赴きて我は水に入りにき。《八七》

多の(八)禁行に凝り固まりて、頭の半を剃り、地上に臥して我は夜食を取らざりき。《八八》

我は嚴飾の欲念〔を抱き〕貪染に惱まされ洗沐塗身によりて此の身を寵したり。《八九》

其より信心を得、得度して出家となり、如實に身を見て、貪染斷せられたり。《九〇》

一切の生有も欲も願も亦共に滅され、我は一切の纏結を離れて心の安靜に達せり。《九一》

右歡喜上長老尼の偈

信心により得度して在家より出家の身となり、彼より此より利養恭敬を熱求して行じぬ。《九二》

我最上の利を捨てて、卑小の利に就き、煩惱の虜となりて沙門の福利を厭ひぬ。《九三》

〔時に〕我室中に坐するや、心に不安生ぜり、我は邪路に陷れり我は愛の虜となれり。《九四》

我が命は短少にして老と病とは〔之を〕害ひ、身は老〔の爲〕に毀らる、放逸なるべき時にあらず。《九五》

如實に諸蘊の起滅を觀察して、心解脫を得て安立し、佛の敎を成せり。《九六》

右ミッタカーリー尼の偈

我在家に住める〔身として〕比丘尼の法を聞き、離塵の法、不滅の道、涅槃を見ぬ。《九七》

我は兒女と財穀とを棄て、髮を落させて、得度し出家の〔身となりぬ〕。《九八》

我は(九)式沙摩那となりて、寂靜の道を修習し、貪欲瞋恚と其の(一〇)共立の煩惱を捨てたり。《九九》

比丘尼の大戒を受けて、前生を追憶し、能く清淨無垢の天眼を修得したり。敗壞因生の諸行を他處に見て、有ゆる煩惱を捨て清涼寂靜となれり。《一〇〇》《一〇一》

右サクラー尼の偈

此の色身に十人の兒を生み、其より年老い力弱りて我は比丘尼の處に到りぬ。《一〇二》

比丘尼は我が爲に蘊處界の法を說き、其の法を聞いて、我は髮を斷ち出家しぬ。《一〇三》

我式沙摩那となるや、天眼は清淨となり、我が嘗て住せし宿住「の事」を知る。《一〇四》

靜穩に歸し、安定に住して、無相念をも修習し、(一一)繼起の解脫を得、取著なくして涅槃を「現せり」。《一〇五》

「我」既に遍く五蘊を證知し、其の根元を斷ちたり、我は堅固體の生、無欲のものとなれり、今や我再び生を受くることあらじ。《一〇六》

右ソーナー尼の偈

(一二)往昔は斷髮一衣垢齒にして、過なきを過ありと思ひ、過あるを過なしと見て周行しぬ。《一〇七》

靈鷲山上に日中の休息をなして歸り、塵垢を離れ給へる佛の、比丘衆に圍繞せられ給へるを見ぬ。《一〇八》

地に膝を衝き禮拜して、面前に合掌するや「世尊は」我に「來れ、跋提」と宣ひぬ、之我が受戒なりき。《一〇九》

央伽・摩揭陀・伐地・迦尸・及び拘薩羅を周遊し、五十年間失なくして民の施食を食みぬ。《一一〇》

有ゆる纏縛より脫れんが爲に、跋提に衣服を奉せる此の有智の優婆塞も亦多の福業を積めり。《一一一》

右跋提尼の偈

(一三)男子は犂を以て田を耕し、種を地に播き、妻兒を

養ひ、財を貯ふ。
我戒徳を具有し、師の敎を行ひ、怠惰せず、散心せず（二二）
して、奈何で涅槃を得ざるべき。
（一四）我水中に足を洗ひ、水の平地より凹處へ來るを見（二三）
て「相を得、其より心を定めて、恰も「御者」の生善き
良馬を「調くるが」如くしぬ。（二四）
其より燈火を取りて我は精舍に入り、臥具を見て、臥
床「の上」に坐しぬ。（二五）
更に針を取りて我は燈心を搔き下ぐるに、燈火の消
ゆると共に、心解脫しき。（二六）
右バターチャーラー尼の偈
男子は杵を手にして穀を舂く、男子は「其の」妻子を
扶助し財物を貯ふ。（二七）
行うて悔ゆるとなき佛の敎を行へ、疾く足を洗うて
一面に坐せよ、一向に心の寂止を求めて、佛の敎を行
へ。（一五）
彼等は此のバターチャーラー尼の敎の語を聞き、足（二八）
を洗ひて、一面に坐し念を心の寂止に專にして、佛の
敎を行へり。（二九）
夜の前分には前生を追念し、夜の中分には天眼を淨
うし、夜の後分には黑闇の蘊を除けり。（三〇）
「座より」起ちて、「バターチャーラー尼の」足を禮し
て「曰へり」、「我等汝の敎を行へり、切利天衆の戰場
に勝ちたる帝釋天に奉事するが如く、「我等も汝に奉
事して」住せん、我等三明あり無漏なり。」（三一）
此等三十人の長老比丘尼はバターチャーラー尼の
處にありて「其の」所知を述べたり。
我先に貧しくして夫なく兒なく、朋友親族もなく、衣
食をも得ざりき。（三二）
鉢と杖とを携へ、家より家に乞食して、寒熱に苦めら

れ我は七年周行せりき。（一二三）

然るに飲食物を得たる比丘尼を見、之に近づき云へり「「我を」出家せしめよ」と。（一二四）

彼のパーチャーラーは亦我を愍みて出家せしめ、其より我を誡めて〔一六〕涅槃の道に我を勵ましぬ。（一二五）

彼の〔尼の〕其の語を聞いて、〔我は〕敎を行ひたり、大姉の誡は空しからず、我は三明ありて無漏なり。（一二六）

右闍陀尼の偈

【一】宿住を知るは宿住通（一）、天眼を淸うするは天眼通（二）、他の心を知る智は他心通（三）、耳界を淨うするは天耳通（四）、神足を證得するは神足通（五）、諸漏の滅盡に達するは漏盡通（六）、以上を六神通と云ふ。　【二】もと遊女たりし女の出家して後得たる安樂の境界を述べたるなり。　【三】大衣、重衣、重複衣と譯す、三衣の一にして上衣を合せ縫ひたるもの、外出又は防寒用として用ふ。　【四】尋（思量）と伺（熟慮）とは一は麁に一は細に分別する精神上の作用なり、此の二は色界初禪まで存し其以上には之なし、故に非尋を得るとは第二禪以上のものとなるを云ふ。　【五】歡喜尼又孫陀利、國美とも云ふ、もと世尊の異母弟難陀（歡喜）の妻と定まりしものなり、此の五偈の中初の三偈は世尊の歡喜尼を敎へ給ひしもの後の二偈は尼自ら述べたるなり。　【六】此の尼初は外道に歸依して苦行を行ひ（二偈）、次には之を廢して身を莊飾し（一偈）、更に歸依して煩惱を斷ち涅槃に達せり（二偈）。　【七】河岸に設けたる禮拜供養の式場。　【八】外道の苦行。　【九】二偈の註を見よ。　【一〇】貪欲瞋恚と共に起り、共に滅する煩惱と云ふ意。　【一一】初向を得れば直に之に續いて起る所の解脫の謂なりと譯せり。　【一二】髮を斷ち一衣を纏ふは尼乾子外道の法なり、楊枝を用ひて齒を磨かざるが故に齒は垢づきたるなり。　【一三】世上の男子は皆斯の如くす。　【一四】原文の意を補うて譯すれば兩足を洗はんとして、三たび灌ぎたる水の中にて、平地より窪地へ流れ來れる洗足の水を見て、暗示を得たり。　【一五】以上二偈はパターチャーラー尼の偈にして、後の三偈は此の尼の敎によりて出家したる三十比丘尼の開悟と其感想とを述べたるなり。　【一六】原語には最上利益の意あり、涅槃を云ふ。

六頌品第六

（一）來るものも去るものも共に、其の道を知らざるに、其の何處より來れる有情を「我が見なり」と云ひて泣き悲むぞ。（一二七）

來り又去るもの道を知るとも爲に憂ふること勿れ、そ
は斯の如き〔去來は〕生あるものの法なればなり。 (一二八)

求められざるに彼處より來り、許されざるに此處よ
り去る、何處よりか來りて少時住み〔たる後〕。 (一二九)

此處よりも〔他の有情〕として去り、彼處よりは他の
有情として來り、死者は人間の形にて轉生し來る、
去れるが如くにして來らば、其處に何の悲むことか
ある。 (一三〇)

實に我が胸に立ちて見難き箭を拔き、憂に沈める我
が兒の憂を拂へり。 (一三一)

我今日箭を拔かれ、饑餒を離れ、寂靜の身となれり、
佛と法と僧と牟尼とに歸依す。 (一三二)

右パターチャーラー長老尼の弟子なる五百尼の偈

我兒の憂の爲に惱み、心亂れ狂ひて、裸身亂髮、處處
を徘徊しき。 (一三三)

街路や、塵塚や、墓所や、大道や、飢え渇きながら徘
徊すること三年なりき。 (一三四)

時に、柔和ならざるものを柔和にし、何物をも畏れ
給はざる正覺者善逝の(二)彌絺羅の都に入り給ふを見
ぬ。 (一三五)

我常の心を〔復し〕得て、禮拜著座しければ、瞿曇は慈
悲を垂れて、我が爲に次第に法を說き給ひぬ。 (一三六)

彼の法を聞き得度し出家の身となりて、專心師の敎
を守り、安穩の道を證せり。 (一三七)

有ゆる憂は斷ぜられ捨られ此に果つべきものたり、
そは諸の憂の生ずる因を我知り得たればなり。 (一三八)

右ヴーシチー尼の偈

(三)汝は年少くして眉目美しく、我も亦年少弱齡なり、
來れ讖摩、五樂を以て共に樂まん。 (一三九)

病みて廢るべき此の腐臭の身に惱まされ、〔且つ之あるを〕恥づ、〔我が〕欲愛は斷じ盡されたり。《一四〇》

㊃諸欲及び諸蘊の縛著は槍と戟とに喩ふべきなり、之を汝は欲樂なりといへど、之は今我が樂とする所に非ず。《一四一》

歡樂は一切處に斷ぜられ、闇愚の蘊は破られぬ、破旬よ、我は斯の如く知る、魔王よ、汝は我が爲に敗られたり。《一四二》

愚者は實を知らずして星宿を禮拜し、林間に火神を祀り、之を清淨なりと思へり。《一四三》

我も亦人間中の最上者なる正覺者を禮拜す、〔我は〕有ゆる苦惱より脫れ、佛の敎を行ふものたり。《一四四》

右識摩尼の偈

莊嚴して美衣を著、華鬘を著け旃檀香を塗り、有ゆる瓔珞を以て〔身を〕覆ひ、侍女の群に傅かれき。〔一四五〕

飮食をも携へ、堅輭の食を夥しく〔携へて〕、家を出で園林に赴きぬ。《一四六》

其處に遊樂嬉戲して、我が家に歸るに當り、精舍の森なる沙祇多なる安繕那林に入りき。《一四七》

〔此處に〕世間の光明なる〔世尊〕を見、禮拜して坐しければ、世間眼〔世間は〕愍みて我が爲に法を說き給ひぬ。《一四八》

大仙の〔敎を〕聞きて、我正理を了解し、卽處に離塵の法、不滅の道に達せり。《一四九》

而して法を了知したる〔我は〕得度して出家の身となり、三明を得たり、佛の敎は空しからざりき。《一五〇》

右善生尼の偈

我は貴くして寶多く財夥しき家に生れ、㊄末提の生みの娘にして眉目形好かりき。《一五一》

王子に求められ、長者の子等に欲しがられ、〔彼等は〕

我が父に書を送りて云へり「我にアノーバマーを與へよ。（一五二）

此の汝の女なるアノーバマーの重を八倍して金と寶とを與へん。」（一五三）

我は世間最勝の無上の正覺者を見て、其の足を敬禮し、一面に坐したり。（一五四）

彼瞿曇は慈悲を垂れて、我が爲に法を說きたまひければ、我は其座に坐しながら第三果に達せり。（一五五）

而して髮を切りて出家得度し、今日より第七夜に我が愛欲は盡されたり。（一五六）

右アノーバマー尼の偈

一切有情中の最上者たる(六)覺者、勇者、我と他の衆多の人とを苦惱より脫れしめたる汝に歸命す。（一五七）

有ゆる苦惱は證知せられ、〔苦の〕因たる愛欲は盡され、賢聖八支道〔及び〕寂滅は我之を獲たり。（一五八）

昔は〔我に〕母子、父兄、又祖母ありき、我は如實に知らず〔安住地を〕見出さずして輪廻せり。（一五九）

我は彼の世尊を見奉りたれば、之は我が最後の身にして、生〔死〕輪廻は斷たれ、今より再生あらじ。（一六〇）

精進努力し、常に專心勇猛にして、相和合せる佛弟子を見よ、之ぞ諸佛の禮拜なる。（一六一）

げにも衆人の利益のために摩耶〔夫人〕は瞿曇〔佛〕を生み奉り、病死の重荷、苦蘊を拂へり。（一六二）

右摩訶波闍波提瞿曇彌の偈

グッター、〔愛して〕兒の如くせる蓄積を棄てて利益〔を得ん〕が爲に汝は出家したれば、汝〔此の利益〕を增長して、心の因となること勿れ。（一六三）

心の爲に欺かれたる有情は魔王の國土を樂み、智慧なくして轉轉生死を經。（一六四）

欲愛、瞋恚、及び身見、戒禁取、及び第五に疑。（一六五）

比丘尼は此等下分の結使を棄てたれば、此等は再び來ることあらじ。（一六六）

貪、慢、無明と調戲とを除き、諸結を破りて、汝は苦惱を盡さん。（一六七）

生〔死〕轉生を擯け、再生を知りて、現生に離欲安靜の人とならん。（一六八）

右グッター尼の偈

心の安息を得ず、心從順ならざるより、四たび五たび精舍を出でたり。（一六九）

〔識摩〕尼に近づきて、我は恭く〔道を〕訪ひ、尼は我が爲に界と處との法を說きたり。（一七〇）

(四)聖諦、(五)根、(五)力と(七)覺支、八支道との、最上利に到るべき、（一七一）

彼の〔尼の〕語を聞き、敎を行うて、夜の初分に前生を憶ひ。（一七二）

夜の後分には愚闇の蘊を破れり。（一七三）

其の時我は又喜樂を身に感じて住し、第七〔夜〕には闇蘊を破りて、(七)兩足を伸せり。（一七四）

右ヂャヤー尼の偈

【一】此の六偈の中、初の四偈はパターチャーラー尼の幼兒を失ひたる五百の母のために說く所、後の二偈は此等五百人の一人づつ唱へし所なりと云ふ。【二】Mithila 東弗提訶利の首都。【三】此の六偈は魔王と識摩との應對なり、初の一偈は洲王の語、次の五偈は識摩の語、識摩はもと摩揭陀國頻毗沙羅王の妃たり。【四】上五八偈參照。【五】Majjha【六】覺勇又は覺雄として一語と見るも可なり。【七】跏趺を組みて入定思惟したるなり。

七頌品第七

男子は杵を携へて穀を舂き、男子は妻子を養ひ財を貯ふ。（一七五）

行うて後に悔なかるべき佛の敎に勤み、疾く足を洗うて一面に坐せよ。（一七六）

心を定著して靜穩に歸し安定に住せしめ、他の爲めに諸行を觀察せよ。（一七七）

我彼の〔尼の〕語・バターチャーラーの敎を聞いて、足を洗ひ一面に坐しぬ。（一七八）

〔而して〕夜の初分に前生〔の事〕を追憶し、夜の中分には天眼を淨うし、（一七九）

夜の後分には闇蘊を破り、而して三明を獲、〔座より〕起ちて汝の敎を行ひ果せり。（一八〇）

〔我は〕忉利天衆の、戰場に勝てる帝釋天に奉事するが如く、〔汝に奉事して〕住せり、我は三明ありて無漏なり。（一八一）

右ウッタラー尼の偈

諸根を修練したる比丘尼は念を定め、安息の道、諸行寂滅の安樂を了知す。（一八二）

（一）誰を〔師と〕仰ぎて、汝は頭を圓くし、沙門尼の相をなせるや、汝異敎を喜ばざるや、如何なれば愚にして之を行ふぞ。（一八三）

之より他なる異敎は見を據とせり、彼等は法を知らず、法に熟せず。（一八四）

釋迦族に生れ出でたまへる佛・無等倫の人あり、彼我が爲に諸見度脫の法を說きたまふ、（一八五）

苦、苦の生起、苦の度脫、又諸見の寂滅に達する賢聖八支道となり。（一八六）

彼の〔佛の〕語を聞き、〔其の〕敎を樂みて住し、三明を獲、佛の敎を成せり。（一八七）

一切處に歡樂を斷じ、闇蘊を破れり、波旬斯の如く之を知れ、惡魔汝は我に敗られたり。（一八八）

右チャーラー尼の偈

〔正〕念あり〔五〕眼ありて、諸根を修練したる比丘尼は善良の士の受用する所たる寂靜の道を了知す。

（一八九）

如何ぞ生を喜ばざる、生あるものは諸欲を享く、欲樂を享けよ、後に至りて悔ゆることなかれ。（一九〇）

生あるものには死あり、手足を切斷せられ、殺戮、捕縛の虞あり、生あるものは苦に會ふ。（一九一）

釋迦族に生れ、〔他に〕敗らるることなき正覺者あり、彼我が爲に生の超脫の法を說き給へり、（一九二）

苦、苦の生起、及び苦の度脫、苦を滅するの道なる賢聖八支道。（一九三）

彼〔の佛〕の語を聞き、〔其の〕敎を樂みて住し、三明に達し、佛の敎を果せり。（一九四）

一切處に歡樂を滅し、闇蘊を摧けり、波旬、斯の如く〔之を〕知れ、汝は我が爲に敗られたり。（一九五）

右ウパチャーラー尼の偈

〔一〕魔王とチャーラー尼との問答なり。

八頌品第八

戒德を具有し、諸根を攝護する比丘尼は自らにして美味具はれる寂靜の道を得ん。（一九六）

忉利天と、耶摩天と、又兜率天衆と、化樂天と及び他化自在天衆と、汝が昔住みしとある此〔等諸天〕に心を定めよ。（一九七）

忉利天と、耶摩天と、兜率天衆と、化樂天と、他化自在天衆と、（一九八）

〔此等は〕生より生〔を經〕、常に身を尊しとなし、身を追ひて生死を反覆す。（一九九）

總て世界は〔欲火に〕燒かれ、燃され、總て世界は〔欲・愛・煩惱に〕焦され、搖がさる。（二〇〇）

搖がすべからず、計るべからずして、非凡の人に受

用せらるる法を、佛は我が爲に說かせ給ひ、此處に我が心は欲を離れたり。（二〇一）

我は其の語を聞き敎を樂みて住し、三明に到達し佛の敎を成せり。（二〇二）

一切處に歡樂を除き、冥蘊を解けり、波旬、斯の如く「之を」知れ、魔者、汝は我が爲に敗られぬ。（二〇三）

右シースーパチャーラー尼の偈

九頌品第九

（一）ヴッダ、俗世に汝の愛欲生ぜざれ、愛兒よ、再再苦惱の分取者となることなかれ。（二〇四）

ヴッダ、欲を無くし疑を解き、清涼善順にして、漏なき智者は安樂にして住す。（二〇五）

此等諸仙の「正」見に到らんが爲に行へる道を、汝ヴッダ、苦惱を盡さんが爲に增修せよ。（二〇六）

我が母は愛欲を離れて此の義を說く、我に對する汝の愛欲は無きが如くなり。（二〇七）

ヴッダ、諸の有爲の法には、卑きも尊きも中なるも、些も微量も我が愛欲は之あらず。（二〇八）

我精勤に禪思して、有ゆる煩惱を盡し、三明に到達し佛の敎を成せり。（二〇九）

げにも我が母は、大なる鉞を投じたり、最上利の義を含める、偈頌「を說きて」、猶ほ、「他の」慈悲者の如く。（二一〇）

我は此の母の誡の語を聞きて、正しき感激を得、安穩の境に達せんとす。（二一一）

我は專心努力して晝夜懈惓なく、母の爲に勵まされて最上の寂靜を得たり。（二一二）

右ヴッダ母尼の偈

【一】此の八偈はヴッダ長老と其母にして出家したるヴッダ母尼と

の間の應對なり、初の二偈は母尼、最後の三偈は長老の述べし所なり、長老偈三三五—三三九偈參照。

十頌品第十

良友を有することは、牟尼の世間に示して稱揚し給ふ所、良友に奉事すれば愚者も賢者となる。（二一三）

正士には奉事すべし、［然すれば］奉事者の智慧は增加すべく、正士に奉事すれば、あらゆる苦惱より脫れん。（二一四）

（二）苦をも知れ、苦の集をも滅をも、八支道、四聖諦をも亦。（二一五）

「婦女たることは苦なり」と、調御可化丈夫者は說きたまへり、夫あるは苦なり、或ひは一たび兒を產むあり、（二一六）

孱き身にて［自ら］首を斬るあり、毒を仰ぐあり、死兒胎內にあれば兩者共に滅ぶるに至る。（二一七）

我分娩の時近づけるに［道を］往きて、己の家に達せずして產み、［而して］我が夫は、路上に死せるを見たり。（二一八）

兩兒は死し、夫は亦貧苦の爲め路上に死し、母父兄弟は同じき火葬堆に燒かれたり。（二一九）

一族滅び家貧しき者汝苦惱を受くること無量、更に又轉轉すること幾多千生ならん。（二二〇）

又之を墓所の中に見たり、兒の肉は噉はれたり、一族を喪ひ、他には嘲られ、夫を失ひたる［我は］不滅［の涅槃］を得たり。（二二一）

我は不滅に達する賢聖八支道を修習し、涅槃を證知し、法鏡を見たり。（二二二）

我は箭を拔き、擔を卸し、我が爲すべきことを爲し終れり、機舍瞿曇彌長老尼は心善く解脫して此［の偈］を

唱へぬ。

右機舍羅曇彌尼の偈　(二三三)

【一】苦・苦の集・苦の滅・八支道、之を四聖諦と云ふ。

十一頌品第十一

(一)我等母娘は共に同じき人を夫としけるが、我驚懼［を抱き］、烈しく身毛の彌立つ［を感じたり］。　(二三四)

母と娘との我等の、同じき人の妻となれると、愛欲の不淨異臭にして、苦患多きは呪はしきかな。　(二三五)

諸欲に患難を見、出離を堅固に安隱なりと［見］、王舍城に於て我は出家得度しき。　(二三六)

宿世を知り、天眼を清淨にし、［他の］心に關する智慧も、天耳をも清淨にせり。　(二三七)

我神［足］をも證知し、漏盡に達せり、我六神通を得、佛の敎を行じ了れり。　(二三八)

我神［足通］を以て四馬［を附けたる］車を化作し、世間の主にして、榮多き佛の御足を禮して［一面に立てり］。　(二三九)

(二)頂上全面に花咲ける樹に近づき、汝は唯一人樹下に立つ、汝に第二人者なし、奈何ぞ汝愚者は誘惑者を怖れざる　(二四〇)

［汝の］如き誘惑者百千集りてあらんとも、［我は］一毛も動かさじ、震はさじ、汝一人、我に何をか爲さんとする。　(二四一)

我隱沒せん、或は汝の腹中に入らん、眉間に留まらん、留まれるを汝は見ざらん。　(二四二)

心を克服し、［四］神足を修習し、六神通に達し、佛の敎を行ぜり。　(二四三)

諸欲と五蘊に纒綿せるとは、槍と戟とに喩ふべきなり、汝の欲愛と呼べるは、其は今我が非樂とする所。

（二三四）

一切處に歡樂を斷ち、闇蘊を破れり、波旬斯の如しと知れ、魔王、汝我がために敗られたり。（二三五）

右蓮華色尼の偈

【一】長老偈一二七、一二八偈參照、此の男をダッパと呼べり、後出家したり。 【二】以下魔王と尼との問答。

十六頌品第十二

（一）我水汲女〔となりて〕、寒時常に水に入れり、諸姉に鞭たるるを怖れ、語もて罵らるるを苦として。（二三六）

（二）婆羅門汝は何人を怖れて、嚴しき寒さに堪へて、四肢顫ひながら、常に水に入るぞや。（二三七）

汝プンニカーは〔我が〕福業を行び、惡業を阻むることを知りて、而も汝は之を問ふ。（二三八）

〔人の〕老いたるも幼きも惡業をなさば、彼は〔其の〕水に浴してぞ惡業より脱るる。（二三九）

孰の癡人か癡人汝に、此の水に浴して惡業より脱るべきことを說き敎へたる。（二四〇）

總て蛙も龜も、龍も鰐も、其他の水を潜るものは天に生るべきに非ずや。（二四一）

屠羊・屠猪・捕魚・獵鹿の人・盜賊・刑人・及び他の造惡の輩も水に浴して惡業より脫れん。（二四二）

此等の諸河若し汝が先に犯したる邪業を運び去るとせば、此等は〔同じく〕善業をも運び去りて、汝は善業なき身とならん。（二四三）

婆羅門、汝は〔惡業を〕怖れて、常に水に入る、婆羅門、汝其惡業を犯さざれ、寒氣汝の膚を損はざれ。（二四四）

（三）我が邪道を踏めるを汝は聖道に導きたり、大姉は〔是れ〕水浴なり、汝に此の衣を奉施せん。（二四五）

（四）衣は汝のものとせよ、我は衣を望まず、汝若し苦惱

を怖れ、汝若し苦惱を愛樂せずば、 (二四六)
邪業を造ることなかれ、陽にも陰にも。當來又は現在に
汝若し邪業を造らば、 (二四七)
汝は苦惱を脱ることなく、それより免ることとも
なからん。汝若し苦惱を怖れ、汝若し苦惱を愛樂せ
ずば、 (二四八)
汝斯の如き佛と法と僧とに歸依し、戒法を守れ、之れ
汝の利益のためならん。 (二四九)
(五)我斯の如き佛と法と僧とに歸依し、戒法を守らん、
之れ我が利益のためならん。 (二五〇)
先には我婆羅門族者なりしが、今日我は眞に婆羅門
たり、三明を得、智慧を具足し、聞經者たり、淨業
者たり。 (二五一)

右ブンニカー尼の偈

【一】もと給孤獨長者の家の婢女たりしが、後解放せられて出家したり。【二】苦行婆羅門と尼との問答。【三】以下婆羅門の語。【四】尼の語。【五】婆羅門。

(一)二十頌品第十三

(二)我が髪は黑くして、蜜蜂の色の如くなりしが、其が
「今」老の爲に麻や樹の皮に等しくなりたり、實語者
の語は相違あることなし。 (二五二)
我が頭は香氣ありて香奩の如く、花に滿ちたりき、
其が「今」老の爲に兎毛の香をなす、實語者の語には
相違あることなし。 (二五三)
よく植えられ、よく茂れる森の如く、「我が髪は」櫛と
針とを以て端を梳りて飾られたり、其が「今」老のた
めに處處稀薄となれり、實語者の語には相違あると
なし。 (二五四)
(三)柔かにして香ある「髪」をば、黃金を以て飾り、組

髮として飾りたるは美しかりき、其の頭髮は〔今や〕老の爲に脱け落ちぬ、實語者の語には相違あることなし。（二五五）

先に我が眉は畫師の巧に畫きたる繪の如く美しかりき、其が〔今〕老によりて、皺の爲に垂れ下れり、實語者の語には相違あることなし。（二五六）

眼は光ありて愛らしく、摩尼珠の如く紺色にして大なりき、其が〔今〕老の爲に損はれて光なし、實語者の語には相違あることなし。（二五七）

年若かりし時〔我が〕鼻は平滑にして高く、釣合ありて美しかりき、其が〔今〕老の爲に美を失へるが如し、實語者の語には相違あることなし。（二五八）

我が耳朶は先には、巧に造り、巧に調へたる臂環の如くなりしが、其が〔今〕老によりて、皺の爲に垂れ下れり、實語者の語には相違あることなし。（二五九）

我が齒は、先に芭蕉の新芽の色に似て美しかりしが、其が〔今〕碎け落ち〔又は〕麥色に黄めり、實語者の語には相違あることなし。（二六〇）

森林内に林住者として、拘耆羅鳥の如く、美妙の音聲〔をなせり〕、其が〔今〕老の爲に處處中斷す、實語者の語には相違あることなし。（二六一）

我が頸昔はよく（四）磨きたる金螺の如く、美しかりしを、其は〔今〕老の爲に傷けられ、曲げられぬ、實語者の語には相違あることなし。（二六二）

我が兩腕は先に圓き鐵桿に喩へられて美しかりしが〔今は〕力弱りて波吒利華の如くなれり、實語者の語には相違あることなし。（二六三）

我が手先は、滑かに柔かに、金を以て飾りたりしが老の爲に〔樹の〕根や幹の如くなれり、實語者の語には相違あることなし。（二六四）

我が二の乳房は昔肉付好くして圓く、相釣合ひて仰ぎたりしが、〔今は〕水なき水風箱の如く垂れ下りてあり、實語者の語には相違あるなし。　(二六五)

我が身體はもと巧く磨れたる黃金の板の如く美しかりしが、〔今は〕細き皺の爲に覆はる、實語者の語には相違する所なし。　(二六六)

我が兩の大腿はもと象の鼻の如しとされて、美事なりしが、〔今は〕老の爲に竹筒の如くなれり、實語者の語には相違する所あらず。　(二六七)

我が兩脚は昔滑かなる黃金の脚環を以て飾りて、美事なりしが、此等は〔今〕老の爲に胡麻の莖の如くなりたり、實語者の語には相違する所なし。　(二六八)

昔我が兩の趾は綿を滿せる〔履に〕似たりとせられ、美しかりしが、之は〔今〕老のために顫ひ皺寄れり、實語者の語には相違あることなし。　(二六九)

〔我が〕此の身は斯の如く弱りて、衆苦の依る處となり、膏脂なく、廢屋〔の如く〕なれり、實語者の語には相違あることなし。　(二七〇)

右菴婆波利尼の偈

(五)〔婆羅門は云へり〕、「汝我を觀ては沙門と〔云ひ〕、目醒めては又沙門と〔云ふ〕、沙門の〔德〕をのみ稱揚せるが、〔汝〕沙門尼たらんとするや。　(二七一)

汝多くの食物と飲料とを沙門に施す、ローヒニー、〔我〕今汝に問ふ、何に由りてか、汝は沙門を愛するぞや。　(二七二)

業をなすことを厭ひ、怠惰にして他人の施に依りて活き、他に寄食して〔而も〕旨きを好めり、何に由りてか汝は沙門を好愛するぞや。」　(二七三)

〔ローヒニーは云へり〕「父、久しうして初めて汝は我に沙門の〔事を〕問ふ、〔我〕汝に沙門の智慧と戒德

と勇猛精進とを說かん。 (二七四)

業をなすを好みて、怠惰ならず、最勝の業をなすものにして、貪染と瞋恚とを捨つ、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。 (二七五)

作淨者は(六)三種の邪業の根を絕す、其の邪業は總て捨てられたり、是に由りて、沙門は我が愛好する所たり。 (二七六)

彼等の身業は清淨に、語業も亦た同じく、彼等の意業は清淨なり。是に由りて、沙門は我が愛好する所たり。 (二七七)

塵垢を離れて內外清淨なると硨磲眞珠の如く、淨白の法に滿ちたり、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。 (二七八)

多聞にして法を護持し、聖にして法によりて活き、義と法とを說く、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。 (二七九)

多聞にして法を護持し、聖にして法によりて活き、心を一境にして〔正〕念あり、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。 (二八〇)

遠く〔林間に〕入りて〔正〕念を失はず、(七)神呪を誦して〔心〕浮虛ならず、苦惱の極際を知る、是によりて沙門は我が愛好する所たり。 (二八一)

村里を出で去るに、何物をも願ることなく、貪る〔心〕なくして去る、是に由りて、沙門は我が愛好する所たり。 (二八二)

彼等は自物を庫中に藏さず、鍋にも筐にも〔藏すこと〕なく、既に調熟したるを求む、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。 (二八三)

彼等は貨幣を手にせず、金も銀も〔手にすること〕なく、現在によりて生く、是に由りて沙門は我が愛好する

所たり。（二八四）

異れる族、異れる土地より〔來りて〕出家せるに、彼等は互に相和親す、是に由りて沙門は我が愛好する所たり。」（二八五）

〔婆羅門は云へり〕、「ローヒニー、實にも汝は利益の爲に我等の家に生れ出たり、佛と法と僧とに信心あり、強き恭敬の念あり。（二八六）

是れ汝は此の無上の福田を知るが故なり、此等沙門は又我が襯施を受けん、此處に我等の夥しき供物設けられん。（二八七）

汝若し苦を怖れ、汝若し苦を厭はば、佛と法と又た其の僧とに歸依し、戒法を護れ、これ汝の爲に利とならん。（二八八）

我は佛と法と又其の僧とに歸依し、戒法を持たん、之我が爲に利益とならん。（二八九）

「先には我（八）婆羅門族者なりしが、今は婆羅門なり、三明あり聞經者たり、得道者たり、淨業者たり。」（二九〇）

右ローヒニー尼の偈

（九）〔優波迦は云へり〕「我先には執杖〔道士〕なりしが、今は獵鹿夫となりて、愛欲、淤泥、怖畏より〔脫れ〕、彼岸に達すること能はず。（二九一）

チャーバーは、我は彼の女に執心せりと思ひて、兒を戯かせり、チャーバーの愛繫を捨てて、我は再び出家せん。」（二九二）

〔チャーバーは云へり〕、「大勇者よ、我に對して怒ることなかれ、大智者よ、我を怒ることなかれ、そは忿怒に身を滅すものには清淨なし、〔同じく〕苦行あることなければなり。」（二九三）

〔優波迦〕「〔我は〕那羅〔村〕より去らん、誰か此の那羅

〔村〕に住まんや、〔汝は〕婦女の形色を以て法によりて活くる沙門を縛す。　（二九四）

(10)「チャーバー」「來れ、迦攞、還れかし、前の如く諸欲を享けよ、我も汝に服し、我が親族たるものも亦〔汝に服せり〕。」　（二九五）

〔優波迦〕「チャーバー、汝が今語る所の四分一だも〔汝の愛〕あらば其は汝に染著せる男子には實に大なる事たり。」　（二九六）

〔チャーバー〕「山巓にありて、枝條調ひ、花咲ける葛の如く、花咲ける柘榴の如く、島の中なる波吒梨花の如く、赤旃檀を以て四肢を塗り、最上の迦尸衣を著け、眉目好き此の我を、如何で汝は捨てて去るぞや。」　（二九七、二九八）

〔優波迦よ〕、「猶ほ鳥師の鳥を繋がんと願へるが如く〔するも〕、汝は虚の形色を以て、我を縛し得ざるべし。」　（二九九）

〔チャーバー〕、「迦攞、此の又た我が兒なる果は汝に生じたり、此の兒を有てる我を如何で汝は捨てて去るぞや」。　（三〇〇）

〔優波迦〕、「智慧ある人は兒を捨つ、これより親族、其より財、大雄者は、象の縛を斷つが如く、それを捨つ」。　（三〇一）

〔チャーバー〕、「今汝の此の兒を杖を以て、又は刀を以て、地上に於て打たん、〔斯くせば〕兒の憂の爲に〔汝は〕去らじ」。　（三〇二）

〔優波迦〕、「假令〔汝〕兒を野干、〔又は〕犬に與へんとも、兒を設けたる汝賤女、〔汝は〕再び我〔が心〕を回さざるべし。」　（三〇三）

〔チャーバー〕「さらばよし、迦攞、今汝は何處に住せんとする、何の村邑、聚落、都府、王城に〔往かんとす

る」」。〔三〇四〕
〔優波迦〕「我先には徒を有し、沙門ならずして沙門の
思をなし、村より村に、都府王城を徘徊したり。〔三〇五〕
彼の世尊覺者は尼連禪河の邊に於て、一切の苦惱を
捨てんが爲に有情の爲に法を說き給ふ、我は彼の許
に往かん、彼は我が師たるべし」。〔三〇六〕
〔チャーバー、〕「無上の世尊に〔我が〕禮拜を傳へよ、
右繞三匝して恭敬の意を表せかし」。〔三〇七〕
〔優波迦〕「チャーバー、汝の語る所、之我が得る所な
り、今無上の世尊に〔汝の〕禮拜を傳へん、右繞三匝し
て恭敬の意を表せん」。〔三〇八〕
其より迦攞は去りて尼連禪河の邊に赴き、彼は正覺
者の不滅の道を說きたまへるを見たり、〔三〇九〕
苦と、苦の生起と、苦の超越と、苦の息滅に至る賢
聖八支道とを。〔三一〇〕

彼の足を禮し、彼を右繞三匝して、チャーバーの爲に
〔敬意を〕表し、出家得度して三明に通じ、佛の敎を成
せり。〔三一一〕

右チャーバーの偈

(二)〔婆羅門〕、「汝は(三)先に餓鬼兒を啖ひ、汝は晝と
なく夜となく甚く思ひ惱みたり。〔三一二〕
婆羅門女よ、今日、〔汝は〕此の總て七人の兒を(四)啖
へり、ヴーセッチーよ、汝は何故に强く思ひ惱まざ
る」。〔三一三〕
〔ヴーセッチー〕「我が多數百の兒、又婆羅門、汝及び
汝の數百の親族衆は過去世に於て啖はれぬ。〔三一四〕
我は生及び死の所依處を知るが故に憂ひず、泣かず、
又我は思ひ惱むとなし」。〔三一五〕
〔婆羅門〕「實に未曾有なり、ヴーセッチー、汝斯の
如き語をなす、汝何人の法を知りて、斯の如き聲を

なす」。

〔ヴーセッチー〕、「婆羅門、彼の正覺者は彌絺羅城邊にありて、一切苦惱捨離の爲に、有情に法を說きたまへり。（三一六）

婆羅門、我は此の應〔供〕者より(四)生質なき法を聞きて、卽座に正法を了知し、兒の憂を除けり」。（三一七）

〔婆羅門〕「我も亦彌絺羅城の邊に行かん、恐くは彼世尊は我を有ゆる苦惱より拯ひたまはん」。（三一八）

婆羅門は解脫を得、本質を除ける佛を見、苦惱の彼岸に達したまへる牟尼は、彼が爲めに法を說きたまへり、（三一九）

苦と、苦の生起と、苦の超越と、苦の息滅に達する賢聖八支道とを。（三二〇）

卽座に正法を了知して彼は出家を願へり、善生は三夜にして三明に達せり。（三二一）

〔婆羅門は御者に告げて云へり〕「さて、御者、往いて此の車を婆羅門婦に還し、〔我が〕健かなることを婦に語り、今婆羅門は出家し、善生は三夜にして三明に通せり〔と云へ〕」。（三二二）

其より御者は車と千金とを携へ、〔歸て〕、婦に〔婆羅門の〕健かなることを語り、「今婆羅門は出家得度し、善生は三夜にして三明に通達したり」といへり。（三二三）

〔婆羅門婦〕、「御者、我は〔夫〕婆羅門の三明を〔得たることを〕聞き、此の馬車と千金とを祿物として汝に贈らん。」（三二四）

〔御者〕「婦、馬車も千金も共に汝のものとせよ、我も勝智者の許にありて出家せん。」（三二五）

〔婆羅門婦は娘孫陀利に告げて云へり〕、「象・牛・馬・摩尼・耳環、家にある寶物を捨て、汝の父は出家しぬ、孫陀利、富を享有せよ、汝は家の嗣續者なり」。（三二六）

〔孫陀利〕「象牛馬、摩尼耳環、家にある樂しきものを捨てて、我が父は兒の憂に思ひ惱みて出家したり、我も亦我が弟の憂に惱みて出家せん。」 (三二八)

〔婆羅門婦〕「孫陀利、汝の望める其なる思惟成就せんことを、〔戸邊に〕立ちて〔得る〕團食・遺穗・糞掃・衣服・此等を受用するものは來世に於て煩惱なし。」 (三二九)

〔孫陀利、其の師たりし尼に白して云へり〕「大姉、我式沙摩那となりて、天眼清淨となり、我が前に住せし如く宿世を知れり。 (三三〇)

長老尼衆の光明たる汝善妙〔の師〕、汝によりて、三明に通じ、佛の敎を成せり。 (三三一)

大姉、我に容せ、我舍衞城に赴かんと欲す、尊き佛の傍に於て我は獅子一吼せん」。 (三三二)

〔孫陀利自ら呼びて云へり〕、「孫陀利、金色、金膚にして、調柔し何物にも怖ち畏れざる正覺者を見よ」。 (三三三)

〔更に佛に白して云へり〕「孫陀利の來るを見たまへ、解脫を得、本質を無くし、貪染を離れ、結縛を去り、義務已に果して、煩惱なき、 (三三四)

彼女は婆羅尼城より汝の許に來れり、大雄〔尊〕、聲聞女孫陀利は汝の足を禮す。 (三三五)

「婆羅門よ、汝は佛、汝は師、我は汝の女なり、汝の口より生れたる實子にして義務を果し、煩惱を盡せり」。 (三三六)

〔佛〕「善尼、汝の來りしことは是なり、汝の來りしことは非ならず、そは調柔を得て、師の足を頂禮し、貪染を離れ、結縛を解き、義務を終へ、煩惱なきものは斯の如くして來ればなり。」 (三三七)

右孫陀利尼の偈

（二五）年若く、浄衣を纏へる「身として」我曾て法を聞きぬ、「聞いて」精勤なる我は正理を了解しぬ。（三三八）

其より我は、あらゆる欲の上に厭嫌の情を起すこと多く、（二六）己身に怖畏あることを見て、出離をぞ願ひたる。（三三九）

我親族の羣と奴僕傭使とを捨て、村邑と實りよくして樂むべく喜ぶべき田野とを「捨て」最多き財産を捨てて我は出家しぬ。（三四〇）

斯の如く信仰によりて、善く說かれたる正法に於て出家して、一物をも得んと望まず、金銀を捨てたる我は、再び「之を求めて」來らず、これ我に適せりとせんや。（三四一）

金と銀とは覺悟と寂靜のためにあらず、之は沙門に適はしからず、之は尊き財にあらず。（三四二）

貪と憍と愚癡と（二七）塵垢の增長と疑惑と多の懸念とあり、此處に堅固なく住立あるなし。（三四三）

此處に樂み、醉ひ、心汚れたる人人は互に相爭ひ、廣く諍論をなす。（三四四）

殺害・捕縛・苦責・破滅・憂悲と、諸欲を縱にする人の災禍を示すと夥し。（三四五）

親族は我を敵の如くにす、「彼等」何故に我を諸欲に縛せんとするぞ、我は出家して諸欲に怖畏を見るとを知れ。（三四六）

諸漏は黃金によりて斷じ盡さるることとなし、欲は無慈悲なる殺害者なり、敵人なり、（二八）荆棘なり、繫縛なり。（三四七）

我が親族は我を敵の如くにす、「彼等」何故に我を諸欲に縛せんとするぞ、我は出家し、剃髮し、僧伽梨衣を纏へるとを知れ。（三四八）

「門邊に」立ちて「得たる」食、遺穗、糞掃衣と、之こそ

は我に適はしけれ、〔之〕家を捨てたる人の生活の要具なり。（三四九）

大仙は天界人界共に其の欲を棄てたり、彼等は安隱の處に於て得脱し、彼等は動なき樂を得たり。（三五〇）

諸欲の上には（一九）護あるなし、我之を追求することなからん、諸欲は無慈悲なる殺害者なり、苦にして火聚に喩ふべきものなり。（三五一）

之には障あり難あり、虞あり、荆あり、此の貪は極めて不平等に、且つ大にして愚癡に向へり。（三五二）

〔貪は〕患難なり、恐怖の相なり、諸欲は蛇の頭に喩ふべきものたり、これを喜ぶものは、闇昧なる愚人と凡夫となり。（三五三）

此の世に於ける多くの無智なる輩は諸欲の泥中に陷りて、生又死の終を知らず。（三五四）

諸欲の因により、惡趣に至るべき道、己の病〔苦〕を起すこと多き〔道〕を人人は歩めり。（三五五）

斯の如くにして諸欲は敵意を生むものなり、苦責、染汚、俗樂なり、（二〇）束縛せらるべく、〔而して我等を〕死に縛するものたり。（三五六）

諸欲は狂亂、浮躁にして、心を動搖せしむるものなり、有情を惱惑せんがために、魔王は直に〔網を〕張れり。（三五七）

諸欲には限りなき災禍あり、苦多く、毒大にして、甘味少し、〔欲は〕爭鬪を起し、〔人の〕光輝ある側面を損す。（三五八）

我斯の如き諸欲の因を滅して、常に涅槃を喜とし、〔再び〕之に還ることなからん。（三五九）

我諸欲の清涼を求むるものとして、鬪をなし、此等の結縛を斷じ盡さんがために精勤して住せん。（三六〇）

我は憂なく、塵なく、安隱にして直く聖き八支ある、

此の道によらん、之によりて諸大仙は〔輪廻の暴流を〕超えたり。（三六一）

法に立てる此の須婆、鍛冶の女を見よ、彼の女は（三）離欲〔の道〕に達して樹下に禪思す。（三六二）

今日出家して八日なり、信心あり、正法によりて美なり、蓮華色尼によりて懐けられ、三明あり、死に克てり。（三六三）

（一三）此の比丘尼は（一四）自由にして負債なく、諸根を修練せり、あらゆる纒結を解き、義務を果して、煩惱なきなり。（三六四）

此〔の尼〕に天帝釋は來り天子の羣を連れ、神通によりて近き來り、生類の長者は鍛冶の女なる須婆を禮拜す。（三六五）

鍛冶の女須婆尼の偈

【一】此の品二十頌品と云へど十九・二十・二十一・二十六・二十八等一一異れる頌數より成れり。【二】菴婆波利はもと毘舍離城の遊女にして城外なる其の林園中に精舍を捧へて佛に奉施せしことあり、後其子にして出家せる毘瑞憍陳如長老の爲に度せられ、比丘尼となれり。【三】黃金金剛石等を以て莊飾したる黑髮の房、又は柔かなる黃金の針を以て捌きて飾りたる髮とも解せり。【四】原典の異るに隨ひ原語一致せず、幾樣にも譯し得べし、今は最も隱富なりと思はるるものによる。【五】以下二十偈はローヒニー尼に關する偈。【六】貪瞋癡の三不善根を云ふ。【七】長老偈二偈註參照。【八】生れのみの婆羅門と云ふ意にて、聊か輕侮の語なり。次の婆羅門と云へるは然らず。【九】優波迦は世尊に伽耶成道の後婆羅捺斯城に赴かせらるる途中、會談し給ひし邪命外道なり、彼其の後獵夫の村に入り、一獵夫の娘チヤーパーを得て妻として獵夫の生活をなせしが、世尊の舍衞城に居給ひし頃、來りて比丘となり、チヤーパーも同じく比丘尼となれり、之は往事を追憶して唱へし偈なり。【一〇】迦攞は優波迦の姓なり。【一一】孫陀利在俗の時、其父善生婆羅門は一兒を喪ひて、憂に堪へず、ヷーセッチー尼の處に來りて二偈を唱へ、尼は之に對して二偈を唱へたり、父は之を聞いて佛の處に走り、佛の敎を聞いて出家すれば、其の女孫陀利も亦出家し、後佛の處に赴きたり。【一二】之は此の尼の前生物語に關するもの丶如し。【一三】原文には Khād の字を用ひあれど、單に喪ふの意なるが如し。【一四】長老偈一五二偈註を見よ。【一五】須婆尼出家の後親族等還俗を勸めたれば、尼は此等の偈を以て答ふ。【一六】Sakkāya（サツカーヤ）普通單に身と譯すれど我身己身と譯する方當れる

が如し、人格體又は個性などと稱するものを指す。【一七】貪等の汚塵を増長すること。【一八】Sallabandhanā 幾條にも譯し得らるが如し。【一九】Tāpanī 涅槃を云ふ。【二〇】Bandhaniyā 縛せらるべきの意 リス・デヸヅ夫人は譯して To bind us to the world とせり。【二一】最上果。【二二】須婆尼自身を指す。【二三】Bhujissā 解放せられたる婢女の意。

三十偈品第十四

樂しき耆婆迦の庵婆林に赴かんとする比丘尼須婆を好色漢ありて道を遮れり、時に須婆は彼に語げて曰へり、(三六六)

「汝」我を遮りて立つ、我汝に對して何の罪かある、汝、男子の女出家人に觸るるは宜しからず。(三六七)

我が師の尊き教に於て、善逝は、戒學を說き給ひたり、汝は何故に行道清淨にして、著なき我を遮り立つや。(三六八)

濁りたる心あり、塵垢あるものにして、濁なく著なく塵垢を離れ、諸處に心解脱せる我を、汝は何故に遮りて立つや。」(三六九)

「年若くして、姿勝れたり、汝は出家して何をかなすや、袈裟衣を脱ぎ捨てよ、來れ、花咲ける林中に娛まん。(三七〇)

(一)花處によりて自ら「香氣を」起せる樹木は諸方に蜜味を散ず、初春は樂しき時季なり、來れ、花咲ける林中に娛まん。(三七一)

冠に花を著けたる樹木は又風に搖れて騷音をなす、汝若し獨り林間に入らば、汝に何の樂かある。(三七二)

猛獸の羣出沒し、狂象「のために」塵埃狼籍たり、人なくして、怖畏多き大林中に汝は伴なくして入らんと願へりや。(三七三)

黃金を以て造れる如く、(二)質多羅他園中の天女の如く逍遙す、迦尸國「に產し」細軟にして麗美なる衣服

によりて美しく喩へ方なし。（三七四）

汝若し樹林の中に住せんと欲せば、我汝の家僕とならん、（三）緊那利「に似て」柔かなる眼ある汝、我には汝よりも更に愛しき生物他に之なければなり。（三七五）

若し我が言に從はば若は安樂「ならん」、來れ、在家人の生活をなせ、（四）風なき樓閣の中に住せよ、婦女子等は汝のために走使せん。（三七六）

迦尸國產の細軟なる「衣服」を著け、「身を」裝飾せよ、華鬘（五）彩料と黃金摩尼眞珠と數多の異れる莊嚴の具とを汝のために作らん。（三七七）

善く塵垢を洗ひたる（六）被具ありて美しく、（七）上覆と敷具とを布きて新しく、旃檀材を以て飾り、高價にして樹精の香ある臥床に上り「臥せ」よ。（三七八）

譬へば蓮華の水より出でたるを（八）夜叉羅刹の守れるが如し、等しく汝梵行を修するもの、未だ己の肢體を用ゐざるに」、汝は老に至らん」。（三七九）

「死屍に滿ち、墓田を增すべき、敗壞の質なる身を、汝は喪心して之を見る、此處に汝は何の精をか認めたる。」（三八〇）

「眼は牝鹿の「其の」如く、山間なる緊那利の「其の」如し、我汝の眼を見てより欲樂愈愈增長す。（三八一）

蓮華の頂に似、塵垢なく、黃金に似たる顏の上に、我汝の眼を見てより欲種愈愈增長す。（三八二）

汝遠く去らんとも、我は長き睫毛と、淸き眼とを思ひ出ん、是れ汝緊那利の柔かなる眼あるもの、我には汝の眼より更に愛しきものなければなり」。（三八三）

「汝佛子を「捕へんと」求む、其は道なきに行かんと望み、月輪を戲具となさんと願ひ、須彌山を越えんと望むなり。（三八四）

人天兩世界に於て、今は我が貪欲を起すべき處ある

なし、我は」貪欲の」如何なるものなるかをも知らず、根本を併せ「聖」道によりて斷たれたるなり。(三八五)

火坑に投じたる「燃燒物」の如く、面前に置きたる毒器の如し、其が如何なるものなるかをも見ず、「聖」道によりて根本を併せ斷たれたるなり。(三八六)

「五蘊を」觀察せず (九)「而も」或は師を敎ふるものあらば、汝斯の如き「婦女」を誘惑せよ、(一〇)汝は此の識ある「須婆の」ために惱まん。(三八七)

罵詈せらるるにも禮敬せらるるにも、苦にも樂にも、我が正念は「常に」起立せり、有爲「の法」は不淨なりと知りて、我が心は一切處に汚るることなし。(三八八)

此の我は善逝の女弟子にして八支道の乘物に乘り行くものなり、「煩惱の」箭を拔き、漏を盡し、我は空屋に入りて樂む。(三八九)

我は木製の傀儡の出來好くして、美しく新なるを見たり、絲と串とを以て縛せられ、種種に舞ひ踊れり。(三九〇)

其の絲と串とを拔き、解き散らし、分分にして、跡なきに至りたる時、此處に其の何物にか心を住めんや。(三九一)

身は此「の傀儡」に喩ふべきものなりと、我に「智慧生せり」、此等の法なくしては「身は」存せず、法なくしては「身は」存することなし、此處に何物にか心を住めんや。(三九二)

猶ほ (一一) 雄黃を以て塗り、彩りて壁となせるを見るが如し、此處に汝の顚倒の見あり、人間の智慧は價値あるなし。(三九三)

目前に現れたる幻の如く、夢中の金樹の如く、衆人中にて「觀とせる」作りたる像の如き、愚者汝は虚なるものを「追うて」走る。(三九四)

〔眼は〕樹洞の中に置ける（一二）樹脂の團塊の如く、中部に泡〔狀のもの〕ありて涙を帶び、眼滓も亦此處に生ず、種種多樣の眼ありとせらる。」 （三九五）

眉目美しくして心に執著なき〔尼〕は〔眼を〕剔りて愛著を起さず、「今、（一三）汝の眼を持去れ」〔と云ひて〕、即時に其を彼の人に與へぬ。 （三九六）

彼の男の尼に對する貪愛の情も即時に滅び失せ、彼は尼に對ひて懺謝したり「梵行者に祥福あれ、〔我〕再び斯の如きことをなさじ」とて。 （三九七）

「斯の如き人を害ひ、恰も點したる火を抱くが如く、蛇を掴むが如くして、而も我に福あらんや、我を恕せよ。」 （三九八）

彼の尼は其〔の人〕より遁れ、最勝覺者の傍に來れり、勝れたる善業の相を見て、〔尼の〕眼は前の如くなりき。 （三九九）

【一】此等の樹木は軟風のために起れる花粉の風により己の花塵を自ら起せるが如くにして諸方に香氣を散ず。【二】Cittaratha 天上界の林園、種稱車又は飾車と譯すべし。【三】Kinnarī 緊那羅女。【四】直譯、樓閣(中)に風なくして住するもの。【五】Vaṇṇakaṁ 香料塗油と釋せり。【六】胸を覆ふもの。【七】長き毛の附きたる覆具。【八】直譯、非人。夜叉羅刹の受用し、憑依守護せる蓮華は人間は之に近づくことを得ず、其のまま朽ち果つべし。【九】師は數ふるにあらずして、却つて數へらるるの意。【一〇】汝は智識ある此の須婆を誘惑するがために現在及び未來に苦惱を受けん。【一一】Haritālaṁ, yellou orpimnt, Ochre の譯語を與ふ。【一二】Vaṭṭanī 註して Lākhāyagnḷikā とせり、Lākhā は英語の lac にて樹脂又は蟲類より取りたる一種の染料なり、Rhys Davids 夫人は譯して alittle ball とせり、小球の意にて眼球を指せるなり。【一三】己の有なれども彼に與へたる故、汝の眼と云へるなり。

四十四頌品第十五

大地の醍醐なる波吒利子城、（一）拘蘇摩の名ある都市に於て、釋迦族の家に生れたる二人の有德の尼〔ありき〕。 （四〇〇）

其處なる一人を（二）仙婢、第二者を（三）菩提と〔云ひて〕

戒德を具し、(四)禪慮を樂とし、多聞にして、煩惱を撥へり。 (四〇一)

彼等は乞食のために「處處を」回り、飯食訖りて鉢を洗ひ、人なき「處に」安坐して、二人は此等の事を語れり。 (四〇二)

「大姉仙婢、汝は眉目美しく、年齒未だ朽ちず、何の失を認めてか汝は出離に心を傾けたるぞ」。 (四〇三)

斯の如く問はるるや、說法に巧なる仙婢尼は「其の」人なき處に於て此の言を語げて云へり「聞けよ、菩提我が出家せしままを。 (四〇四)

(五)優禪尼と云ふ秀でたる都に於て、我が父は德行具はれる長者なりき、我は其の一女にして愛すべく、喜ぶべく、而して仁慈なりき。 (四〇五)

其より(六)沙祇多の名族より「遣はされたる」我が媒介者は來れり、「名族とは」財多き長者にして、父は其の(七)婦として我を與へぬ。 (四〇六)

夕及び旦には舅と姑とに近づき頭を以て足下に禮拜し、敎へられたるままに敬禮せり。 (四〇七)

我が夫の姉妹や兄弟や近親や、其を(八)一たび見ても(九)畏れ憚りて座を讓りぬ。 (四〇八)

食物、飲料、又は噉食の其處に貯へられしものは、分ち、持來し、而して「適するの」人に適するものを與へぬ。 (四〇九)

起るには時に遲るることなくして家に赴き、手と足を洗ひ、掌を合せて夫の處に行けり。 (四一〇)

櫛と顏料と塗藥と鏡とを携へ、婢女の如くに自ら夫に裝飾せしめぬ。 (四一一)

我は手から飯を炊き、手から器物を洗ひぬ、母の其の一子に對するが如く、同じく我は「我が」夫に事へぬ。 (四一二)

斯く此の貞淑にして最善を盡し、慢心を除き、〔疾く〕起き、精勤にして、婦德具はれる我を〔我が〕夫は嫌へり。 （四一三）

かれ〔夫〕は母と父とに語げて云へり、「許を與へよ、我は去らん、我仙婢と共に棲まじ、我同じ家に共に住はじ。」 （四一四）

「見よ、然く云ふことなかれ、仙婢は賢くして、智慧あり、〔疾く〕起きて、精勤なり、兒よ、汝何事をか喜ばざる。」 （四一五）

「彼の女は些も我を害ふにあらず、而も我は仙婢と共に棲はじ、嫌はしきものは我に要なし、許を與へよ、我は去らん。」 （四一六）

彼の語を聞きて姑と舅とは我に問へり「汝何としてか彼の怒に觸れたる、あからさまに、ありしままを語れ」と。 （四一七）

我は何事にも〔彼の〕怒に觸れしことなく、〔彼を〕害ひしことなく、〔彼の失を〕算へしことなし、夫の我に對して怒るが如き惡語を、我奈何で之をなすことを得べき。」 （四一八）

憂ひ惑へる彼等〔二人〕は（一〇）其の兒の意に逆はず、苦悶の中に、我を〔我が〕父の家に送り還して〔云へり〕、「美しき吉祥神よ、我等は敗られぬ」と。 （四一九）

其より父は我を次なる富める家に與へぬ、〔第一の〕長者の我を得て〔拂ひたる〕身代の半を以て。 （四二〇）

我彼の家に住むこと一箇月なりしが、其より彼も亦我を追へり、假令我は婢女の如く勤みて仕へ、貞淑にして婦德具はりたりと雖も。 （四二一）

乞食のために徘徊せる〔一人の男の〕自ら制し〔他を〕制する〔に堪ふる〕ものに我が父は云へり「汝我が女婿とならん、襤褸衣と乞鉢とを捨てよ」と。 （四二二）

彼亦住むこと半箇月なりしが、其より父に語げて云へり「我に襤褸衣と乞鉢と帽とを還せ、再び乞食のために流離せん」と。 (四二三)

其の時父と母と、及び我があらゆる (二) 親族は、一團となり、彼に語げて云へり「此處に汝何事をか成就せざらん、汝のために「我等の」爲すべきことを疾く云へ。」 (四二四)

斯く問はれたる彼は答へて云へり「我が心「自由なること」を得ば我は足れり、我は仙婢と共に棲まじ、我同じ家に共に住はじ。」 (四二五)

追はれて去れり彼は、我亦獨り思へり、「許を求めて出行かん、死せんがために、或は出家せん」と。 (四二六)

時に大姉 (三) 勝施は、乞食の爲めに遊行しつつ、父の家に來れり、「彼の女は」持律博聞にして戒德具はれり。 (四二七)

彼「の尼」を見るや我は起ち、我は尼のために座席を設けしめ、坐したる「尼」の足を禮拜し、食物を奉施したり。 (四二八)

食物と飲料と啖食と、其處に貯へありしものを飽まで薦めて云へり、「大姉、我は出家を願ふ」と。 (四二九)

時に父は我に語げて云へり、「我が女、(三) 此處にありて其の法を行へ、食と飲とを以て沙門と婆羅門とを供養せよ」と。 (四三〇)

時に我悲泣合掌して父に語れり、「我邪業を犯せり、我之を滅さん」と。 (四三一)

其より父は我に語りて云へり「菩提と最勝法とを成ぜよ、兩足中の長者なる「佛」の證得し給ひし涅槃を得よ」と。 (四三二)

母と父とを敬禮し、又總て親族の羣を「敬禮」し、出家七日にして三明に達したり。 (四三三)

我は我が七生を知る、某の生に某の果報あり、結果ありと、汝がために之を說かん、心を一にして傾聽せよ。（四三四）

〔往昔〕（一四）エーラカカッチャの都に於て、我は財豐かなる金工なりき、若氣のために心狂ひて我は他人の婦を犯せり。（四三五）

我は其より死して地獄の中に煮られ、苦を受くると久しく、其より出でて牝猿の胎にやどれり。（四三六）

生れて七日にして猿羣の長なる大猿は我が睾丸を拔き取りたり、これ此の我が〔曾て〕他人の婦を姦したるの業果なり。（四三七）

我は其より死し、往にて身を（一五）仙陀婆の林中に、隻眼跛足の牝山羊の胎に身を托せり。（四三八）

我精子を除かれ、幼兒を負ひ步くこと十有二年、蟲類に惱まされて病に罹れり、これも我他人の婦を姦したるが故なり。（四三九）

我は其より死して牛商の有てる牝牛に生れぬ。赤きと（一六）樹脂の如き犢にして、去勢せられて十二箇月の間、（四四〇）

我は再び犂と車とを挽けり、盲にして惱み〔且つ〕病めり、これ我他人の婦を犯したるが故なり。（四四一）

其より我は死し市の街路に沿へる婢女の家に生れ、女性にも將男性にもあらざりき、これ我他人の妻を犯したるを以てなり。（四四二）

年三十歲にして我は死し、馭者の家に女兒と〔なりて〕生れぬ、貧にして財尠く、富みたる人に夥しき負債ある〔家に〕。（四四三）

其の後〔負債の〕增し加はり殖ゆるや、隊商の（一七）主は我が泣き悲むを主の家より引き行けり。（四四四）

其より十六歲の時、彼の〔商主の〕兒の名を（一八）山奴

と呼べるもの、成年に達したる我を見て、戀慕したり。(四四五)

彼には他に妻ありき、行善く德具はり、譽あり、夫を魅するものたり、我此〔の夫に〕憎惡の情を起さしめぬ。(四四六)

我が婢女の如く事ふるを捨てて、夫の去るはこれ〔我が〕此の業果なり、〔而して〕我は今此〔の業果〕を盡したり。」(四四七)

【一】Kusuma 拘(屈)蘇摩、此に華と譯す、波吒利子城の古名なりしが如し。【二】Isidāsī. 【三】Bobhī. 【四】世間出世間の禪定を樂とせるの意と譯す。【五】Ujjenī. 【六】Sāketā 【七】子の妻。【八】ちらりと見たるのみにて。【九】Nibbiggā 註には Saṅgantvā 會ひて、出迎へてと註すれど如何にや、ni+vij なれば、畏る、震ふ、驚き悸るなどの意と見るべし。【10】見を護り。【一一】我があらゆる親族群の圍。【一二】Jinadattā 時那達多。【一三】出家せず家にありての意。【一四】Erakakaceha. 【一五】Sindhava 辛頭地方。【一六】三九五偈の註を見よ。【一七】己の父なる馭者を云ふ。【一八】Giridāsa.

大集品第十六

(一)マンターヴチーの都に於て(二)コンチャ王の首妃に女兒あり、(三)スメーダー〔と呼ぶ聖の〕敎によりて美しかりき。(四四八)

彼の女は德行を具へ、演說巧に、博聞にして、佛の敎に於て調攝したり、共に父母に近づきて云へり(四)「母よ父よ〔我が言を〕聞け。(四四九)

我は涅槃を樂とす(五)生成せるものは假令天界にありとも常住にあらず、況や諸欲は空虛少味にして苦惱〔を與ふること〕多きに於てをや。(四五〇)

諸欲は辛烈にして蛇に譬へられ、愚夫は之に迷惑す、彼等は長時地獄に投ぜられて、苦み害を受く。(四五一)

常に身語と意とによりて攝することなく、邪業を犯す愚夫は惡趣にあり己の邪業を識りて悲む。(四五二)

(六)彼等愚夫は劣智慧、無思慮にして、苦集［の理］に闇く、說き示さるるも、無智にして聖諦を知ることなし。」(四五三)

(七)「母よ、尊き佛の說き給ひし諦理を知らずして、生有を悅び、天人の間に生るることを希ふものぞ多き。」(四五四)

「天人の間にも、無常なる生有の上に常住の生あるとなし、愚夫は再三出生すべきことを恐れず。(四五五)

(八)四惡道と(九)二趣とは、如何にして得らるるぞ、惡趣に入れるものは(10)泥犂にありて、出家を得ることなし。(四五六)

［母も父も］共に我が十力尊の言敎に於て出家することを許し給へ、［餘事に］念なくして生死捨離の爲に努力せん。(四五七)

生成して歡喜せられ、［而も］堅實なき泡沫の身に、奈何で［喜ぶことを］なさん、生有の欲愛を滅さんがために、許し給へ、我出家せん。(四五八)

諸佛の出世は、之を避けなば機を失はん、［今や好］機得らる、戒德、梵行、我は生を終るまで、之を瀆すことなけん。」(四五九)

斯の如くスメーダーは云へり、「母よ、父よ、我は在家のものとしては、食物を受けじ、我は死に從はんのみ」と。(四六〇)

母は苦み惑ひて泣き、父は亦常に彼の女を愛でてありしが、［今］樓閣上に於て倒れたる［女］を諭さんと努めたり。(四六一)

「娘よ、起て、悲みて何の效かある、汝は嫁がせられたり、(11)ヴーラナヴチー［の都なる］王なる(12)アニカラッ トーは容姿端麗なり、汝は彼［の王］に嫁けられたり。(四六二)

汝はアニカラッタ王の配者、首妃とならん、娘よ、戒と梵行と出家とはなすこと難し。（四六三）

王には威勢あり財貨、主權あり、汝榮耀安樂に、年若き身にして諸欲を享けよ、娘よ、汝の〔婿〕決めせよ。」（四六四）

時にスメーダーは彼等に語げて云へり「斯の如きことあるべからず、生は堅質ならず、出家あるべく、然らざれば死〔あるべし〕、我が決擇は之にこそあらめ。（四六五）

不淨にして、惡臭を漏し、怖るべき腐壞の身、一たび滲出して不淨に滿ちたる死屍、革嚢は如何なるものぞと、（四六六）

身は厭ふべく、肉と血とを以て塗られ、蟲類の棲處たり、鳥類の食物たることを知れる我〔が身〕は、何が故にか與へられたる。（四六七）

意識去りたる身は久しからずして墓所に運ばれ、厭ひ嫌へる親族等の爲に捨てられて、宛然木片の如くなり。（四六八）

他の食物となるべき此〔の屍〕を墓所に捨てて、厭ひ嫌へる〔輩〕は洗浴をなす、生みたる父母〔然り〕、況や常の人に於てをや。（四六九）

堅質なく、骨と筋とを集めて成せる肉身、涎涙、尿屎に滿てる腐壞の身に愛著せり。（四七〇）

若し此〔の身〕を切開して内を外に轉せば、其の臭氣に堪へずして生みたる母すら之を厭はん。（四七一）

蘊處界は造作〔の法〕、生に基し、苦にして如實に厭ふべきものなりと云ふ、如何なれば我〔夫の〕決擇を願はん。（四七二）

日日新に〔磨ぎたる〕矛三百を以て、身を刺すこと百年ならんも（三）〔此の〕割截ぞ勝れる、〔之によりて〕苦惱

亦盡されん。
斯の如くして師の言を知れるもの、若し〔此の〕割截を是なりとせば、〔之によりて〕亦其の苦惱盡されん、（四七三）
〔師の言とは〕「再再惱さるる此等の人人の輪廻は久し」となり。（四七四）
天人、人間と、畜生、阿修羅界、餓鬼と地獄とに於て割截を加へらるることは限りあるなし。（四七五）
（一四）地獄に〔入れるもの〕、惡趣に墮つるもの、苦を受くるものには〔割截の加へらるること〕多し、天上界にも依處なし、涅槃の樂に過ぐる〔樂は〕あらず。（四七六）
（一五）十力尊の言敎に心を委ね、〔他に〕力を用ふること少く生死を捨てんがために精進するもの、彼等は涅槃に達したるなり。（四七七）
父よ、今日こそは我出家をなさめ、實なき榮耀に何の〔要か〕ある、我諸欲を脫れ、棄て、（一六）多羅樹の餘株の如くなせり。」（四七八）

彼の女は父に向ひて斯くの如く云へり、彼女を乞ひしアニカラッタ王は、時近づくや、曙光〔の如き光明〕に包まれ、求婚のために赴けり。（四七九）
時にスメーダーは黑く濃く〔且〕柔かなる髮を刀を以て斷ち、樓閣を閉して第一禪に入りたり。（四八〇）
彼の女の此處に入定せる時、アニカラッタ王は亦都に來れり、樓閣中にありてスメーダーは無常想を修習したり。（四八一）
彼の女は思念せしが、アニカラッタは急ぎて上り來り、如意寶珠、黃金を以て身を飾れる〔彼王〕は掌を合せてスメーダーに請へり。（四八二）
王には威勢、財貨、主權あり、汝榮耀に、安樂に、年若き身にして諸欲を享けよ、諸欲の樂は世に之を享くること難し。（四八三）

王國は汝に托せられたり、榮耀を樂み、施與をなせ、
愁然たること莫れ、汝の父母は苦悶せり。」 (四八四)
其の時、諸欲を願はず、愚癡を脱れたる彼スメーダー
は其「の王」に語りて云へり「諸欲を樂むこと莫れ、諸欲
に患難を見よ。 (四八五)
(一七) マンダーターは四洲の王にして諸欲を享くるも
のの最上者なりき、「而も」飽かずして死し、其上の欲
は滿されざりき。 (四八六)
雨神七寶を普く十方に降らすとも、諸欲に飽くことな
けん、人は「諸欲に」飽かずしてぞ死する。 (四八七)
諸欲は劍と (一八) 槍とに喩へられ、諸欲は蛇の頭に喩へ
られ、燒く「が故に」炬火に喩へられ、曝されたる骨に
似たり「とせらる」。 (四八八)
諸欲は無常にして堅固ならず、苦多くして毒大なり、
熾熱したる鐵丸の如く、害惡を根とし苦を果とす。
諸欲は樹果に喩へられ、苦なる「が故に」肉臠に喩へ (四八九)
らる、諸欲は欺瞞の質なるによりて、夢に喩へられ、
借りたる「物品」に喩へらる。 (四九〇)
諸欲は (一九) 槍に喩へらる、疾病・瘍腫・害惡・災禍なり、
火坑の如く、害惡を根とす、怖畏なり、殺害なり。
斯の如く諸欲には數多の苦痛伴ひ、障礙ありと唱へ (四九一)
らる、王よ、去れ、我「此の」生有に於て己の信頼すべ
き所「を得」ず。 (四九二)
己の頭燒かれ、老死追ひ來るに、他は我がために何
をなすや、此「の老死」を滅さんがため、努力すべき
なり。」 (四九三)
此「の女」は、戸邊に至り、地上に坐して、泣き悲め
る父母と、アニカラッタ王とを見て、之に語げて云

へり。

「愚なる輩の輪廻は長く、果なき「世」に父死し、同胞害せられ、又は己害せられて、泣き悲むことも再再なり。（四九四）

涙と乳と血と輪廻との果なきことを思へ、生類の輪廻を思ひ、積み集めたる骸骨を「思へ」。（四九五）

（二〇）涙・乳・血は、四大海に譬へらるるを思ひ、「一劫」の間骸骨を積み集むれば（二一）毘布羅山に等しきことを思へ。（四九六）

果なき「世」に輪廻するものの父母を閻浮洲の地に較ぶるに、（二二）「之を」棗核大の丸「となすも、（二三）之に比するに」足らず。（四九七）

草や材や技や葉や、果なく「輪廻する」ものの父や父の父やに比ぶる時は（二四）分ちて四指量とすとも、（二五）「其の數」に比するに足らずと思へ。（四九八）

盲龜あり、又東の海に於て西より「漂ひ來る」軛に穴ありと思ひ、其「の盲龜」の頭を「之に」投入せんことを「思へ」、人身の得「難き」は之に喩へらる。（四九九）

泡沫の團塊に譬へられ、堅質なく、穢多き色身を思へ、諸蘊の無常なるを見、地獄には割截多きことを思へ。（五〇〇）

再再此の生、又は彼の生にありて、墓田を擴ぐる身を思ひ、また鱷魚の怖しきを思ひ、四種の諦理を思へ。（五〇一）

（二六）甘露の存するに、汝は何の「要ありて」か五辛を嘗むるや、是れ總て欲樂は、五辛よりも更に辛棘なればなり。（五〇二）

甘露の存するに、汝、熱惱の諸欲に何の「要かある」、是れ總て、欲樂は燃え、糞え、怒り、沸きてあればなり。（五〇三）

（二七）非敵の存するに、汝多の敵を有てる諸欲に何「の要かある」、諸欲には衆多の敵ありて、王・火・盗・水及び怨憎の徒に等し。〔五〇五〕

（二八）解脱の存するに、汝戕殺繫縛ある諸欲に何「の要かある」、是れ諸欲には戕殺あり繫縛あり、諸欲を貪るものは苦惱を受くればなり。〔五〇六〕

火を點じたる草の炬は、之を把れるものを燒きて、放てるものを燒かず、諸欲は炬火に譬へらる、之を放たざるものを燒く。〔五〇七〕

少少の欲樂のために、廣大なる安樂を捨つること莫れ、（二九）衆毛魚の如く曲鉤を嚥み、後に至りて苦しむこと莫れ。〔五〇八〕

諸欲に欲を制すること、鎖にて繫がれたる狗の如くせよ、是れ諸欲は汝を「害すること」、餒えたる（三〇）旃陀羅の狗を「害する」が如くすべければなり。〔五〇九〕

汝、諸欲に心を傾くるものは、限なき苦惱と、衆の心憂とを受けん、「されば」堅固ならざる諸欲を捨てよ。〔五一〇〕

（三一）不老の存するに、疾く老ゆる諸欲汝に何「の要かある」、あらゆる生はあらゆる處にありて死と病とに捕へらる。〔五一一〕

之は不老なり、之は不死なり、之は憂なく、老死なく、敵なく、混雜なく、失誤なく、怖畏なく、熱惱なき道なり。〔五一二〕

此の不滅は衆の人の得たる所、正しく心を定むるものは今日亦之を得べきなり、「されど」努力せざるものは「得ること」能はじ。」〔五一三〕

諸行の運行に樂を得ざる所のスメーダー尼は上の如く云へり、アニカラッタ王を敬へたる彼スメーダー尼は「其の」髮を地に投せり。〔五一四〕

彼アニカラッタ〔王〕は座を起ち、掌を合せ、尼の父に乞ひて云へり、「スメーダーの出家を許せ、彼の女解脫と諦理とを見るもの〔とならん〕。」 (五一五)

父母に許されて出家しぬ、憂と畏に怖ぢたる〔スメーダー〕は最上果を學びつつ六神通を證せり。 (五一六)

王女〔スメーダー〕の得たる涅槃は希有、未曾有なりき、最後時に於ける宿生を如實に說き明せり。 (五一七)

(三二)拘那含牟尼世尊の出世し給ふや、新しく建立したる僧伽藍にありて、(三三)三人の朋友たる人人、精舍の奉施を行へり。 (五一八)

十たび七たび十百たび又百百たび、天人中に出生したり、況や人中に於てをや。 (五一九)

諸天中にありて大神通を具有したり、如何に況や人間中に於てをや、我は〔具〕七寶者、〔轉輪聖王〕の首妃女寶なりき。 (五二〇)

(三四)師の敎に於て堪忍せる、之ぞ因、之ぞ源、之ぞ〔其の〕根なる、之第一の連關、これ法を樂むものの涅槃なり。」 (五二一)

(三五)卓智者の言敎を信ずるものは斯の如く云ひ、出生を厭ひ、厭ひて而して欲より脫る。 (五二二)

【一】Mantāvatī. 【二】Koñca. 【三】Sumedhā. 【四】原文には ubhaya 雙者と出せり。 【五】Bhavagatam 生有を受けたるもの、又は生を受くることの意、四五四・四五五・四六五・四九二等右偈の生、生有等皆同一原語なり。 【六】苦果生起の上に障礙せられて。 【七】Ammā 己等の女なれども尊びて母と呼ぶなり、國語のアマは之より來れり。 【八】Vinipāta 墮と譯すべし、地獄・餓鬼・畜生・修羅の四道を云ふ。 【九】Gati 趣・行の意、天上・人間の道を云ふ。 【一〇】Niraya 四惡趣を指す。 【一一】Vāraṇavatī 【一二】Anikaratto. 【一三】三百の矛を以て刺さるること。 【一四】之は(一)地獄に於て(二)他の惡趣に墮せるもの(三)畜生道などに生れて苦を受くるものの三者を云ふ。 【一五】佛世尊には十種の尊き力あり、故に佛を十力と云ふ。 【一六】多羅樹 (Tāla) は其の幹を切りて株のみを餘す時は再び生ひ出ることとなし。 【一七】Mandhātā. 語を pita+arnpa+āvnta と分解せり。 【一八】 【一九】或は槍と投槍とに、或は槍の刃に喩へらる。 【二〇】一人のもの長時輪廻轉生し

て種種のものに生れ變る、其の間に流したる涙、飲みたる乳、爭鬪などの際に流したる血、又は其の殘骸を積みたるものの多かるべきを云ふ。【二一】王舍城に近き處にある山。【二二】閻浮洲の地。【二三】父母の數。【二四】草材枝葉を。【二五】父や父の父やの數。【二六】涅槃の異名。【二七】涅槃の異名。【二八】涅槃の異名。【二九】Puthuloma 面部に多の毛を有する一種の魚なりと釋す。【三〇】Candāla(チャンダーラ) 印度の賤民の一種。【三一】涅槃の異名。【三二】Koṇāgamana(コーナーガマナ) 【三三】三人の友とは自身とダナンヂヤーニー(Dhanañjānī)とケーマー(Khemā)なりと云ふ。【三四】拘那含牟尼佛を指す。【三五】佛。

國譯長老尼偈 終

大集品第十六

大正七年二月廿五日印刷
大正七年二月廿八日發行

國譯大藏經 第十二帙

【非賣品】

編輯兼發行者 國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者 鶴田久作
東京市本鄕區西片町十番地

印刷者 中島藤太郎
東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷所 神田印刷所
東京市神田區錦町三丁目一番地

發行所 國民文庫刊行會
電話本局七三二一番
振替東京一八五七二番

國譯大藏經

自四十五
至四十八

國譯大藏經

第十三帙